

仲台遺跡  
栗山遺跡  
柳沢A遺跡  
発掘調査報告書

1994

なか だい  
仲台遺跡

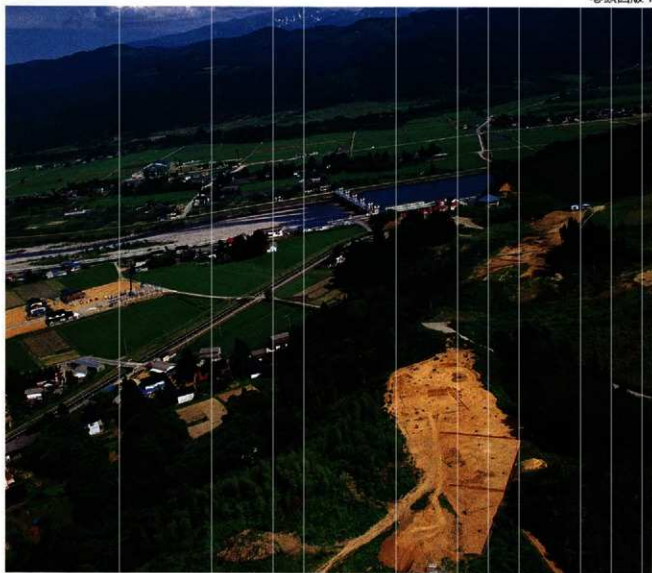
くり やま  
栗山遺跡

やなぎ さわ  
柳沢A遺跡

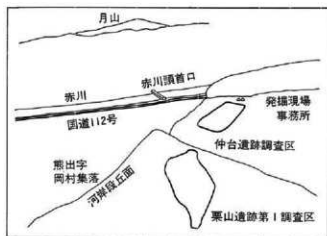
発掘調査報告書

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



仲台遺跡・栗山遺跡とその周辺(上空北から)







仲台遺跡B地区(上空北から)



仲台遺跡SK 3(北から)



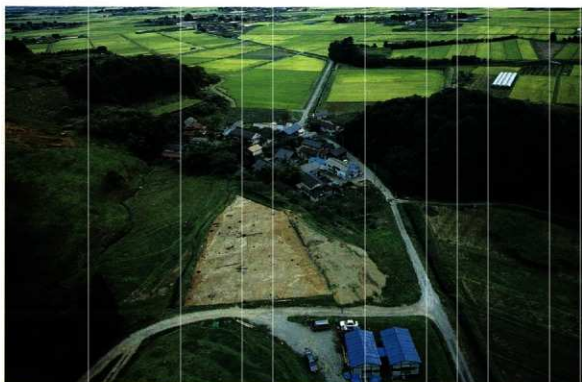
栗山遺跡ST50住居跡発掘状況(南東から)



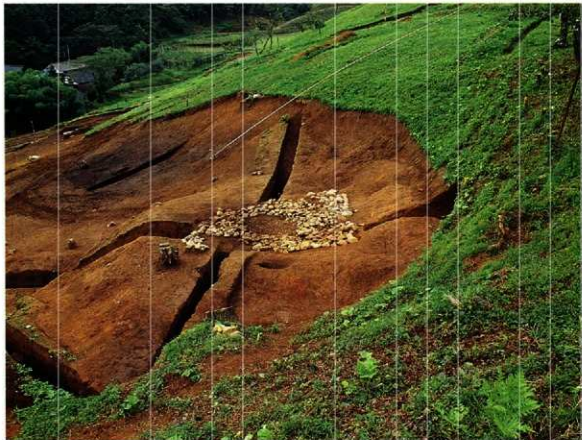
栗山遺跡ST14住居跡発掘状況(南から)



柳沢 A 遺跡調査区全景(上空北から)



柳沢 A 遺跡より庄内平野を望む(上空南東から)



柳沢 A 遺跡 SM50 塚方形石集石検出状況 (北から)



柳沢 A 遺跡 SM50 珠洲系陶器出土状況 (東から)



## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、仲台遺跡・粟山遺跡・柳沢A遺跡の調査成果をまとめたものです。

仲台遺跡・粟山遺跡は山形県の北西部に位置する東田川郡朝日村に、柳沢A遺跡は朝日村の北西に隣接する東田川郡柳引町にあります。朝日村はワイン・タキタロウの里など「村おこし」が盛んで、柳引町は「黒川能の里」として有名です。

調査では仲台遺跡から縄文時代晩期、粟山遺跡・柳沢遺跡から縄文時代中期の生活の跡が見つかり、この周辺の当時の様子を知る一資料を得ることができました。また、柳沢A遺跡では、室町時代の塚や石塔も確認されました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木場 清耕

## 例 言

- 1 本書は東北横断自動車道酒田線（朝日～酒田間）建設工事に係る「仲台遺跡」「栗山遺跡」「柳沢A遺跡」の発掘調査報告である。
- 2 調査は、日本道路公団仙台建設局鶴岡工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター  
遺 跡 名 仲台遺跡（AAHND） 遺跡番号 昭和63年度登録  
所 在 地 山形県東田川郡朝日村大字熊出字仲台  
調査期間 発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日  
現地調査 平成5年5月12日～平成5年10月25日 108日間  
調査担当 調査研究課長 佐々木洋治  
主任調査研究員 野尻 侃  
調査研究員 齊藤 主税

遺 跡 名 栗山遺跡（AAHKY） 遺跡番号 昭和63年度登録  
所 在 地 山形県東田川郡朝日村大字熊出字栗山  
調査期間 発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日  
現地調査 平成5年5月12日～平成5年7月14日 46日間  
調査担当 調査研究課長 佐々木洋治  
主任調査研究員 野尻 侃  
調査研究員 齊藤 主税 水戸 弘美  
嘱託職員 青山 崇

遺 跡 名 柳沢A遺跡（AKBYS A） 遺跡番号 1945  
所 在 地 山形県東田川郡楯引町大字西荒屋字柳沢  
調査期間 発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日  
現地調査 平成5年7月19日～平成5年9月29日 43日間  
調査担当 調査研究課長 佐々木洋治  
主任調査研究員 野尻 侃  
調査研究員 齊藤 主税 水戸 弘美  
嘱託職員 青山 崇

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、日本道路公団仙台建設局鶴岡工事事務所、朝日村教育委員会、楯引町教育委員会の協力を得た。現地調査と報告書作成にあたって、伊藤清郎、植松芳平、川崎利夫、酒井忠一、酒井英一、鈴木拓也、戸川安章の各氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

- 5 本書の作成・執筆は齊藤主税、水戸弘美、青山 崇が担当した。編集は安部 実、伊藤邦弘が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおり実施した。
- 仲台遺跡 遺構の写真実測 株式会社パスコ  
打製石器・土器の一部の写真実測 株式会社シン技術コンサル  
放射性炭素年代測定 株式会社パレオ・ラボ
- 栗山遺跡 遺構・打製石器・土器の一部の写真実測 株式会社シン技術コンサル  
放射性炭素年代測定 株式会社パレオ・ラボ  
自然科学分析 バリノ・サーヴェイ株式会社
- 柳沢A遺跡 遺構の写真実測 株式会社シン技術コンサル  
自然科学分析 バリノ・サーヴェイ株式会社
- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡 例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。
- ST…住居跡 SK…土坑 SM…塚 SP…単独の柱穴  
EP…住居跡に伴う柱穴 EL…炉跡 EU…埋設遺構  
RP…一括土器 RQ…石器 S…礫 C…炭化物
- 2 遺構番号は現地調査段階での番号を報告書でも踏襲した。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
- 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
  - グリッドの南北軸は、仲台遺跡・栗山遺跡はN-38°00'-W、柳沢A遺跡はN-78°30'-Wをそれぞれ測る。
  - 遺構実測図は1/10・1/20・1/40・1/60・1/80・1/160・1/300・1/400縮図で採録し、各挿図ごとにスケールを付した。
  - 遺構計測表中の( )内の数値は検出部分の計測値を示している。
  - 遺物実測図、拓影図は1/2・2/3・1/3・1/4・1/6で採録し各々スケールを付した。
  - 仲台遺跡の遺物番号は通し番号で付し、栗山遺跡・柳沢A遺跡は挿図ごとに付け、図版のみの掲載は( )で示した。
  - 遺物観察表中の( )内の数値は、図上復元による推計値または残存値を示している。

# 目 次

第I章 調査の経緯 .....	1
第II章 遺跡の立地と環境	
1 仲台遺跡と栗山遺跡 .....	1
2 柳沢A遺跡 .....	5
第III章 仲台遺跡	
1 調査の概要 .....	7
2 遺構の分布 .....	7
3 遺構 .....	8
4 遺物 .....	10
5 まとめ .....	33
第IV章 栗山遺跡	
1 調査の概要 .....	35
2 遺跡の概観 .....	35
3 遺構と遺物 .....	38
4 まとめ .....	58
第V章 柳沢A遺跡	
1 調査の概要 .....	59
2 遺跡の概観 .....	59
3 遺構と遺物 .....	64
4 まとめ .....	86
報告書抄録 .....	90
附編	
I 放射性炭素年代測定結果 .....	93
II 栗山遺跡における自然科学分析 .....	95
III 柳沢A遺跡における自然科学分析 .....	115

## 挿 図

第1図 仲台・栗山・柳沢A遺跡位置図 … 2	第33図 栗山遺跡遺物(2) …… 49
第2図 仲台・栗山遺跡調査区概要図 …… 3	第34図 栗山遺跡遺物(3) …… 50
第3図 柳沢A遺跡調査区概要図 … 5	第35図 栗山遺跡遺物(4) …… 51
第4図 仲台遺跡遺構配置図 …… 12	第36図 栗山遺跡遺物(5) …… 52
第5図 仲台遺跡B地区全体図 …… 13	第37図 栗山遺跡遺物(6) …… 53
第6図 仲台遺跡S T 1住居跡 …… 15	第38図 栗山遺跡遺物(7) …… 54
第7図 仲台遺跡S K 3土坑 …… 16	第39図 柳沢A遺跡 第1調査区遺構配置図 …… 60
第8図 仲台遺跡S K 4・5土坑 … 17	第40図 柳沢A遺跡第1調査区基本層序 … 61
第9図 仲台遺跡S K 6土坑 …… 18	第41図 柳沢A遺跡第2調査区概要図 …… 62
第10図 仲台遺跡E L 7・42炉跡 … 19	第42図 柳沢A遺跡第2調査区基本層序 … 63
第11図 仲台遺跡遺物(1) …… 20	第43図 柳沢A遺跡土坑(1) …… 65
第12図 仲台遺跡遺物(2) …… 21	第44図 柳沢A遺跡土坑(2) …… 66
第13図 仲台遺跡遺物(3) …… 22	第45図 柳沢A遺跡遺物(1) …… 67
第14図 仲台遺跡遺物(4) …… 23	第46図 柳沢A遺跡遺物(2) …… 68
第15図 仲台遺跡遺物(5) …… 24	第47図 柳沢A遺跡遺物(3) …… 69
第16図 仲台遺跡遺物(6) …… 25	第48図 柳沢A遺跡遺物(4) …… 70
第17図 仲台遺跡遺物(7) …… 26	第49図 柳沢A遺跡S M50(1) …… 72
第18図 仲台遺跡遺物(8) …… 27	第50図 柳沢A遺跡S M50(2) …… 73
第19図 仲台遺跡遺物(9) …… 28	第51図 柳沢A遺跡遺物(5) …… 75
第20図 仲台遺跡遺物(10) …… 29	第52図 柳沢A遺跡遺物(6) …… 76
第21図 仲台遺跡遺物(11) …… 30	第53図 柳沢A遺跡遺物(7) …… 77
第22図 仲台遺跡遺物(12) …… 31	第54図 柳沢A遺跡遺物(8) …… 78
第23図 栗山遺跡第1調査区遺構配置図 … 36	第55図 柳沢A遺跡遺物(9) …… 79
第24図 栗山遺跡基本層序 …… 37	第56図 柳沢A遺跡遺物(10) …… 80
第25図 栗山遺跡S T 16住居跡、 E L 34炉跡 …… 41	第57図 柳沢A遺跡遺物(11) …… 81
第26図 栗山遺跡S T 50住居跡 …… 42	第58図 柳沢A遺跡参考資料 羽黒町高寺出土板碑 …… 82
第27図 栗山遺跡S T 14住居跡、E U 175 … 43	
第28図 栗山遺跡S T 15住居跡 …… 44	
第29図 栗山遺跡柱穴群 …… 45	
第30図 栗山遺跡25～27—59～62 グリット遺構群 …… 46	
第31図 栗山遺跡土坑 …… 47	
第32図 栗山遺跡遺物(1) …… 48	

## 表

表 1	柳沢A遺跡第2調査区に関連する略年表	6
表 2	仲台遺跡石器計測表	32
表 3	栗山遺跡遺物観察表	55
表 4	栗山遺跡遺物計測表	56
表 5	柳沢A遺跡遺構観察表(1)	83
表 6	柳沢A遺跡遺構観察表(2)	83
表 7	柳沢A遺跡遺物観察表(1)	83
表 8	柳沢A遺跡遺物観察表(2)	84
表 9	柳沢A遺跡遺物観察表(3)	85

## 図 版

巻頭図版 1	仲台遺跡・栗山遺跡空中写真
巻頭図版 2	仲台遺跡空中写真
巻頭図版 3	仲台遺跡B地区・SK 3
巻頭図版 4	栗山遺跡ST50・ST14完掘状況
巻頭図版 5	柳沢A遺跡全景
巻頭図版 6	柳沢A遺跡SM50方形集石・珠洲系陶器出土状況
図版 1	仲台遺跡空中写真
図版 2	仲台遺跡空中写真
図版 3	仲台遺跡遠景・近景
図版 4	仲台遺跡ST 1
図版 5	仲台遺跡SK 3
図版 6	仲台遺跡SK 4・5
図版 7	仲台遺跡SK 6
図版 8	仲台遺跡EL 7
図版 9	仲台遺跡EL 42
図版10	仲台遺跡ST 1・SK13・EP12・EP15他
図版11	仲台遺跡遺物出土状況
図版12	仲台遺跡A・B地区基本層序
図版13	仲台遺跡調査区完掘状況
図版14	仲台遺跡調査風景
図版15	仲台遺跡発掘体験学習会
図版16	仲台遺跡遺物
図版17	仲台遺跡遺物
図版18	仲台遺跡遺物
図版19	仲台遺跡遺物

- 図版20 仲台遺跡遺物  
図版21 仲台遺跡遺物  
図版22 仲台遺跡遺物  
図版23 仲台遺跡遺物  
図版24 仲台遺跡遺物  
図版25 仲台遺跡遺物  
図版26 仲台遺跡遺物  
図版27 栗山遺跡遠景・全景・基本層序  
図版28 栗山遺跡作業風景・調査説明会風景  
図版29 栗山遺跡S T 16・E L 34  
図版30 栗山遺跡S T 15  
図版31 栗山遺跡S T 15・S T 14・柱穴群  
図版32 栗山遺跡S T 50  
図版33 栗山遺跡25~27—59~62G遺構群・S K 19・S K 20・E U 175  
図版34 栗山遺跡S K 13・S K 17  
図版35 栗山遺跡第2調査区・遺物  
図版36 栗山遺跡遺物  
図版37 栗山遺跡遺物  
図版38 栗山遺跡遺物  
図版39 栗山遺跡遺物  
図版40 栗山遺跡遺物  
図版41 柳沢A遺跡遠景・第1調査区基本層序・作業風景  
図版42 柳沢A遺跡S K 1・S K 11・S K 13  
図版43 柳沢A遺跡S K 18・S K 22・S K 24・S K 29・S K 32  
図版44 柳沢A遺跡S K 3・S P 33・S P 25・第2調査区全景  
図版45 柳沢A遺跡第2調査区調査前全景・作業風景・基本層序  
図版46 柳沢A遺跡S M 50  
図版47 柳沢A遺跡S M 50  
図版48 柳沢A遺跡S M 50・第2調査区C区礫集積状況・B区礫集積出土状況・発掘体験  
学習会・調査説明会風景  
図版49 柳沢A遺跡遺物  
図版50 柳沢A遺跡遺物  
図版51 柳沢A遺跡遺物  
図版52 柳沢A遺跡遺物  
図版53 柳沢A遺跡遺物  
図版54 柳沢A遺跡遺物  
図版55 柳沢A遺跡遺物  
図版56 柳沢A遺跡遺物  
図版57 柳沢A遺跡遺物





## 第I章 調査の経緯

山形県教育委員会では昭和63年度に東北横断自動車道酒田線(朝日～酒田間)に関連する遺跡詳細分布調査A(表面踏査)を実施した。この時に朝日村から鶴岡市の間で31箇所を数える遺跡が確認され、そのうちの3遺跡が今回調査した柳沢A遺跡、栗山遺跡、仲台遺跡である。柳沢A遺跡は県の遺跡台帳に記載されている周知の遺跡である。栗山遺跡は段丘上の畑地に東西350m、南北700mの範囲に多量の遺物の散布が認められた。仲台遺跡では遺物が採集されたのは東側畑地の一部であったが付近の地形などから遺跡範囲は東西105m、南北120mに及ぶものと推定された。

次に平成3年度には東北横断自動車道酒田線建設により栗山遺跡の東辺と仲台遺跡の西半部分が路線内に入ることとなったため、遺跡の範囲・性格を明らかにして事業との調整を図る目的で試掘調査を実施した。また、柳沢A遺跡についても平成4年に同様の試掘調査を実施した。この試掘調査は計画路線内に1m四方の試掘坑又はトレンチを設定して地山まで掘り下げるというものであった。調査の結果、柳沢A遺跡の第一地点では縄文時代前期の土器、石器、土坑、柱穴等が検出され、第二地点では板碑、経塚が確認された。栗山遺跡・仲台遺跡では縄文土器、石器が検出され、特に仲台遺跡のトレンチでは移植瓦による掘り下げで多量の遺物が検出された。

以上の分布調査結果をもとに関係機関で協議を重ね、工事に先立って記録保存のための緊急発掘調査を財団法人山形県埋蔵文化財センターが委託を受け実施することになったものである。

## 第II章 遺跡の立地と環境

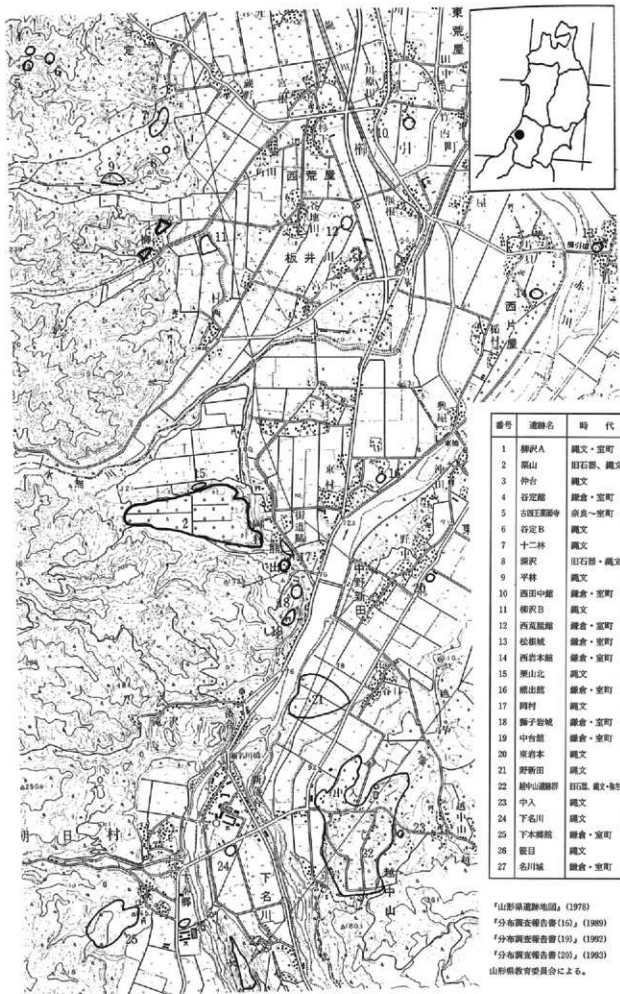
### 1 仲台遺跡と栗山遺跡

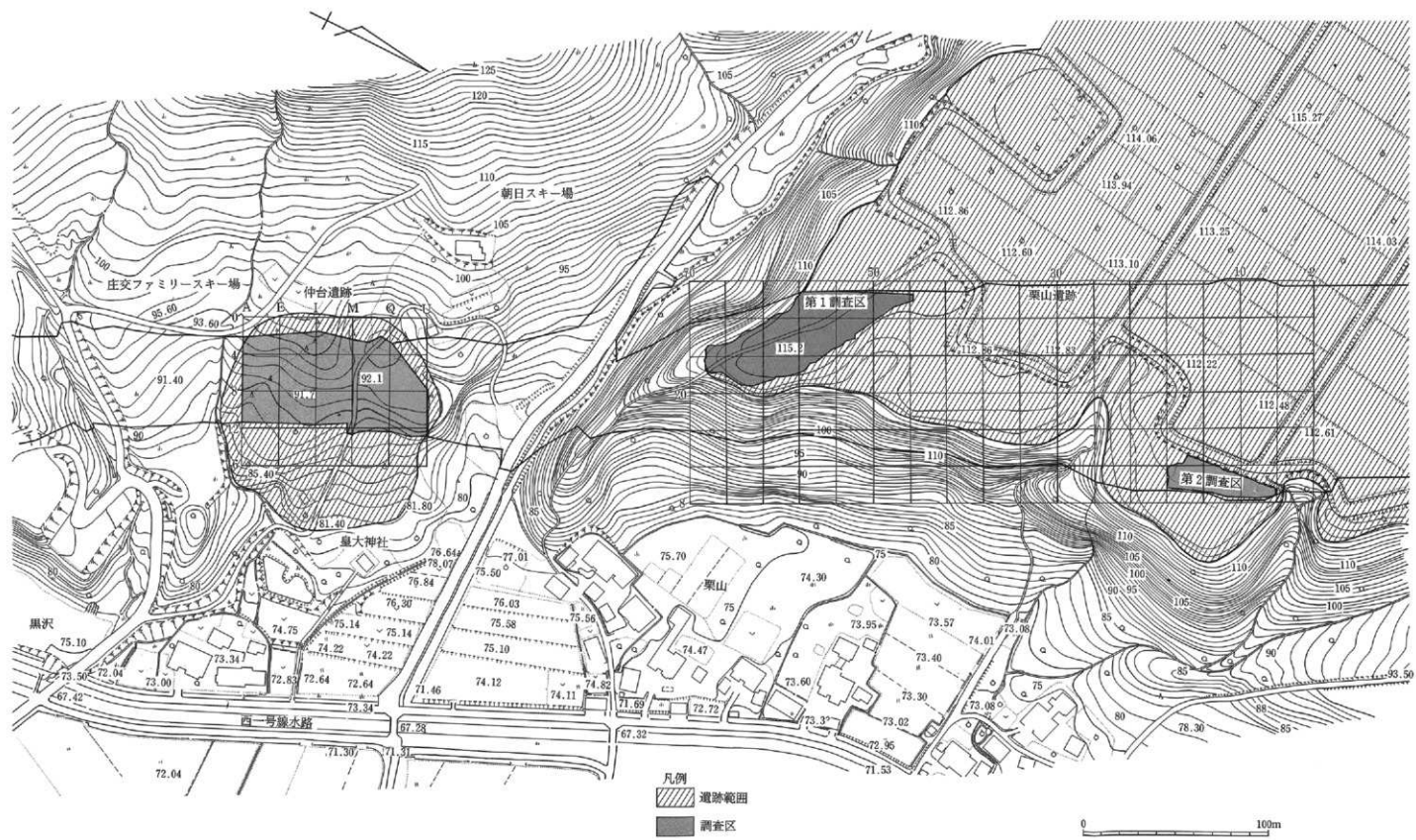
朝日連峰、摩耶山、湯殿山を頂点とする三つの山並が突き合い、その溪谷を流れてきた赤川と梵字川が合流する地点に文字どおりの朝日村落合がある。ここから庄内平野は扇状になだらかに北方に広がり、その最北端に秀峰島海山が望まれる。

落合から北方約1kmの熊出地内に、隣接して仲台、栗山両遺跡があり各々摩耶山系の湯ノ沢岳東山麓の標高92mと110mの丘陵に立地している。仲台遺跡は南側がスキー場造成のため一部削平され、栗山遺跡も昭和44年着工の大規模ほ場整備事業に伴うお泥濘事業の採土地になり、遺跡の大部分は破壊され東縁辺部のみが残っている状況である。

両遺跡のある朝日村は、赤川、梵字川の河岸段丘や丘陵に多数の遺跡がありまさしく遺跡の宝庫である。両遺跡の南東約1kmの東岩本地区の段丘に越中山、野新田、東岩本、中入などの旧石器時代や縄文時代の遺跡が集中し、梵字川を挟んだ対岸の段丘に上野山A・B遺跡がある。

とりわけ越中山遺跡群は昭和34年から30次にわたって発掘調査が実施され、教科書に紹介されている全国的に有数の旧石器時代の遺跡である。また、落合から赤川を約7kmのぼると昭和56年に発掘調査が行われた砂川A遺跡があり、縄文時代後・晩期の「赤川上流遺跡群」の中心的存在と位置づけられている(文献26)。



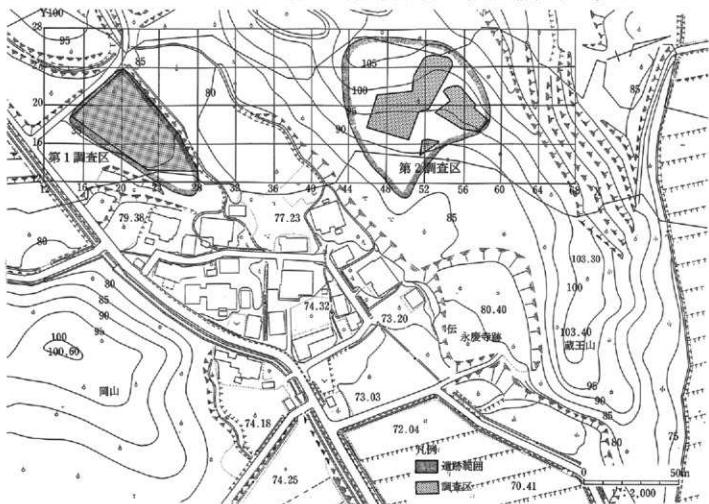


第2図 仲台遺跡・栗山遺跡調査区概要図(S=1:2,000)

## 2 柳沢A遺跡

柳沢は、後方に摩耶山系の母狩、金峯の山々が連なり、前方は赤川が北流し庄内平野が広がりを見え、北に鳥海山南東に月山を眺望する景勝の地である。本遺跡は、柳沢集落を取り囲む母狩山東山麓の三つの舌状丘陵にある。第1調査区は真中の丘陵に立地し標高約85mを割り、第2調査区は北側の眺望のきく丘陵東斜面に立地し標高約85～110mを測る。両調査区とも昭和40年代の農業振興策により一部擾乱されている。

本遺跡周辺の母狩山東山麓は、柳沢B、平林、十二林、谷定A・Bなど多数の縄文時代の遺跡がある。また、本遺跡東方約4kmの赤川右岸の丘陵に、昭和49年に発掘調査が行われた三礎林E、丸山の両遺跡がある。本遺跡では中世祭祀遺構が検出されたが、この地域にとって中世とはどんな時代だったのだろうか。ひと言でいえば、金峯修験や在地靈場にみられる信仰の高まりと南北朝から戦国の世へと続く動乱の時代である。信仰の高まりを示す遺構や遺物として、藤沢岩屋、本遺跡の北朝記年銘石塔、青龍寺の文保元年銘五輪塔などがある。また、本遺跡の第2調査区斜面の東下の高台は永慶寺跡地と伝承され、本遺跡南方約600mにある吉祥寺はこの地の地頭であった武藤持氏の帰依による開山とされている。本遺跡の東方約3kmの下山添八幡宮では写経が盛んに行われたという。動乱を示すものとして、丸岡城、西荒屋館、西田中館など多くの城館跡があり、西田中館跡地から番銭遺構が検出されている。この地域は庄内と内陸を結ぶ六十里街道の出入口に当り熾烈な争いがくりひろげられた。信仰の高まりと動乱は歴史を貫く一本の太い軸線であった。



第3図 柳沢A遺跡調査概要図(S=1:2,000)

表1 柳沢A遺跡 第2調査区に関連する略年表

元号	西暦	事 項
天曆元年	947	太平山永慶寺が柳沢町柳沢地内に創建と伝えられる。加賀国の大乗寺末寺という(文獻1)。 ※10~11世紀頃、高寺墳墓(羽黒町)が造られる(文獻10)。
文治5年	1189	○將軍朝朝の部将比企能員が田川太郎行文、秋田三郎政文を討つ(文獻2)。○武藏實績が出羽国大泉荘の地頭となる(文獻15)。實績は田部武藤氏の祖といわれる(文獻2)。 ※12世紀頃、湯田川、水沢、大山(鶴岡市)など塚墓がさかんに造られる(文獻29・37)。 ※12世紀頃、玉川院塚墓群(羽黒町)、湯田川七石台1・6・7・9号墳(鶴岡市)、中山高寺(藤島町)など、珠洲系陶器を産出器とし、礫石を積み上げた中世火葬墓が各地に造られる(文獻10・22・29)。
建長3年	1251	武藤長氏が了然明法禅師をして玉泉寺(羽黒町)を開山させる。この頃より庄内に曹洞宗ひろまる(文獻2)。
建長4年	1252	○羽黒山頂(羽黒町)に塚墓が造られる(文獻3)。○特川塚墓(立川町)が造られる(文獻12)。 ※鎌倉時代に建立された田川太郎の五輪塔、加茂飯盛塔・宝室印塔(鶴岡市)がある(文獻29)。
正和3年	1314	酒田市北沢に鮎野で最古といわれる「正和3年」銘の板碑がある(文獻29)。
文保元年	1317	鶴岡市青龍寺に「文保元年」銘の五輪塔がある(酒田英一氏の確認)。 ※鎌倉末期に鶴岡市西北部の京田村々の開地がすすむ(文獻3)。 ※鎌倉末期から、中京田(鶴岡市)、平形G、中山高寺(藤島町)などの集落跡や寺院跡は角柱を主にした建物が多く残り、規模も大きくなる(文獻17・22・29)。
文保3年	1319	特川塚墓に「文保3年」銘の石塔がある(文獻12)。
元応2年	1320	羽黒町手向に自然石塔墓がある(文獻9)。
元享2年	1322	酒田市生石の延命寺板碑群の中で最古といわれる「元享2年」銘の板碑がある(文獻28)。
元弘3年	1333	鎌倉幕府が滅亡し、鎌倉光厳が建武の新政府より出羽守兼秋田城方に任命される(文獻29)。
建武3年	1336	足利尊氏が室町幕府を開き南北朝動乱期に入る。庄内では武藤城を中心とする北朝勢が勢力であった。 ※南朝(藤島町)や河内城(平田町)は南朝の拠点であった(文獻2・33)。 ※柳沢A遺跡に「厩口、庚口」銘の石塔がある。
暦応4年	1341	築室光世が出羽守兼秋田城方に任命され藤島城に入部する(文獻33)。
興永2年	1344	○藤島城が陥落し、中院具房が南朝勢は河内城(平田町)に退く(文獻2)。 ○八幡森墳墓(河内城跡地内)がこの年より1401年までの間に造られる(文獻19)。
貞和2年	1346	吉祥寺(柳沢町)が武藤特氏の傳俗をうけて開山、庄内五ヶ寺のひとつである(文獻15)。 ※伊勢国より河内大明神(柳沢町宮ノ根)を勧請する(文獻1)。
正平元年	1350	永慶寺が藤島町八色木に移転する(文獻1)。 ※南北朝時代に藤島町宮東、岡添川の五輪塔など石造供養塔の遺立がさかになる(文獻17・22・29)。 ※南北朝時代に柳沢A遺跡周辺に西岩本館、東荒屋館、藤島城(柳沢町)など城館が築かれる(文獻11)。 ※南北朝時代に東荒屋(柳沢町)に曹洞道場が造られる(文獻29)。
貞和6年	1356	北島顯信が藤島城で兵を挙げ、藤島城は南朝の拠点となる(文獻33)。
正平5年	1356	
文和4年	1357	名川城(朝日村)の城主名川主殿が藤島城を攻める(文獻16)。
正平11年	1357	
延文2年	1357	延命寺板碑群の中で最後といわれる「延文2年」銘の板碑がある(文獻28)。 ※柳沢A遺跡に「延文」の紀年銘の石塔がある。
応安5年	1372	○下山派八幡宮(柳沢町・柳沢A遺跡の北東約4km)にこの頃書きの大般若経が伝わっている(文獻15)。 ○河内大明神の御社を性善同妻女尼公覚禅師が遺立する(文獻1)。 ※柳沢地区の葦玉川の御殿神社(明治43年に河内神社に合祀)は永和の頃、中納言盛俊の勧請という(文獻1)。
天授2年	1382	下山派八幡宮常住僧神禪らによって大般若経が集中的に写経される(文獻29)。
永徳2年	1392	南北朝の統一なる。 ※応永年間(1394~1427)後小松天皇皇子小川宮が黒川に能を伝えこの地に没すという(文獻15)。
弘和3年	1463	武藤淳氏が京に上りこの時能をみる機会があり、能役者を伴ってきたのが黒川能の起源ともいわれる(文獻15)。
寛正4年	1467	応仁の乱は止まる。武藤建氏は將軍義政の命により上洛しようとしたが伊達連氏にもさえぎられる(文獻3)。
文明元年	1469	※文明年間、砂越城(平田町)の城主砂越氏が台頭し川口の地頭を従えて武藤氏と対立するようになる(文獻3)。 ※15世紀後半から16世紀にかけて、武藤氏などにより庄内各地に城館が築かれ、柳沢町内にも丸岡城、西荒屋館、松根城、山源館などの城館跡がある(文獻11・29)。
永正9年	1512	武藤一族の対立が激化し、武藤澄氏と砂越氏祖の争いとなる。丸岡城主押切備前守が武藤氏につく(文獻3・29)。
~10年	~1513	※16世紀初頭頃、一石五輪塔、五輪板碑、小型板碑などの石造供養塔が多くみられ、積家板碑などもあらわれ、一般民衆への普及を示し、それらの一部に墓葬化の傾向がみられる(文獻29)。
大永2年	1522	○武藤晴時上洛し、このとき能をみる機会があり、能役者を伴ってきたのが黒川能の起源ともいわれる(文獻15)。 ○この年のものかと思われる黒川能の伝書の写真が残っている(文獻15)。
天文元年	1532	○天文の争乱が起こり大室寺内(鶴岡市)は亡くとなる。武藤氏は尾浦城(鶴岡市大山)に移る(文獻3)。 ※天文年間、西荒屋は砂越氏の所領となり西荒屋館が築かれる。この跡地に上野塚がある(文獻1)。
天文3年	1534	天沢寺が金峯山を降り現在地の丸岡(柳沢町)に移ったという(文獻15)。
天文7年	1538	庄内に飢饉の中で再び大動乱が起きる(文獻3)。

注1 元号中 上段が北朝年号、下段は南朝年号を示す。

注2 文獻番号は、P88~89の柳沢A遺跡参考文獻番号を示す。

### 第三章 仲台遺跡

#### 1 調査の概要

調査は東北横断自動車道酒田線の計画路線内を対象に実施された。初めに計画路線の道路センター杭を基線として5m×5mを1単位とするグリッドを調査対象区域に設定し、グリッドの座標にアルファベットと通し番号を付け、両者の番号によりグリッドの位置関係を表した。

次に遺構・遺物が検出される深さや集中地点を確認するため、トレンチを調査区内に設定して掘り下げた。その結果、当初は調査区内全域にわたって約20cmの遺物包含層を手掘りで掘り下げる予定であったがこれを変更することにした。

トレンチ調査ではA地区では遺物包含層に含まれる遺物が非常に少ないことが確認され、B地区では表土最上面から地山まで遺物が含まれていることが確認された。このためA地区では包含層を残さず地山直上までの表土を重機により除去し、B地区では調査区の約半分を手掘りによる表土除去、他は重機による表土除去を行うことにした。

調査は、まずB地区の重機による表土除去部分から始め、A地区の表土除去、B地区の手掘りによる表土除去の順に行った。その後、各区毎に手掘りによる面整理、面精査に移り掘り下げ、面削りを重ね遺構・遺物の検出を行った。検出された遺構は平面プラン確認後覆土を半載して掘り下げ、土層の観察、平面図、写真撮影等の記録を実施した。出土遺物は遺構毎あるいはグリッド毎に取り上げた。調査面積は4,750平方m、現地調査は平成5年5月12日から10月25日まで実施された。

#### 2 遺構の分布

遺跡は西から東への傾斜地に位置し、分布調査では遺物の散布状況と地形から東西105m、南北120mに及ぶと推定されている。A地区はI-2からA-9ラインの杉林の南側がスキー場造成の際に攪乱されている。この杉林は東側の果樹地帯の防風林の役割も担っていたと聞いている。A-C-2～4地区は地山まで削平されており、A-C-5～8地区及びD-G-2～4地区は削平された地山層が最上面に30cm程堆積している。調査区の西側からA-M-8ラインまでの傾斜は急勾配で、これより東側はかなり緩やかな斜度でほぼ平坦に近い地形を呈する。B地区は調査区の西端からN-T-9ライン付近まではほぼ平坦であるがその東側は急傾斜地である。

仲台遺跡で登録した主な遺構としては住居跡1棟、土坑13基、炉跡2基、列石2条、柱穴多数、性格不明遺構8基等がある。しかしこれらが調査区全体にわたっている訳ではなくほとんどはB地区において検出されている。しかも、B地区でも列石から西側に分布している。遺物の分布も同様である。A地区ではJ～L-7～10地区において若干の出土遺物はあるがあの地区からの遺物の出土は極めて少ない。B地区での遺物出土層は最上面から約30cm～40cmの表土中（暗褐色～暗茶褐色土）及びその下層、黄褐色土の地山直上から出土している。

### 3 遺構

#### ST1 竪穴住居跡 (第6図)

ST1はB調査区北よりのT-9グリッドに位置し単独で検出された。平面形は2m×2.1mのほぼ円形を呈すると推定される。これは、ST1がB地区の平坦部分と斜面との境界付近に構築されており、東側のプランは検出されていないため、推定のラインである。確認面からの壁高は約10cm程で掘り込みは非常に浅く、床面はハードローム風の堅緻な直床で小さな凹凸が多い。周溝、柱穴などは検出されておらず、明確な住居跡としての内部施設は床面中央部に炉が付設されるにとどまる。炉には焼土が堆積しているが底面はあまり焼けていない。規模は60cm×40cmである。この他に周辺には柱穴状のピットが数基検出されたが掘り込みが10cm～15cmと浅く明確な柱穴とは考えられない。また、住居内外には大小の礫が検出されている。覆土は西半部分のみの検出であるが自然堆積であったと考えられる。出土遺物は土器片、石器がわずかに出土している。

#### SK3 土坑 (第7図)

B調査区北よりのS-8グリッドに位置する。平面形は1.3m×1.3mのほぼ円形を呈する。確認面からの壁高は約70cm程でハードローム風の地山黄褐色土をほぼ垂直に掘り込むが、北壁、南壁は若干オーバーハングしている。底面はほぼ平坦である。覆土は全体に木炭、木炭粒子を多量に混入し大小の礫、縄文土器も多数混入する。特に第6層からは多量の木炭が検出され材状を呈しているものが多数見られ、縄文土器がまとまってほぼ一個体出土している。このような覆土の状態からSK3は自然堆積ではなく人為的に埋められた可能性がある。

出土遺物は第7図のSK3土坑の平面図に出土状態を示した第11図1の深鉢形土器がほぼ一個体分まとまって出土している。その他、縄文時代晩期前葉の土器片、剥片等が比較的多数出土している。

#### SK4 土坑 (第8図)

B調査区中央付近のR-7グリッドに位置する。検出時にはSK5と重複して確認されたが半載した結果切り合い関係はなく、隣接する遺構であることが確認された。

平面形は1.3m×1.1mのわずかに楕円形を呈する。確認面からの壁高は約50cm～60cm程で地山の黄褐色土を掘り込んで構築している。南壁の他は、ほぼ垂直ないし、オーバーハング気味に掘り込んでいる。底面はやや凹凸があり、底面からわずか2～3cm浮いた状態で直径30cm程の偏平な礫が出土している。覆土は木炭、木炭粒を多量に混入する暗褐色土～黒褐色土の自然堆積である。覆土には小礫、大礫も混入する。

出土遺物は縄文時代後期末～晩期の深鉢形土器片が多数出土し、黒曜石などの剥片も少量出土している。

#### SK5 土坑 (第8図)

SK4に隣接して位置する。平面形は0.95m×0.95mの若干不整形な隅丸方形を呈する。確認面からの壁高は50cm～60cm程で地山の黄褐色土をほぼ垂直に掘り込んでいる。壁面及

び底面は凹凸が著しく、底面中央部に直径20cm、深さ20cm程の不整楕円形のピットを有する。覆土は大小の礫多数と木炭粒を少量混入する暗褐色土で、その土層堆積状態から人為的に埋めた可能性がある。出土遺物は非常に少なく縄文時代晩期の土器片と剥片が数点出土しているのみである。

先にも述べたがSK4・5は当初は重複して検出された。その検出したプランに沿って確認面から約5cm程掘り下げたところ、下層から新たに土色変化が確認され最終的なプランを検出、再度掘り下げた。よって外側と内側の二重のプランが検出されている。外側のプランは壁高約5cm程で底面は平坦である。SK5ではこの外側のプランの底面に直径20cm～30cm、深さ約20cmのピットを4基有する。この外側のプランは確認面からは非常に浅いが内側の深く掘り込まれた土坑に伴う何らかの施設であった可能性も考えられる。

#### SK6土坑（第9図）

B調査区の中央部、P-8・9グリッドに位置する。平面形は1.3m×1.4mの若干の不整円形を呈する。確認面からの壁高は30cm程で地山黄褐色土をほぼ垂直に掘り込む。底面は平坦で、大小の礫や木炭が出土している。覆土は木炭粒を混入する黒褐色土を主体としている。出土遺物は縄文晩期の土器片と剥片が少量出土している。

#### EL7炉跡（第10図）

B調査区中央部、P-7グリッドに位置する。平面形は0.7m×0.8mの円形を呈する。確認面からの壁高は約20cm程で若干軟弱な地山黄褐色土を垂直に掘り込んでいる。底面は平坦で堅くしまっている。覆土は赤茶褐色の焼土の単一層で木炭を少量混入している。焼土は比較的軟弱で焼土ブロックなどは混入していない。また、底面、壁ともにあまり焼けていない。北壁付近に礫が2個検出されているがこれもほとんど焼けていない。出土遺物は縄文時代後期末～晩期の深鉢形土器片が2点出土しているのみである。

#### EL42炉跡（第10図）

B調査区北よりのS-8グリッドに位置する。南北55cm東西60cmの規模である。表土除去を行い遺構の検出作業中に地山直上に構築されている状態で検出された。当初、炉を構築している北側の石が破壊された状態で検出されたが付近で出土した大形の石が接合することが判明した。炉を構成する囲み石はよく焼けているが炉の内部（底面）はあまり焼けていない。炉内からの出土遺物は無く、周辺の地山直上からは縄文時代早期末～前期初頭及び後期末～晩期の土器片が出土している。

#### 列石（第4・5図）

A調査区I～L-7～11グリッドにおいて直径30cm～40cmの礫が約20cm間隔で53個、全長27mにわたり並列された状態で検出された。また、B調査区では調査区の北西コーナーから南走しM-6グリッド付近までA調査区と同様の列石が72個、全長45mにわたって検出された。A調査区の列石はほぼ東西方向、B調査区の列石はほぼ南北方向に延び、直角に交わる様相を呈している。



#### 4 遺物

仲台遺跡から出土した遺物は整理箱にして12箱である。そのほとんどは縄文時代後期末～晩期の土器と石器と考えられる。この他には縄文早期、中期、後期、弥生土器、などが少量出土している。また、早期の土器に伴う形態の石器と考えられるものや、弥生土器に伴うとされるアメリカ形石鏃、奈良時代～平安時代の須恵器、中世陶器、近世の古銭、瓦など多岐に渡る。しかし、出土した遺物の殆どは小破片であり、全体の器形、文様の伺える資料は非常に少ない。

##### 土器（第11図～第13図、第22図）

1はSK3から出土した全体を伺える唯一の深鉢形土器である。一部欠損してはいるもののほぼ完形に近い。器形は平底の底部から胴部下半まで外反して立ち上がり、胴部中位ではほぼ直立し内湾気味に口縁部に至る。器面は底部付近は寛削り及びナデ調整を施し胴部から口縁部までは縄文LRを施文した後ナデ調整を施す。内面も全面ナデ調整が施されている。また、外面の胴部中位から上半部にかけてと内面の胴下半部は煤や炭化物が多量に付着している。

2は胎土中に繊維を混入し羽状縄文LR、RLを施文する。裏面に条痕が微かに見られる。3～5は胎土中に繊維の他、石英、粗粒、細砂粒等を多量に混入する。焼成は比較的良好である。表面は縄文0段多条LR、裏面は条痕文を施文する。7、8は繊維を多量に混入し表面に縄文0段多条LRを施文する。

9、10は棒状工具による沈線文を施文する。11は沈線と細い竹管文を充填して施文しており、12は棒状の太い沈線文を、13は摺糸文を施文する。

14～16、32は三叉状入組文が施文され口縁部～体部の文様帯に磨消縄文手法による帯縄文を有する。17～22は縄文を充填する入組文が施文される。23～26は帯縄文、27は三叉状陰刻文を施文される。28～33は口縁部文様帯に三叉状入組文が施文される。

34～35は半截竹管状工具で2本沈線、36～38は細い棒状工具により1本～2本沈線が施文される。37、38は同一個体で地文に縄文を施される。同一個体である。

39～41は2本～3本の沈線、42は沈線間に刺突を施し、43は櫛歯状工具による2本沈線である。44は無節、45は縄文RL、46は結節文、47、48は先の太い櫛歯状工具で条痕様に施文する。49は外面ヘラ磨き、内面ナデ調整され外面には細い棒状工具による1本沈線が施文される。

50～58は粗製深鉢形土器の口縁部である。50、52、53、55は縄文LRを、51は縄文RLを施文する。59～62はヘラ磨き調整の無文土器、63、64は縄文LRが施文される。66～68は網代痕、71は底部に沈線、72、73は上げ底で器面は非常に薄い。74、75は鉢形土器底部で74の胴下半には結条体とも見られる細い縄文が施文される。77は台付鉢形土器の台部である。

##### 石器（第14図～第21図）

仲台遺跡で出土した石器には石鏃、尖頭器、石鏃、石匙、石瓦、搔器、削器、磨製石斧、

磨石がある。

石鏃は27点出土しておりその内78～99の22点を図示した。本遺跡出土の石鏃は基部の形態から次の5形態に分類される。78、80の基部中央に深い抉り込みが入るもの、79、81～84の浅い抉り込みが入るもの、85～87、89、96、97の平基、88、95の円基、90～94の凸基のもの。また、98、99は左右、両側にノッチの入る弥生時代特有のアメリカ形石鏃である。

尖頭器は1点の出土である。100は両面加工の槍先形を呈するものである。

石錐は6点出土しておりその内101～104の4点を図示した。101～103は棒状を呈し基部と尖頭部との境界が不明瞭な両面加工のもの、104は片面加工のものである。

石匙は15点出土しておりその内105～117の13点を図示した。本遺跡出土の石匙は3形態に分類される。105～109、112、115の縦形のもの、110、111、113、114の縦形で左側縁が「くの字」状に曲がって肩を張るもの、116、117の縦形と横形の中間的な形態のものである。

石笥は35点出土しておりその内118～139の22点を図示した。本遺跡出土の石笥は6形態に分類される。122の両面加工で刃部が丸味をおびるもの。128、129、134、136、139の、背面側は、ほぼ全面が調整加工面で覆われるが、主要剥離面側は側縁部だけに周辺加工が施され刃部が丸味を帯びるものと118～121、123～125、127、130、132の刃部が直線状をなすもの。これとほぼ同様だが、135、137の主要剥離面側は刃部と考えられる先端部にわずかに浅い加工が認められ、刃部が直線状をなすもの。133、138の主要剥離面側に一切の加工が認められず刃部が丸味を帯びるもの。同様に126、131の刃部が直線状をなすもの6形態である。

振器は2点の出土である。140は1縁辺を除く3縁辺が刃部となるもので、141は縦長剥片が素材として用いられている。2点とも片面加工である。

削器は23点出土しておりその内142～146の5点を図示した。5点とも縦長剥片を素材とし、片面加工によって刃部が作り出されるものである。142は左側縁と末端が刃部となり両縁辺とも背面側に加工が施され、144は右縁辺が刃部となり、背面側に加工されるものである。143、145は両側縁が刃部となり、両側とも背面側に加工の施されるものである。146は両側縁とも主要剥離面側に加工の施されるものである。

磨製石斧は1点のみの出土である。小型の石斧でかなり破損している。刃部は両刃で若干丸味を帯びている。

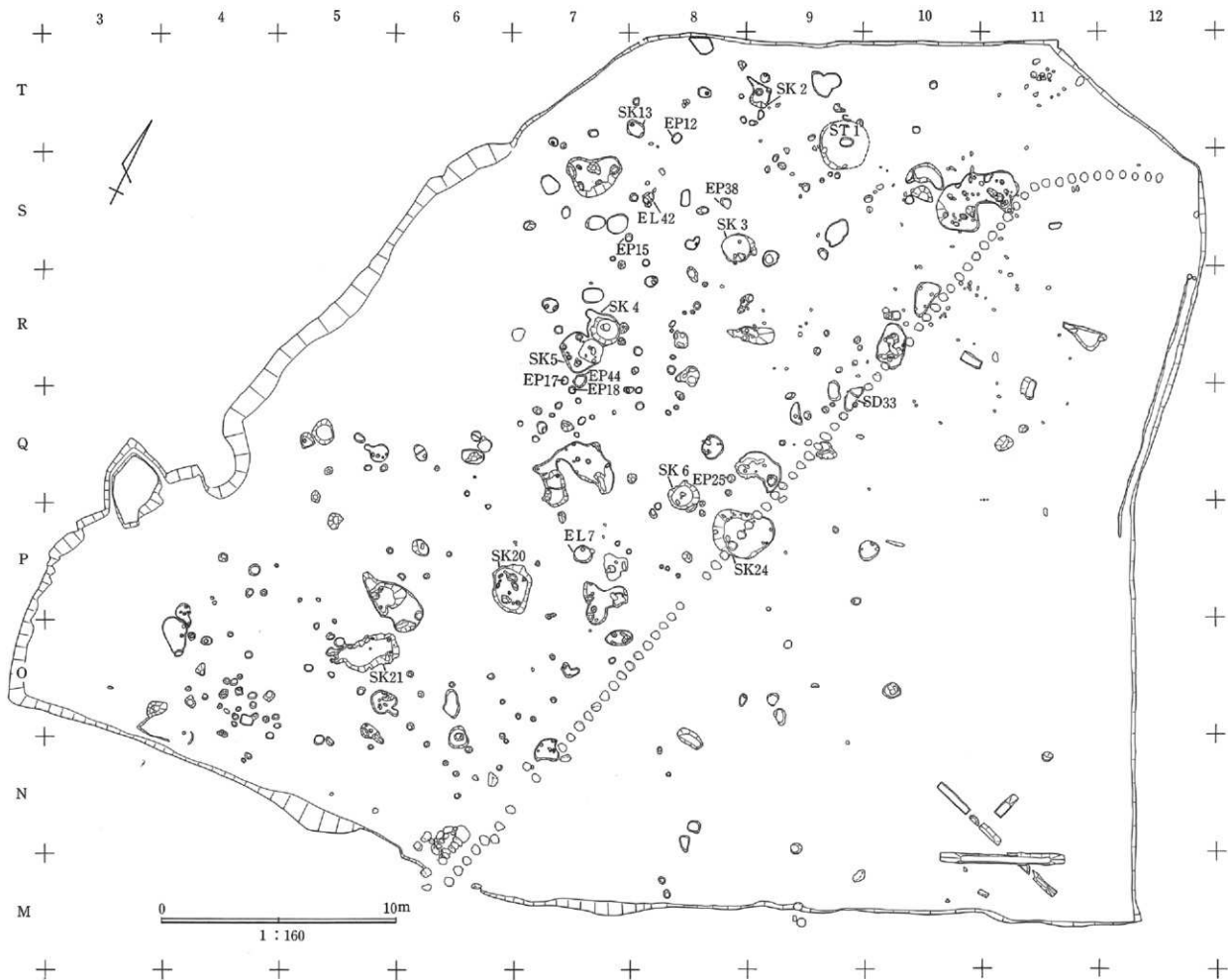
磨石は11点の出土で、そのうち5点を図示した。148は3面、149、151、152は2面の磨痕をもつ。150は1面のみの磨痕をもつ。

その他の遺物

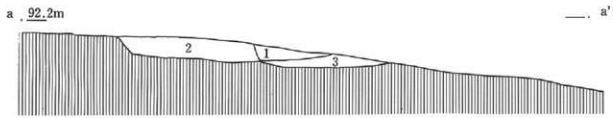
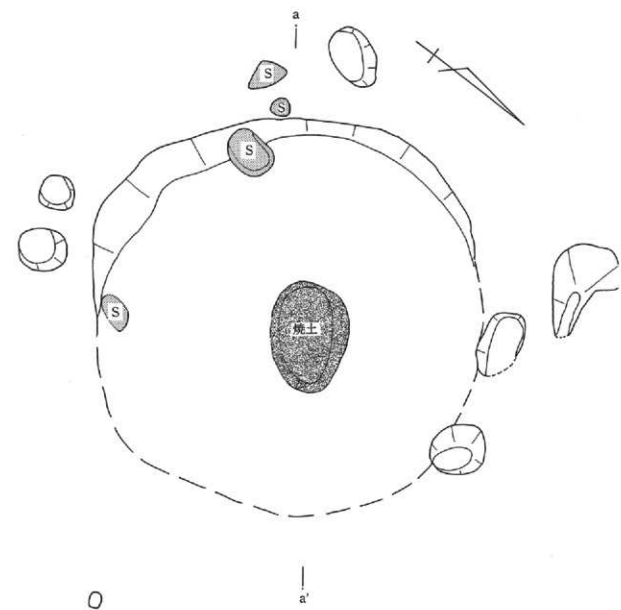
153は約1/4の須恵器底部片である。底部ヘラ切り離し手法を用いている。154～157は中世陶器である。154、155は体部片、156は糸切りの底部片、157は摺鉢片である。158～161は近世の瓦と考えられる。2孔を穿たれる。

この他、寛永通寶が数点出土している。

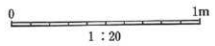




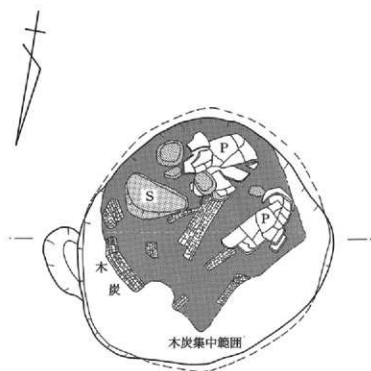
第 5 图 B地区全体图



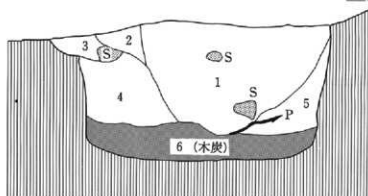
- 1: 暗褐色～黒褐色土 木炭粒を多量に混入する。(しまりなし)
- 2: 暗褐色土 細砂、木炭粒を混入する。
- 3: 焼土



第6図 ST1住居跡

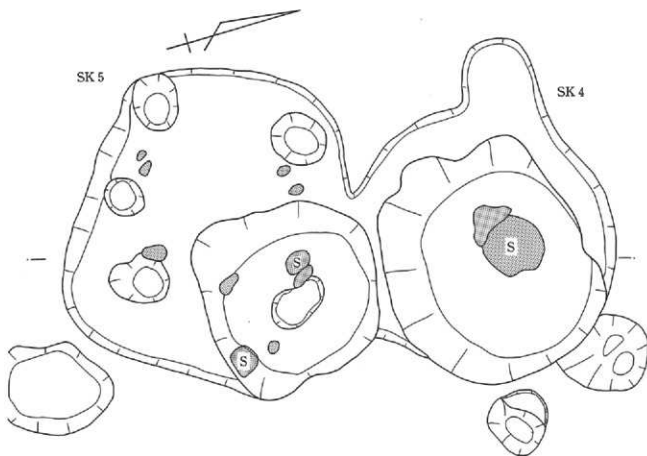


92.5m

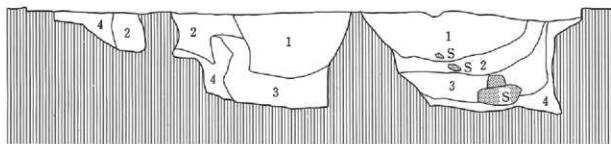


- 1: 黒褐色土 木炭、木炭粒を多量に混入し大礫、小礫(15cm、1~5cm)土層、石器も混入する。
- 2: 暗褐色土 木炭粒を少量混入する。
- 3: 黄褐色土 木炭粒をわずかに混入する。
- 4: 暗褐色土 木炭、木炭粒を多量に混入するが1よりも少ない。小礫、大礫、砂利も多く混入する。
- 5: 黄褐色土 木炭粒、小礫を少量混入する。
- 6: 暗褐色土 木炭を多量に混入し、大礫も混入する。

0 1 m  
1 : 20



92.6m



#### SK 5

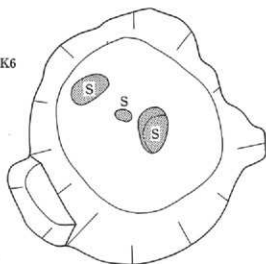
- 1: 暗褐色土 SK 4の1, 2に色調は似るが若干黒っぽい。木炭粒を少量混入し、地山の黄褐色～黄灰色砂質土を少量混入する。  
 2: # 1と似るが木炭粒をほとんど含まない。  
 3: # 木炭粒を少量混入し、地山の黄褐色～黄灰色砂質土を少量に混入する。  
 4: 黄褐色土 3を少量と砕、大砕を混入する。

#### SK 4

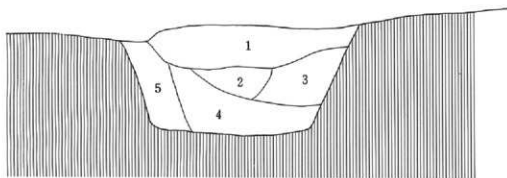
- 1: 黒褐色土～暗褐色土 木炭粒を多量に混入し、砂利、小礫を混入する。  
 2: 暗褐色土 木炭粒を少量混入し、地山の黄灰色砂質土を混入する。  
 3: 黒褐色土～暗褐色土 1と似るが、木炭粒、木炭を多量に混入し大礫も混入する。  
 4: 暗褐色土 木炭粒を多量に混入し、地山の黄褐色砂質土を混入する。

0 1m  
 1 : 20

SK6



92.3m

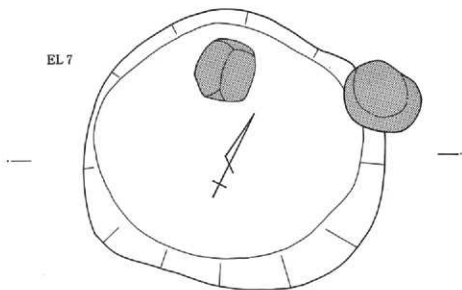


- 1 : 黒褐色土 木炭粒を多量に混入し、雑土粒を少量混入する。  
 2 : 暗褐色土 黄白色土を多量に混入し、木炭粒を少量混入する。  
 3 : 暗茶褐色土 黒褐色土、木炭粒を少量混入する。  
 4 : 暗黄褐色土 木炭粒を多量に混入し、黒褐色土を少量混入する。  
 5 : # 木炭粒、黄白色土を多量に混入する。

0 1 m  
1 : 20



EL 7

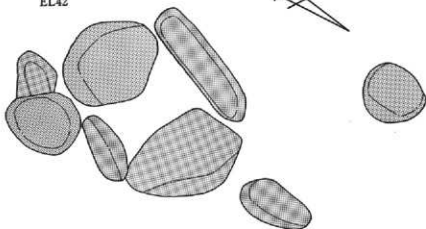


92.3m

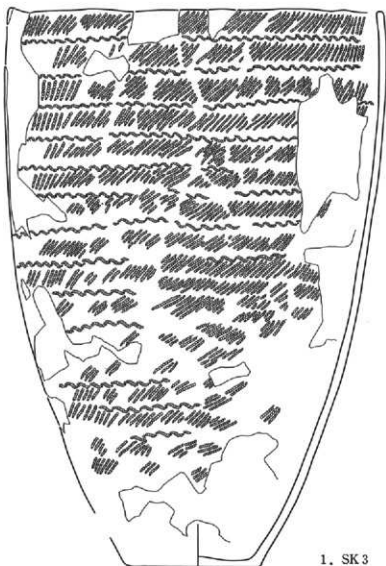


0 5m  
1 : 10

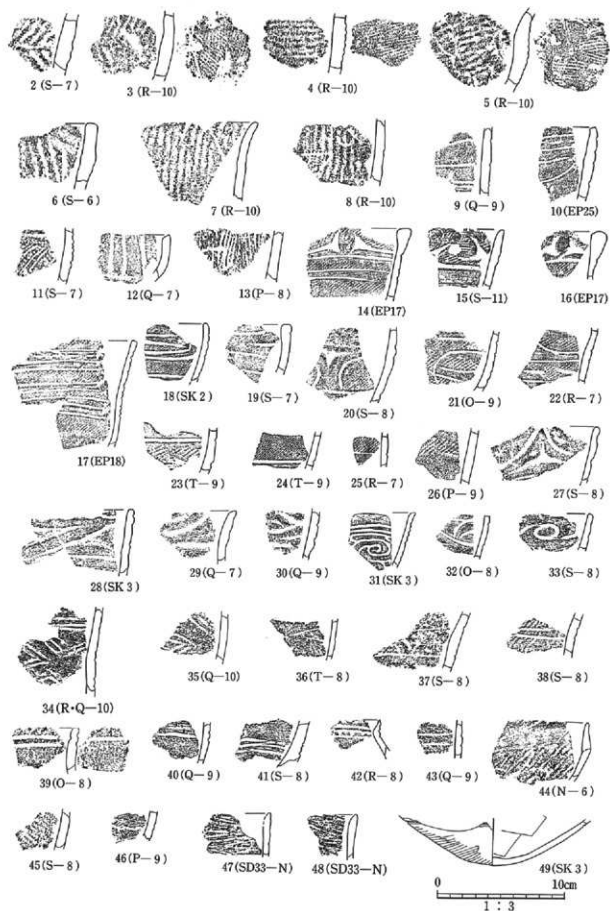
EL42

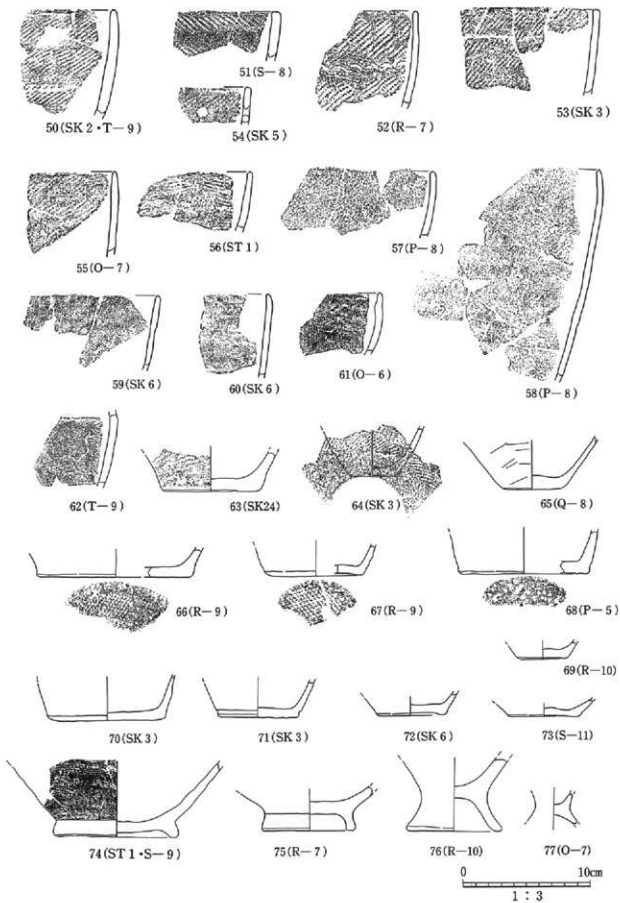


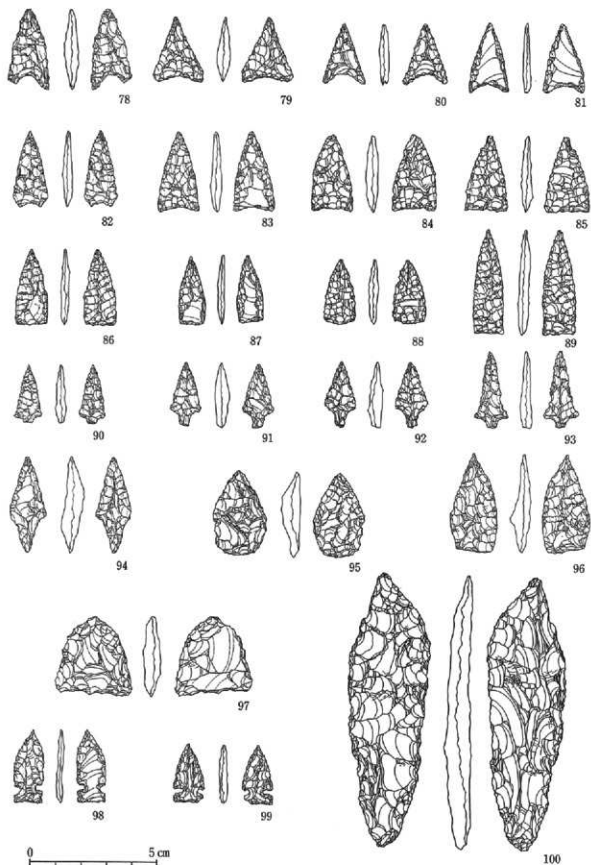
0 5m  
1 : 10

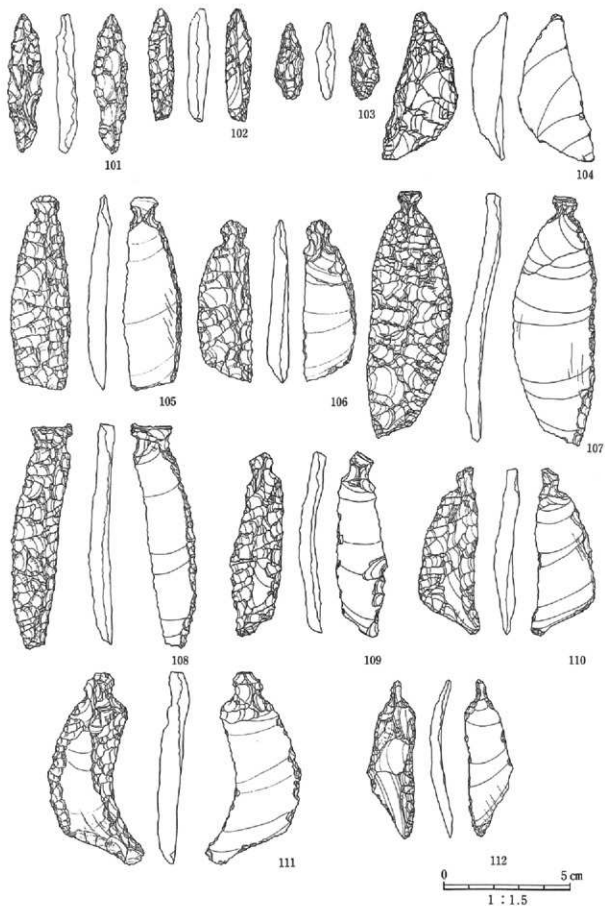


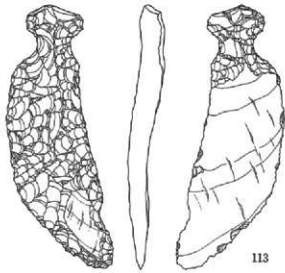
0 10cm  
1 : 3



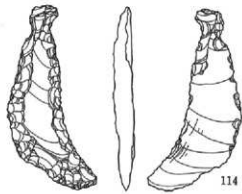




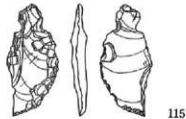




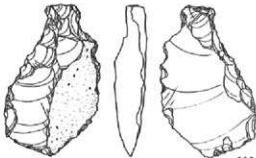
113



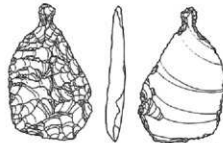
114



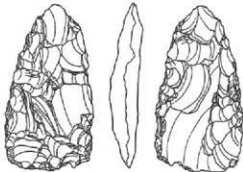
115



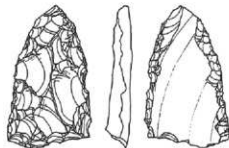
116



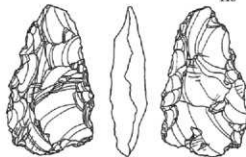
117



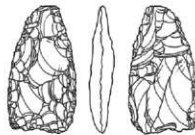
118



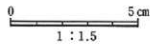
119

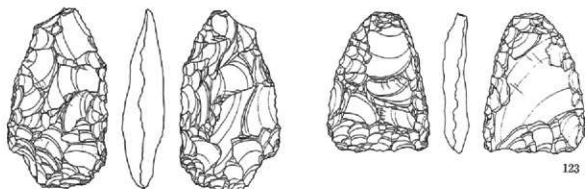


120



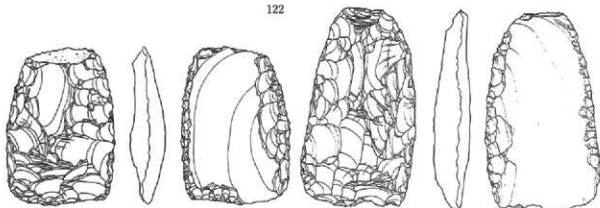
121





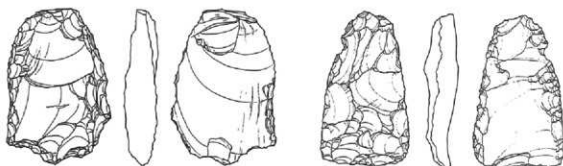
122

123



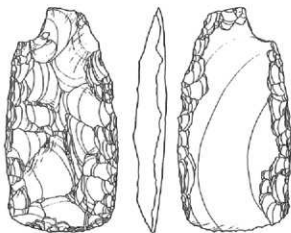
124

125

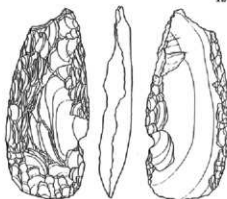


126

127



128

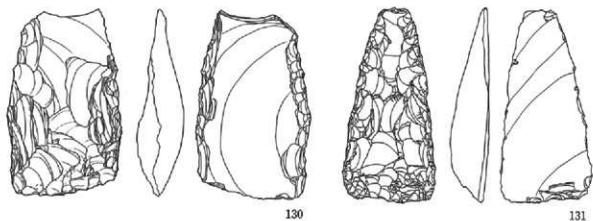


129

0 5 cm

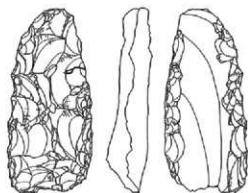
1 : 1.5



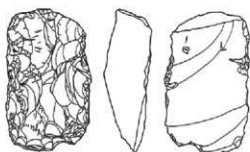


130

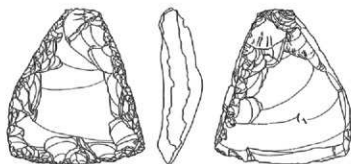
131



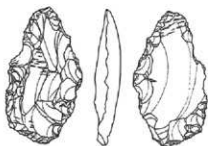
132



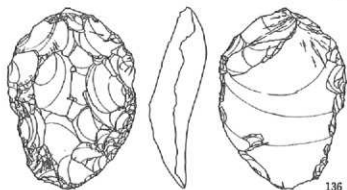
133



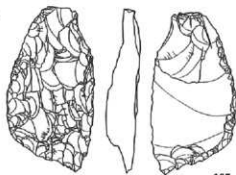
134



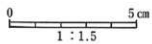
135

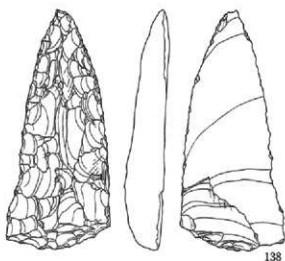


136

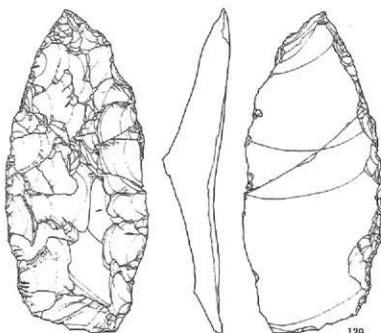


137

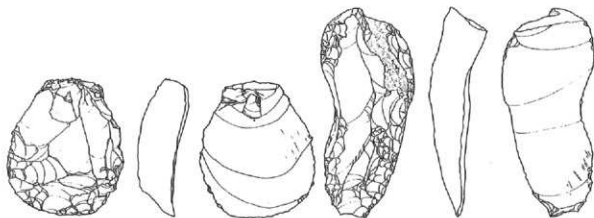




138



139

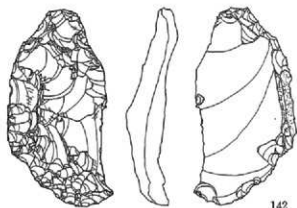


140

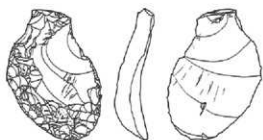


141

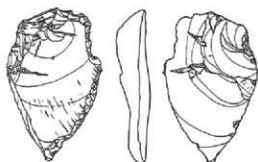




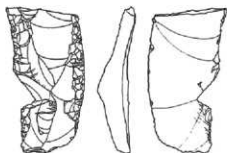
142



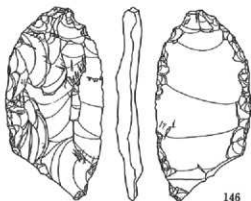
143



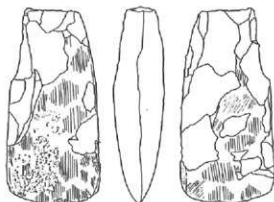
144



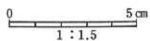
145

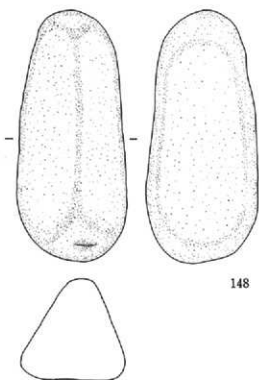


146

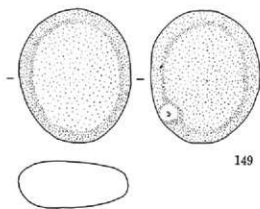


147

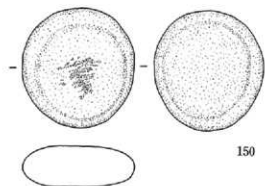




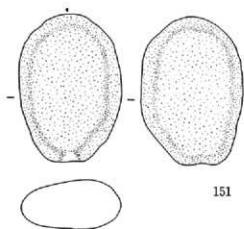
148



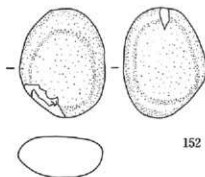
149



150



151



152



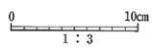
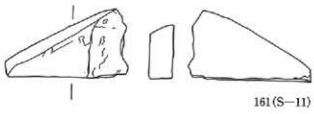
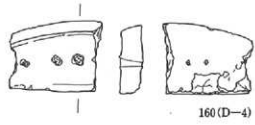
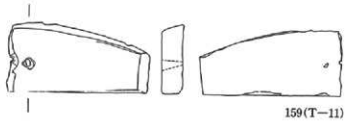
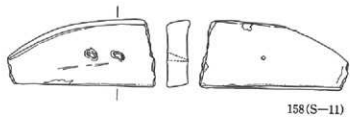
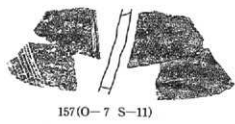
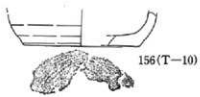
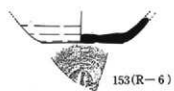


表2 石器計測表

標記・図版内 番 号	大きさ(mm)			重 量 (g)	形 態	出土地点	番 号
	長 さ	幅	厚 さ				
78	31.7	15.9	5.2	2.1	石 槌	S-9	
79	25.2	18.5	3.0	1.4	#	T-7	
80	23.2	17.0	3.9	0.9	#	S-7	
81	26.8	15.5	3.0	0.8	#	S-7	
82	29.5	13.0	3.5	1.0	#	SK3	
83	30.5	15.5	3.9	1.5	#	S-7	
84	28.5	16.5	4.5	2.1	#	S-10	
85	29.1	16.9	4.2	1.6	#	T-7	
86	29.2	12.2	3.0	1.1	#	P-8	
87	26.2	18.4	2.5	0.6	#	S-7	
88	26.0	12.4	4.0	1.1	#	T-10	
89	40.5	12.0	4.2	2.1	#	R-11	
90	22.2	10.1	3.9	0.5	#	S-7	
91	24.6	11.9	5.5	1.1	#	O-7	
92	25.2	11.9	5.8	1.2	#	T-7	
93	29.5	13.1	4.5	0.9	#	R-7	
94	37.2	13.8	6.9	2.6	#	R-6	
95	33.0	10.8	7.5	4.5	#	Q-6	
96	38.0	18.5	8.0	3.7	#	T-8	
97	30.1	29.5	6.8	5.6	#	S-11	
98	28.2	11.1	2.1	0.7	#	S-6	
99	20.2	12.1	2.9	0.7	#	T-10	
100	107.5	30.0	8.9	28.7	石 槌	M-6	RQ1
101	54.0	13.0	7.6	5.5	石	S-7	
102	44.0	9.2	7.4	3.8	#	S-7	
103	29.4	10.8	7.0	2.4	#	R-11	
104	59.0	24.4	10.8	14.9	#	Q-9	
105	75.0	23.0	8.8	12.3	石 槌	R-7	RQ17
106	63.5	20.8	7.0	9.4	#	Q-7	RQ14
107	37.5	31.1	7.1	21.4	#	Q-10	RQ11
108	87.1	17.8	6.2	12.5	#	R18	
109	73.0	20.0	6.0	10.0	#	R-7	
110	65.2	22.0	6.2	9.3	#	O-7	
111	75.6	25.0	9.0	18.5	#	T-9	
112	62.0	17.2	5.5	4.9	#	S-7	
113	105.5	31.4	7.5	33.5	#	S-8	RQ8
114	73.8	30.5	6.0	10.2	#	T-7	RQ2
115	42.0	20.2	5.1	4.2	#	S-7	
116	59.1	36.1	11.2	20.1	#	T-10	
117	53.9	33.1	6.0	10.6	#	T-8	
118	65.4	35.0	11.0	25.9	石 槌	S-9	
119	55.8	33.0	3.9	16.5	#	P-8	
120	55.5	34.5	13.4	24.7	#	S-11	
121	50.0	36.9	9.0	12.9	#	R-8	RQ2
122	71.1	39.0	15.1	40.8	#	P-6	
123	56.1	40.0	9.5	22.3	#	T-7	
124	62.0	43.0	13.5	37.2	#	Q-7	RQ16
125	78.0	44.1	18.2	50.3	#	R-9	RQ1
126	60.4	41.5	12.0	34.9	#	S-7	
127	60.1	35.1	12.1	25.0	#	S-11	
128	87.6	43.6	11.0	50.5	#	S-7	
129	74.8	31.4	10.4	29.5	#	O-6	
130	72.5	44.5	15.2	51.7	#	Q-9	
131	76.1	38.0	14.5	38.6	#	Q-7	RQ15
132	73.2	32.6	15.0	37.9	#	R-7	
133	55.0	32.5	16.2	32.3	#	T-8	
134	81.0	52.9	13.2	48.0	#	S-10E	
135	52.9	28.8	9.1	13.4	#	R-8	
136	70.9	48.2	15.5	58.6	#	Q-7	
137	64.5	33.8	11.6	29.5	#	S-6	
138	83.5	39.8	14.8	47.5	#	T-10	RQ6
139	126.8	54.2	21.1	100.5	#	Q-9	
140	52.8	45.0	15.0	42.3	磨 盤	Q-9	
141	81.5	33.9	14.9	65.3	#	O-7	
142	78.0	38.0	11.9	36.7	磨 盤	T-8	
143	54.0	33.8	10.0	17.2	#	T-8	
144	59.8	37.5	11.4	22.2	#	T-9	
145	57.6	28.0	10.6	14.6	#	S-7	
146	74.2	37.0	6.2	24.4	#	S-11	
147	77.0	37.1	19.0	60.3	磨 石 片	Q-7	RQ13
148	200.0	82.0	80.0	1860	磨 石	O-6	
149	105.0	87.0	37.0	450	#	Q-7	RQ18
150	94.0	88.0	32.0	320	#	Q-7	RQ19
151	118.0	79.0	38.0	530	#	SX	
152	85.0	66.0	32.0	231	#	SX	

\*備考のRQは検出時の登録番号である。

## 5 まとめ

今回の仲台遺跡の調査は東北横断自動車道酒田線（朝日～酒田間）建設工事に伴う、路線内を対象にした緊急発掘調査である。調査期間は平成5年5月12日～10月25日、調査面積は4,750平方mである。

発掘調査の結果、検出された遺構は竪穴住居跡1棟、炉跡2基、土坑13基、列石2条、性格不明遺構8基、柱穴多数他である。出土した遺物は縄文土器、弥生土器、石器、奈良、平安時代の須恵器、中世陶器、近世の瓦、寛永通寶など多岐にわたっている。

竪穴住居（ST1）についてはその推定規模が直径2mと小さく、住居に伴う施設も炉跡以外検出されていない。この他住居の施設として可能性があるのはEL7、EL42で、EL42の石囲炉はST1の7.5m西側で検出されている。炉を囲む礎はかなり焼けているものの、掘り込みは検出されず住居の内部施設の床面、壁面及び柱穴などは検出されていない。そのため、炉が単独で構築、使用されたものか、住居に伴うものか、時期の特定も不明である。また、EL42は地山直上の検出のため炉に伴う遺物として明確なものはないが、この周辺からは縄文時代早期末～前期初頭の土器片数点と縄文後期末～晩期の土器片が検出されている。EL7は内部に焼土が堆積するが底面、壁面はほとんど焼けていない。また、同様の地床炉であるST1地床炉の形態が舟底形を呈するのに対してEL7は箱形である。焼土の質もST1地床炉のものが焼土ブロック状を呈するのに対しEL7は若干軟弱なシルト質の焼土である。EL7周辺からは柱穴等は検出されておらず住居に伴うかは不明な状態である。出土遺物は縄文時代後期末～晩期初頭の深鉢形土器片が2点出土している。

土坑については遺物の出土したものは13基である。このうち、図示したものはSK3～6であるがいずれも礎の出土が見られる。特にSK4は直径30cm程のもので蓋をするような状態にも見え、単なる廃棄、流れ込みとも考えられないような感想をもった。しかし、出土遺物は深鉢形土器片がほとんどで祭祀に関連するような遺物等の出土はなく廃棄に関連する土坑であろうか。次に遺物を多数出土したSK3については木炭が少量に検出されたが焼土の検出は見られず、一個体の深鉢形土器が横位に押し潰された状態で出土していることから廃棄のための土坑であったと考えられる。

柱穴についてはEP12、15、17、18等があるがいずれも覆土中に遺物が混入し掘り込みも深くしっかりとしており、柱穴に間違いはないと考えるが、建物としての配置構成までには至らない。

列石は東斜面下より2条が構築される。調査区東へも延びていることが確認されたがどの地点から構築が始まっているかは不明である。配置される礎の形態、間隔から踏石列と考えられる。時期を決定する明確な共伴遺物は確認されていないが、B地区の列石付近で確認された瓦が同時期とも推定される。また、地元の方から、子供のころに聞いた話として今回検出されたこの2条の列石の交わる付近に「お宮」があってそれが滑り落ちて「皇大神社」になったと聞いたことがある、という興味深い話を伺った。しかし、今回の調査ではこの列石が交わる付近には建物跡などの遺構や遺物は検出されていない。可能

性があるとすればS・T-11付近で検出された瓦がそれに伴うものか。いずれにしても近世以降の所産ではなかろうか。

検出した遺構について簡単にまとめたが、明確な遺物を伴わないE L 42、列石以外は出土遺物からそのほとんどは縄文時代後期末から晩期の所産と考えられる。しかし、ST 1からは74などの弥生土器とも考えられる壺底部や土器片が出土しておりその可能性も有する。

出土した土器については、本遺跡において最も古い時期に比定されるものは2～5の縄文条痕を施す土器で縄文早期末葉に位置付けられる。6～8は縄文早期末～前期初頭に比定される深鉢形土器片である。18は中期初頭、11、12は後期初頭、14～22、27～33、49は三叉文と入組文系の鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器などで縄文時代後期末～晩期初頭に比定されるものである。1、50～68も同時期の深鉢形土器と考えられる。この次の時期に23～26、43、45、46が、34～42、47、48は縄文晩期後半に位置付けられる。また、1本沈線を施文する9、10、鉢の底部や脚台と考えられる74～77は弥生時代の所産とも考えられるが、明確ではない。

石器については、ほとんどが単独の出土であるため明確な時期は不明であるが、82の石鎌がSK 3より出土しており相伴する土器から縄文時代後期末～晩期初頭と考えられる。108の石匙もEP 8から出土しているが他に遺物が検出されていないため明確な時期は不明である。この他に時期の特定できる石器は弥生時代特有とされる98、99のアメリカ形石鎌が2点出土している。

以上仲台遺跡について簡単にまとめてみたが、本遺跡は全体の出土遺物は少ないが縄文時代早期～前期、後期末～晩期、弥生時代とその内容は多岐にわたっている。しかし、内容を伺える遺構に伴う遺物が少ないため不明な点も多く、本遺跡の性格については周辺の調査の結果を待って再度検討したい。

#### 仲台遺跡参考文献

- 1 佐藤清宏・佐藤顕雄1971年『神矢田遺跡第1次・第2次発掘調査報告』山形県遊佐町教育委員会
- 2 佐藤清宏・佐藤顕雄1972年『神矢田遺跡第3次・第4・第5次発掘調査報告と考察』山形県遊佐町教育委員会
- 3 井田秀和1982年『石ヶ森遺跡発掘調査報告書』高島町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 4 大塚誠1982年『漆掛遺跡発掘調査報告書』山形県尾花沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 5 佐藤清宏・佐藤庄一他1984年『砂川A遺跡発掘調査報告書』朝日村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 6 加藤稔他1984年『庚申町遺跡発掘調査総合報告書』大石町埋蔵文化財調査報告書第3集
- 7 安部東1985年『にびく寺遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第92集
- 8 渋谷孝雄・黒坂重人1989年『月ノ木B遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第135集



## 第IV章 栗山遺跡

### 1 調査の概要

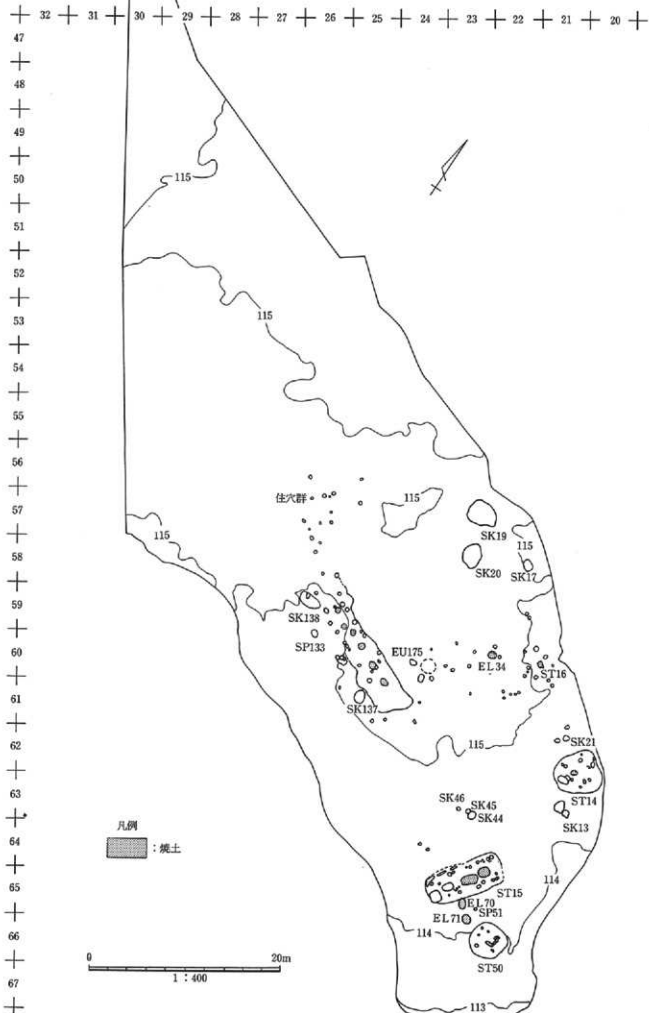
調査区は2ヶ所に設定し、南側に舌状に張り出した段丘上の調査区を第1調査区、北側の段丘縁辺に位置する調査区を第2調査区と呼称することとした。建設予定道路幅のセンター杭(工事計画図STA24+40とSTA24+60)を基にY軸とし、5m四方のグリッドを設置した。第1・2調査区共通に番号を付し、Y軸はN-33'-Wを測る。

調査は、5月12日器材を搬入し、調査区内の環境整備から開始した。次いで、調査区を縁取る様に60cm幅のトレンチを設定し、土層の観察を行った。そのデータと、先の分布調査の結果を照らし合わせながら、重機による表土除去を実施した。その後、人力によって徐々に面を削り、遺構の確認を行った。プラン検出された遺構については、写真撮影・図面作成等の記録作業を並行させながら精査を進めていった。調査は、第2調査区を主に先行させ、後続して第1調査区に取り掛かる工程とした。7月8日に写真測量を行い、続いて旧石器時代の試掘を実施したが、遺物の出土は認められなかった。7月12日、雨天にもかかわらず関係機関・地元の方々をはじめ52名の参加を得て、調査説明会を開催した。7月14日、赤川が警戒水位を超える大雨の中、器材を撤収し、現地調査を終了した。

### 2 遺跡の概観(第2・23・24図)

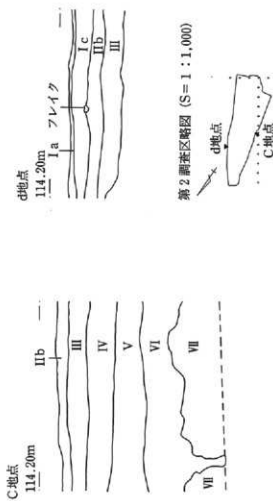
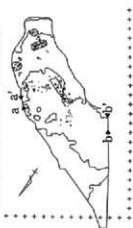
栗山遺跡は、発達した河岸段丘上に位置し、直下を北流する赤川の現在の川床との比高差は、約40mにも達する。栗山遺跡に隣接し、縄文時代晩期を主な時代とする仲台遺跡との比高差も約10mである。晴れた日の栗山遺跡からは、庄内平野の南半を一望することができる。しかし、調査期間中は霧や霧雨の日が多く、強い風にも時折悩まされた。冬も厳しく、雪積も1mを超えるということである。

栗山遺跡は、舌状に張り出した段丘面全域が遺跡範囲と考えられているが、昭和44年着工のお泥灌漑事業で、1~2mの深さで採土され、辛うじて破壊されずに残った台地の東側縁辺が今回の調査の対象となっている。しかし、2ヶ所の調査区内はほぼ平坦で、畑地として削平を受けている状態であった。第1調査区は、南側先端が東に緩やかな傾斜となって遺構が遺存しているが、標高114mを越えた地点から北西方向に進むにつれ、削平が激しくなり、耕作土(Ib)直下は、無遺物層(IIb)であり、褐色粘土質シルト(III)も一部露出していた。明確な壁面を残す遺構は、南端から東側縁辺に限られている。遺構や遺物の分布についても正確なことは分からない状態であるが、段丘面の東側縁辺部に石囲戸を伴う住居跡が3棟(EL34も1棟とする)みられ、やや中央よりに、地床炉と考えられる被熱痕を持つ遺構が存在している。また、弥生土器を伴う遺構として、SK13・17、柱穴が確認されたが、他にも存在した可能性が高い。弥生土器の出土は遺構内に限られている。第2調査区は、第1調査区北西部と似た様相を示し、表土(Ia)と耕作土(Ic)を取り除くと、褐色シルト(IIb)となり、その上面より尖頭器(第36図1)が出土した。



第23図 第I調査区遺構配置図

第1調査区略図 (S=1:1,000)



基本層序上層註記

- I a : 奇形色シルト 赤土
- I b : 奇形色シルト 地味層作土
- I c : 奇形色シルト 地味層作土
- II a : 奇形色粘土質シルト 礫石時代遺物を含む。
- II b : 奇形色粘土質シルト 礫石時代遺物を含む。
- III : 奇形色粘土質シルト 礫石時代遺物を含む。
- IV : 奇形色粘土質シルト 礫石時代遺物を含む。
- V : 奇形色粘土質シルト 礫石時代遺物を含む。
- VI : 奇形色粘土質シルト 礫石時代遺物を含む。
- VII : 奇形色粘土 礫石時代遺物を含む。

### 3 遺構と遺物

#### (1) 縄文時代中期の遺構

調査では、住居跡5棟、土坑10基、地床炉と考えられる被熱痕、柱穴群が検出された。住居跡を中心に各遺構について記す。

##### ST14住居跡・SK35土坑（第27図）

位置：20～21-62～63グリッド内、調査区東側、段丘の最縁辺部。

遺構の確認：Ⅲ層上面でSK35の炭化粒をやや多く含む覆土（1層）を確認し、さらにその周囲に炭化粒を少量含む範囲（4層）を確認。

平面形：不整の楕円形。東側は削平を受けているが、床面の広がりて凡そ推定できる。長軸4.8m・短軸4.3m。主軸方向N-30°-E。

覆土：SK35は2層あり、摩滅した縄文土器片、フレイクを含む。特に上層に多く含む。

ST14は3層あり、炉跡上位は焼土粒を混入し、柱穴内は床面に比べ、炭化粒を含みシルト粒が細かい。床面直上の4層は、Ⅲ層と類似するが、少量の炭化粒と土器を含む。

床面：やや硬く認識できる。Ⅲ層を掘り込み、西側が高い。周溝は認められない。

壁：東壁部分を除いて5～20cm遺存している。Ⅲ層を壁としている。

柱穴：8基ある。石囲炉の北東約40cmの地点を中心にして、約1.5mの円周上にEP150・152を除く6基がのっている。この6基間の間隔は、約1.6mで均一となっている。深さは、15～62cmと幅があり、EP147のみが62cmと深い。

炉：中央南西寄りに位置する。大ききの一定でない礫を12個ランダムに方形に組んだ石囲炉である。長軸0.8m・短軸0.6m。炉跡中央に赤褐色の被熱面が認められるが、炭化物等は出土していない。石囲炉で床面上面に露出している礫は、黒色で被熱度が分かる。石囲のなかには凹石（第38図1）も利用されている。石囲炉の構築法は、石囲よりやや大きめの掘り方を掘り、半分土を埋め、石を設置し、周辺を土で固めている。

重複：確認面が床面より10cm程度上位であり問題は残るが、EP151を切ることや、断面観察から、ST14よりSK35が新しいと考えられる。

遺物：石囲炉の北東、床面より大木8b式深鉢（第33図2）、石囲炉とEP151の間の床面より石鏃（第36図2）が出土した。明確な使用痕の認められない大形の礫（約50m）が床面に点在している。SK35からは、ST15出土土器と接合した浅鉢（第34図4）、LR縄文（縦位）施文の土器片、玉髓質・頁岩のフレイク（20点）が出土している。

##### ST15住居跡（第28図）

位置：22～24-64～65グリッド内。調査区南東端、突き出た段丘の先端部。

遺構の確認：Ⅲ層上面で赤褐色の焼土粒の範囲を2ヶ所確認。その周囲に、炭化粒を少量含む長方形のプランを確認。上位は削平され、ほぼ床面でのプラン検出となった。

平面形：隅丸長方形（2棟の可能性あり）。長軸8.6m・短軸3.7m。主軸方向N-39°-E。

覆土：地床炉が露出した状態での遺構検出であるため、床上位の覆土は不明である。

床面：踏み固められたような明確な床面は認められず、炉の位置や遺物・炭化物の出土状

況より判断した。ほぼ平坦である。Ⅲ層掘り込み、傾斜の修正をして床面を構築していることが、床面下位の炭化粒を含む覆土から理解できる。

周溝：西側に周溝のような構造がみられるが、3ヶ所に途切れる。深さは10～20cmあり、覆土は炭化粒を多く含んでいる。

壁：北東部を除いて、10cm以下の遺存である。Ⅲ層を壁としている。

柱穴：15基ある。E P 47は弥生土器片が出土し、E L 156より新しい。E P 106からは、縄文時代中期の土器片が出土している。E P 105には、柱痕が炭化して遺存し、放射性年代測定(附編I-2)の結果、約4,500年前を示している。以上、柱穴の観察からは、S T 15は、2時期の重複が推定できる。仮にE L 155を中心にとすると、約1.5mの円周上にE P 95・97・99・100・101・102・47の7基がのることになる。

炉：中央と北東側に赤褐色の土色変化が見られ、地床炉であると考えられる。E L 155長径1.2m・短径0.9m、E L 156長径1.4m・短径0.9m。平面形は楕円・掘り方は認められず、床面が被熱した状態である。S X 157も地床炉の可能性はある。

重複：炭化物が多量に出土し、周溝状の構造がある南西側と、柱穴が整然と周る北東側に大きく分けられる。後者が新しいものと推定できるが、遺構検出が床面直上のため断定はできない。S K 72は、遺物を含まず時期は特定できないが、覆土の状態から後世のもの判断する。

遺物：覆土より、S K 35出土土器片と接合した浅鉢(第34図4)、縄文時代中期の深鉢片(第34図2)、磨石(第38図5～8)が出土している。E P 106(第34図3、第34図2)と同一個体の可能性あり・E P 47(第35図1)は柱穴の観察で述べた内容で遺物が出土し、時代決定資料となり得る。

S T 16住居跡・E L 34炉跡(第25図)

位置：21～23-60～61グリット内。S T 16はS T 14と同様に調査区東側、最縁辺部に位置し、E L 34はその西側に隣接している。

遺構の確認：Ⅲ層上面で石囲(E L 18炉・E L 34炉跡)を確認。

平面形・堆積土・壁：削平を受け不明。

床面：E L 18の北側と東側に、周囲に比べ硬く表面に照りが見られる状態が遺存する。E L 18を伴う住居跡(S T 16)の床面である。E L 34を伴う遺構については不明。

柱穴：S T 16の柱穴として検出できたのは、9基ある。深さは、36～59cmで、径は40cm前後である。E P 74・75・76・82間、E P 77・79・80・81間がそれぞれ約1.2mで均一である。E P 74から溝状文様を持つキャリパー形深鉢片(第34図1)が出土している。E L 34に伴う柱穴は8基ある。深さは、4cm～38cmと浅い。この東側に柱穴4基が列を成している。

炉：E L 18は大きさや形の一定でない礫13個が方形に組まれた石囲炉である。長軸0.7m・短軸0.5m。炉跡中央に被熱面が認められるが、炭化物等は出土していない。E L 34は、大きさの一定ではない礫7個が円形に組まれた石囲炉である。外径0.3m。中央に若干の

被熱痕が認められる。E L 18、34共に礫上位が黒色しており、使用のレベル、つまり床面が推定できる。石囲には、磨石も含まれている。構築方法は、S T 14 E L 153と同様である。

遺物：摩滅した土器片、頁岩のフレイクが床面から数点出土している。時代決定資料と成り得るのはE P 74出土遺物のみである。

#### S T 50住居跡（第26図）

位置：22～23-66グリット内。調査区南東端、突き出た段丘の先端部。

遺構の確認：Ⅲ層上面で円形のプランを確認。

平面形：円形。径約3.9m。南側の一部が木の根により攪乱されている。

覆土：8層ある。自然堆積であるが、床面直上に多量の炭化物と共に焼土が出土している。その状態から、焼失家屋であることが推定される。

床面：硬質な面は認められない。Ⅲ層を掘り込み、平坦である。周溝はない。

壁：Ⅲ層を壁とし、急角度に掘り込まれる。壁高20～30cmを測る。

柱穴：6基ある。深さは25～50cm。S T 50の中心を軸に、約1mの円周上にE P 64を除く4基のり、E P 63・67間が1.6mである他は、各間1.2mと均一である。

炉：中央やや東よりに、赤褐色の土色変化があり、地床炉と推定される。長軸0.8m・短軸0.4m。楕円形を呈し、掘り込みは認められない。

重複：S T 50の西側に、地床炉とみられるE L 70・71と柱穴（S P 51）があり、単独のものであるのかは不明。

遺物：床面から突起のある深鉢（第32図1）、渦状沈線文を持つ深鉢（第32図2）が出土している。その特徴から大木8bに属すると考えられる。覆土からは、深鉢片（第32図3・4・5、第33図1）、石筥（第36図10）が出土した。床面直上から建築材と考えられる炭化材が多量に出土した。

#### 25～27-59～62グリット遺構群（第30図）

位置：25～27-59～62グリット内。調査区中央部東寄りに位置する。

遺構の確認：Ⅲ層上面で赤褐色の楕円形プランが点在するのを確認する。

平面形：堆積土・壁：不明。

床面：地床炉も上位が削平され、被熱痕がわずかに遺存している状態である。床面も判然としなが、掘り方のような土色の変化が、平面プランと土層断面で一部観察できる。

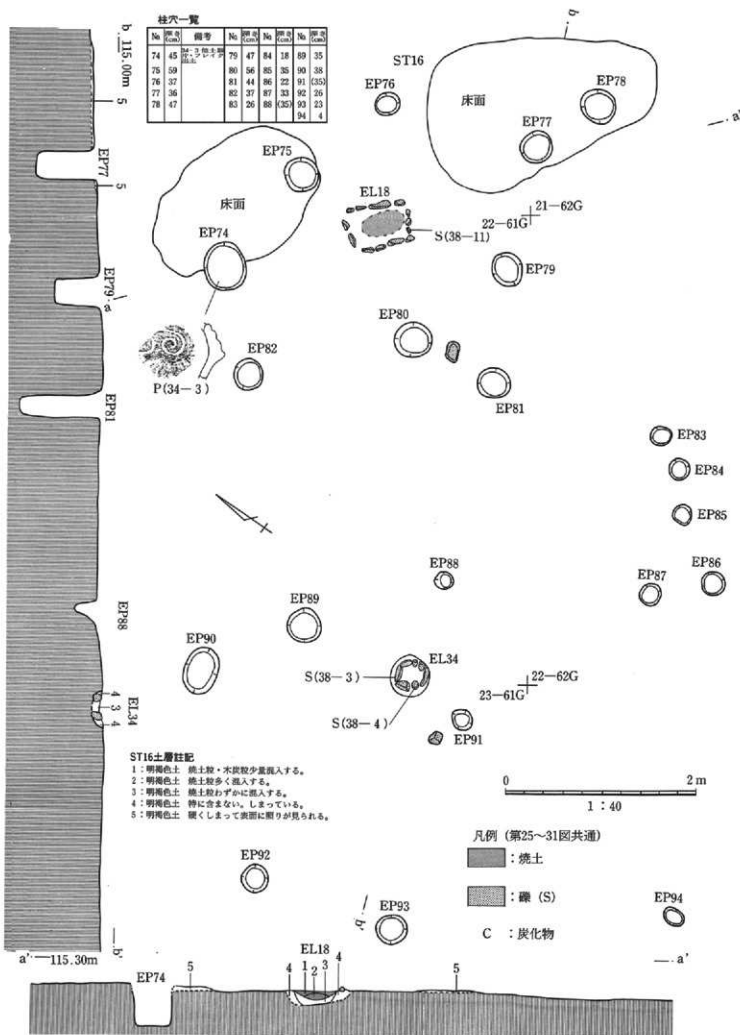
柱穴：29基ある。深さは、7～54cm。地床炉を中心に列を成している。対になる配置も見られるが、深さにばらつきがある。S P 42・43は焼土粒・炭化粒を多量に、S P 122・123は炭化粒を多量に含む。

炉：7基ある。楕円形を呈し、長軸0.2m・短軸0.15mが最小で0.6m・0.4mが最大である。上位は削平されて構造は不明だが、地床炉と推定される。

重複：不明。複数の遺構の重複の可能性もある。S P 111は地床炉より古い柱穴で、S P 129～132は土坑よりも新しい柱穴である。

柱穴一覧

No.	深さ (cm)	調査 年次	No.	深さ (cm)	No.	深さ (cm)	No.	深さ (cm)
74	45	34-3	75	47	84	18	89	35
75	59	34-3	80	56	85	35	90	38
76	37	34-3	81	44	86	22	91	(35)
77	36	34-3	82	37	87	33	92	26
78	47	34-3	83	26	88	(35)	93	23
							94	4



## ST16土層柱記

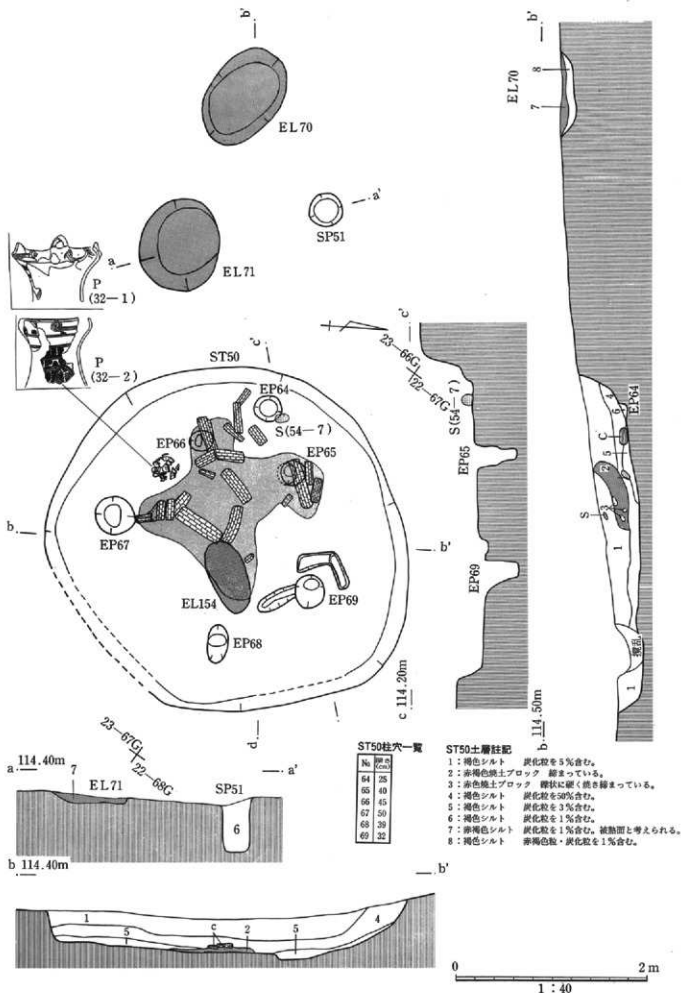
- 1: 明褐色土 焼土粒・木炭粒少量混入する。
- 2: 明褐色土 焼土粒多く混入する。
- 3: 明褐色土 焼土粒わずかに混入する。
- 4: 明褐色土 特に含まない。しまっている。
- 5: 明褐色土 硬くしまって表面に照りが見られる。

## 凡例 (第25~31図共通)

- : 焼土
- : 糠 (S)
- C : 炭化物

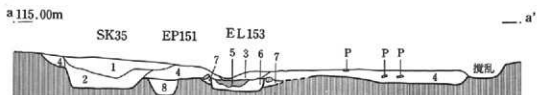
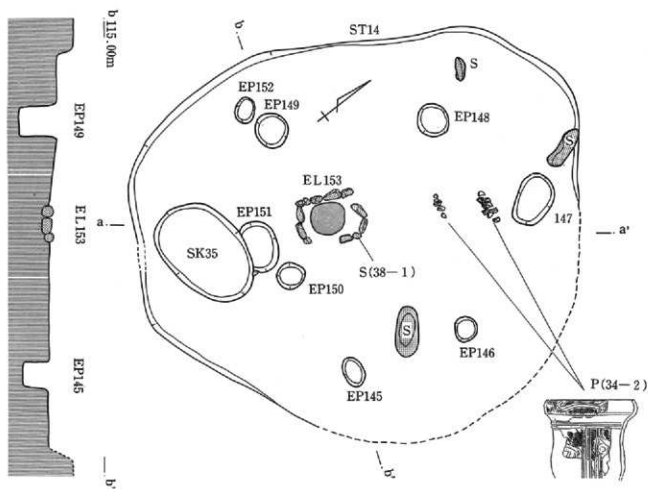
0 2m  
1 : 40

第25図 ST16住居跡・EL34炉跡



第26図 ST50住居跡





柱穴一覧

No	径 (cm)	No	径 (cm)
145	31	150	31
146	25	151	16
147	42	152	15
148	30		
149	29		

SK35土層註記

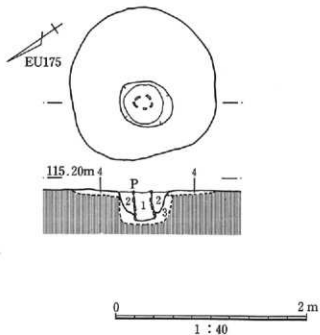
- 1: 褐色シルト 木炭粉多量混入する。
- 2: 褐色シルト 1層に比べ木炭粉をさらに多量混入する。瓦礫フレイトを少量含む。

ST14土層註記

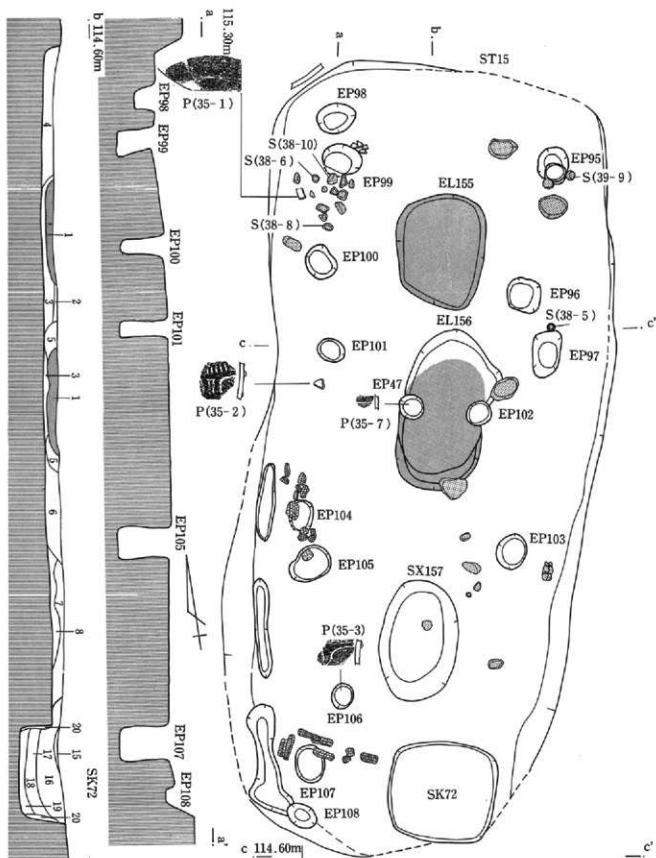
- 3: 褐色シルト 焼土粒・明褐色土を少量混入する。
- 4: 褐色シルト 木炭粉わずかに混入する。しまっている。
- 5: 褐色シルト 焼土粒を多量混入する。
- 6: 明褐色シルト 焼土粒・木炭粉少量混入する。しまっている。
- 7: 明褐色シルト 6層に比べ、若干層味を帯びる。
- 8: 明褐色シルト 木炭粉を少量含む。

EU175土層註記

- 1: 褐色粘土質シルト 硬くしまっている。
- 2: 褐色粘土質シルト 赤褐色粒子を少量含みややしまっている。
- 3: 褐色粘土質シルト 赤褐色粒子を含まず、地山に比べやや層味を帯びる。
- 4: 褐色粘土質シルト 地山に比べやや赤味を帯びる。

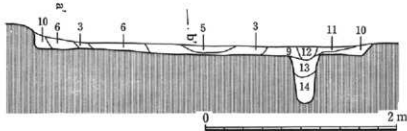


第27図 ST14住居跡・EU175



柱穴一覽

No	径 (cm)	深 (cm)	No	径 (cm)	深 (cm)
95	36	47	26		
96	32	103	33		
97	51	104	45		
98	55	105	50		
99	47	106	18		
100	38	107	46		
101	49	108	11		
102	42				



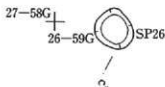
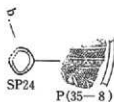
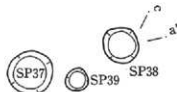
**ST15土層註記**

- 1: 褐色土 赤褐色粒(焼土粒)を多量に混入する。
- 2: 褐色土 赤褐色粒・木炭粒を少量混入し、3層に比べ粘性がなくなっている。
- 3: 褐色土 赤褐色粒・木炭粒少量混入
- 4: 褐色・暗褐色土 木炭・木炭粒多量混入し、焼土粒も比較的多量混入する。
- 5: 褐色・暗褐色土 3層と似るが、木炭をわずかに混入するだけである。
- 6: 明褐色土 木炭粒わずかに混入する。しまっており、地山に近い。
- 7: 暗褐色土 しまりなくボソボソしている。根による攪乱と考えられる。
- 8: 暗褐色土 木炭粒多量混入する。上面からの根による攪乱と考えられる。しまっている。
- 9: 暗褐色土 焼土を多量混入する。
- 10: 暗褐色土 木炭粒を少量混入する。ボソボソしている。
- 11: 褐色土 木炭粒少量混入する。
- 12: 褐色土 焼土少量混入する。
- 13: 褐色土 木炭粒少量混入する。よくしまっている。
- 14: 明褐色土 木炭粒わずかに混入する。よくしまっている。

**SK72土層註記**

- 15: 焼土
- 16: 暗褐色土 木炭粒混入する。
- 17: 暗褐色土 木炭粒多量混入する。
- 18: 暗褐色土 木炭粒・焼土混入する。
- 19: 木炭層
- 20: 焼土 バリバリに焼けている。

27-57G  
26-58G

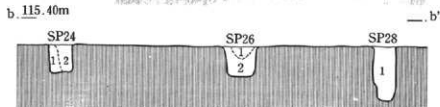
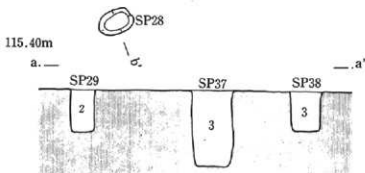


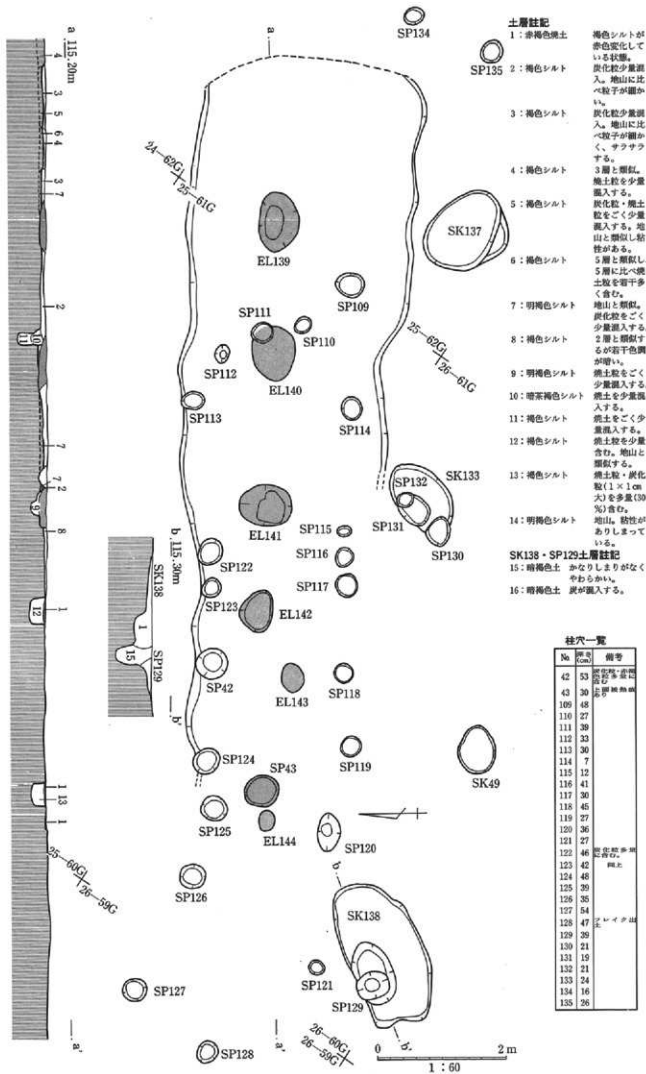
**柱穴一覧**

No.	深さ(cm)	層号	No.	深さ(cm)	層号
24	29	2	30	32	
25	35	2	31	43	
26	32	2	36	37	
27	15		37	40	
28	35		38	28	
29	33		39	33	

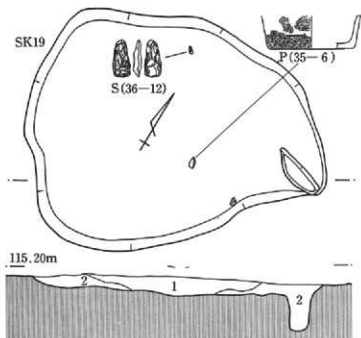
**SP24・26・28・29・36・37・38土層註記**

- 1: 暗褐色粘土質シルト 炭化物5%含む。
- 2: 暗褐色粘土質シルト 炭化物1%含む。
- 3: 暗褐色粘土質シルト 炭化物3%含む。
- 4: 暗褐色粘土質シルト 炭化物10%含む。



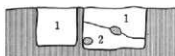


第30図 25~27-59~62グリット遺構群



SK19・20土層註記

- 1: 褐色土 暗褐色土・木炭粒を混入する。
- 2: 暗褐色土 褐色土・木炭粒多量混入する。
- 3: 褐色土 木炭粒わずかに混入する。よくしまっており、地山に似る。
- 4: 褐色土 木炭粒わずかに混入する。3層よりも粘性あり、地山に似る。



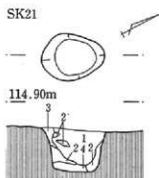
SK44・45土層註記

- 1: 暗褐色粘土質シルト 炭化粒3%含む。
- 2: 暗褐色粘土質シルト 炭化粒10%含む。



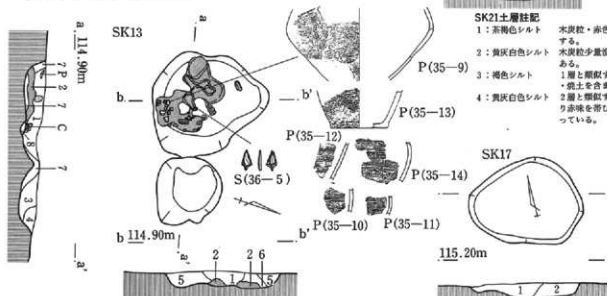
SK46土層註記

- 1: 暗褐色粘土質シルト 炭化粒3%含む。



SK21土層註記

- 1: 茶褐色シルト 木炭粒・赤色粒子多く混入する。
- 2: 黄灰白色シルト 木炭粒少量混入し、灰質である。
- 3: 褐色シルト 1層と類似するが、木炭粒・炭土を含まない。
- 4: 黄灰白色シルト 2層と類似するが、2層より赤味を帯び(酸化?)している。

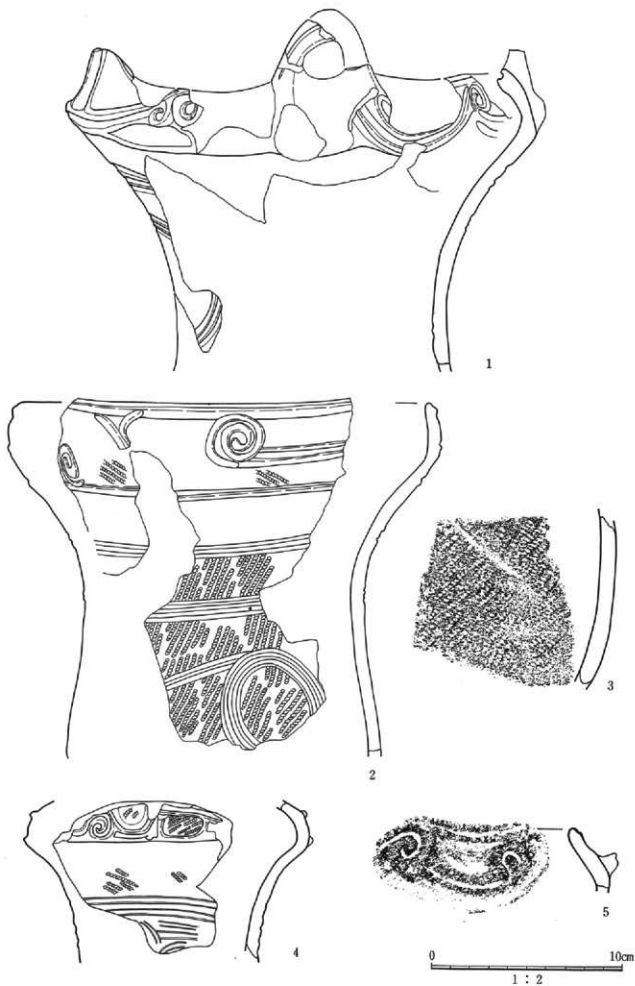


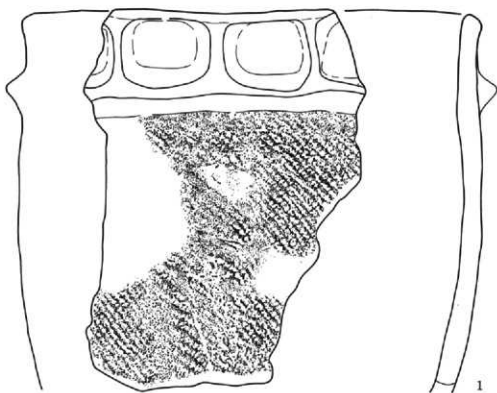
SK13土層註記

- 1: 褐色土 木炭・焼土粒多量混入する。
- 2: 焼土ブロック
- 3: 褐色土 1層と類似するが1層より木炭粒少ない。
- 4: 暗褐色土(ローム) 木炭粒・焼土粒少量混入する。
- 5: 褐色土 焼土粒・木炭粒多量混入する。
- 6: 褐色土 焼土ブロック・焼土・木炭粒多量混入する。
- 7: 褐色土 木炭粒わずかに混入する。
- 8: 褐色土 木炭粒多量混入する。

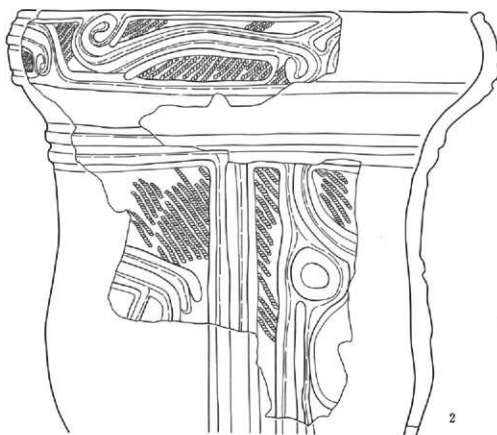
SK17土層註記

- 暗褐色シルト 0.5~2cm次の炭化物を15%含む。  
褐色土10%含む。  
暗褐色シルト 1層より明るく炭化物・褐色粒子を5%含む。

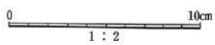


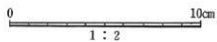
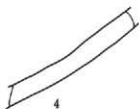
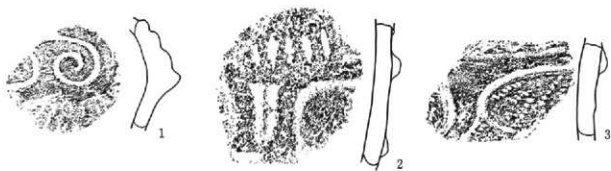


1

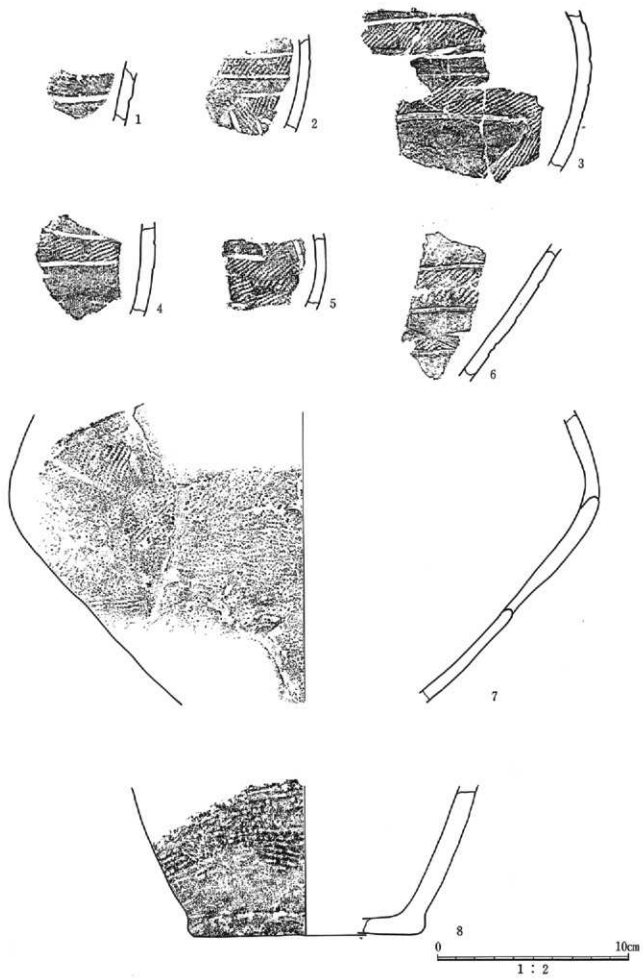


2









第35圖 遺物(4)





0 10cm  
1 : 2

第37圖 遺物(6)

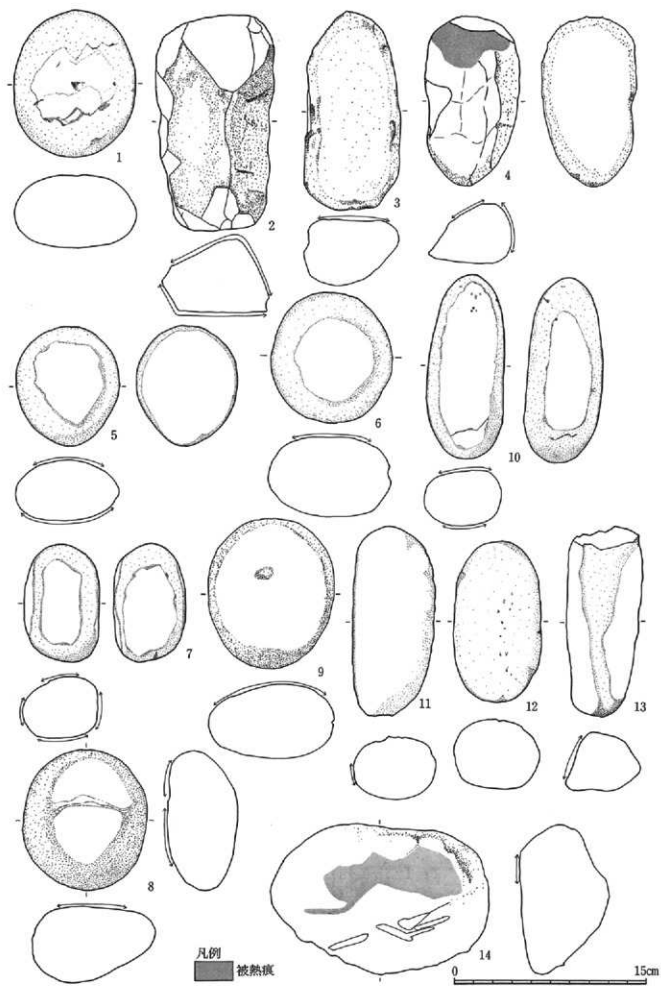


表3 遺物観察表

探図番号	図版番号	出土位置	類別	器種・器形	成形技法	外 面	内 面	流量(mm)	備 考
第32図1	36	ST50-Y	縄文土器	深鉢 平口縁 縁部で2個1対の 円形突起を並列し、 口縁部が内湾する。 口縁部が内湾する。	紫地土積み上げ 接合面が器外面 方向に傾斜 積み上げ幅約3 cm	口縁部に文様帯があり、幅の狭い無文帯を纏 て胴部文様帯が展開する。 口縁部～横位渦巻文(調整盤起縁文 断面形 長方形) 胴部～連続渦巻文(調整沈縁文) 地文～LR縄文	ミガキ	口徑 器高 器厚 203 (180) 7	
第32図2	36	ST50-Y	#	深鉢 平口縁 口縁部が内湾する。	紫地土積み上げ	口縁部に文様帯があり胴部が無文帯で胴部文 様帯を展開する。 口縁部～横位渦巻文(調整盤起文、磨減激し い) 胴部～直線状渦巻文(調整沈縁文) 地文～RL縄文	ミガキ	口徑 器高 器厚 (216) (180) 8	
第32図3	36	ST50-Y	#	深鉢	紫地土積み上げ	地文～RL縄文	ミガキ	器厚 8	
第32図4	36	ST50-F	#	深鉢 平口縁 口縁部が内湾する。	紫地土積み上げ	口縁部に文様帯があり、幅の狭い無文帯を纏 て胴部文様帯を展開する。 口縁部～横位渦巻横円文(調整盤起縁文 断 面かまぼこ型 一部無調整あり) 胴部～連続渦巻文(調整沈縁文) 地文～LR縄文	ミガキ ナデ	口徑 器高 器厚 (150) (80) 7	
第32図5	36	ST50-F	#	深鉢 平口縁 口縁部が内湾する。	不明	口縁部に文様帯がある。 横位渦巻文(調整沈縁文 ミガキ)	ミガキ	器厚 8	
第33図1	36	ST50-F	#	深鉢 平口縁 口縁部がほぼ直 立し、胴部がやや 内湾する。	紫地土積み上げ 接合面が器外面 方向に傾斜	口縁部に文様帯があり口縁部直下に地文がある。 口縁部～横円形区画文(陰帯を削り出し横円 の窓枠状をつくり磨いている) 地文～LR縄文	ミガキ	口徑 器高 器厚 (240) (222) 11	
第33図2	37	ST14-Y	#	深鉢 平口縁 口縁・胴部が内 湾する。	紫地土積み上げ 口縁部がほぼ直 立し、胴部がやや 内湾する。	口縁部に文様帯があり、胴部が無文帯で胴部 文様帯を展開する。 口縁部～横位渦巻文(調整盤起縁文 断面形 かまぼこ形) 胴部～縦直線状円文(調整盤起縁文 断面形 かまぼこ形) 地文～LR縄文	ミガキ ミガキ	口徑 器高 器厚 (242) (222) 7	胴部の一部に 被熱痕あり。
第34図1	37	ST16-EP74	#	深鉢 口縁部が内湾する。	不明	口縁部～横位渦巻横円文(調整盤沈文 縁部 に調整沈縁で透書を描いている。横円文内に 縄文が地文としてある。)	ミガキ	器厚 10	
第34図2	35	ST15-Y	#	深鉢	紫地土積み上げ	胴部～横円文(調整盤起縁文 縁部に磨長横 円の刺突がある。) 地文～縄文	ミガキ	器厚 9	第34図3と同一 胴部か?
第34図3	35	ST15-EP106	#	深鉢	不明	横円文(調整盤起縁文) RL縄文	ミガキ	器厚 10	
第34図4	37	ST15-F SK第35図F	#	浅鉢 外傾する	紫地土積み上げ 接合面が器外面 方向に傾斜。	ミガキ	ミガキ	口徑 器高 器厚 (180) (169) 10	ST15とSK35 の接合資料
第34図5	37	SK19-F1	#	深鉢 ゆるいあけ蓋	円盤状の底部に 胴部を積み上げて いる。	縦位R筋赤文	ミガキ	器高 底径 器厚 (69) (180) 10	
第34図6	37	Z2-62G-II	#	深鉢	不明	半壺竹管平行沈縁文 粘土貼り付け		器厚 8	
第34図7	37	Z5-65G-II	#	深鉢	不明	半壺竹管平行沈縁文		器厚 8	
	37(1)	Z7-61G-II	#	深鉢	不明	半壺竹管平行沈縁文		器厚 8	
第35図1	38	ST15-EP47	弥生土器	不明	不明	文様不明(無調整沈縁文 磨消縄文)		器厚 7	
第35図2	38	SP24-F	#	不明	不明	文様不明(無調整沈縁文 磨消縄文) 地文～RL縄文	ナデ ミガキ	器厚 6	内面炭化物付 着
第35図3	38	SK13-F1	#	壺?	不明	文様不明(無調整沈縁文 磨消縄文) 地文～LR縄文かRL縄文	ミガキ	器厚 7	第35図3～6 同一個体の可 塑性あり。
第35図4	38	SK13-F2	#	不明	不明	文様不明(無調整沈縁文 磨消縄文) 地文～LR縄文?	ミガキ	器厚 8	
第35図5	38	SK13-F2	#	不明	不明	文様不明(無調整沈縁文 磨消縄文) 地文～LR縄文?	ミガキ	器厚 8	外表面炭化物付 着
第35図6	38	SK13-F	#	鉢形土器?	紫地土積み上げ 積み上げ幅約 7.5cm	文様不明(無調整沈縁文 磨消縄文) 地文～LR縄文	ミガキ	器厚 7	
第35図7	38	SK13-F1-2	#	壺	紫地土積み上げ 接合面が器内面 方向に傾斜 積み上げ幅7cm?	地文～LR縄文	ミガキ	器高 器厚 (148) 10	
第35図8	38	SK13-F1	#	壺	円盤状の底部の 周縁を上につま み出し胴部を積 み上げている。 紫地土積み上げ 積み上げ幅3cm	地文～LR縄文	ミガキ	器高 底径 器厚 (75) (63) 8	

\*出土位置のYは床面、Fは覆土、Gはグリッド、ローマ数字は基本層序を示す。表4についても同じである。

表4 遺物計測表

標頭番号	図版番号	器 種	出土位置	法量 (mm)			重さ (g)	石 材	備 考
				長さ	幅	厚さ			
第36図1	39	尖頭器	11-19G IIb上層	(65)	15	5	5.5	珪質頁岩	基部・先端部欠損 RQ1
第36図2	39	石鏃	ST14-Y	29	17	6	2.4	#	RQ161
第36図3	39	#	24-62G IIa	27	(12)	5	1.2	#	カエリ部欠損
第36図4	39	#	25-62G IIa	30	16	5	1.7	#	
第36図5	39	#	SK13-F2	21	11	3	0.6	#	焼土中より出土 RQ171
第36図6	39	石鏃	24-61G IIa	30	10	7	1.9	#	
第36図7	39	#	ST14-F	(37)	10	8	4.0	#	基部・先端部欠損
第36図8	39	石鏃	25-61G IIa	54	54	13	28.3	#	RQ149
第36図9	39	#	22-61G IIa	49	45	17	17.6	#	
第36図10	39	石鏃	ST50-F	55	23	10	17.3	玉髓	
第36図11	39	#	23-59G IIa	74	27	14	36.4	珪質頁岩	
第36図12	39	#	SK19-F2	79	31	15	46.3	#	
第36図13	39	#	30-48G IIa	(40)	32	12	16.5	#	基部欠損
第36図14	39	#	60-22G IIa	60	32	13	25.6	珪質	RQ174
第36図15	39	#	25-62G IIa	42	27	12	11.9	玉髓	
第36図16	39	#	24-54G IIa	60	33	15	28.0	珪質頁岩	
第36図17	39	#	26-62G IIa	71	35	20	47.6	#	RQ114
第36図18	39	#	24-64G IIa	63	40	25	60.7	#	
第36図19	39	#	28-59G IIa	74	53	16	58.4	#	
第37図1	39	横鏃	21-64G IIa	47	38	10	22.1	#	RQ2
第37図2	39	#	26-62G IIa	60	33	12	26.7	玉髓質	
第37図3	39	#	27-62G IIa	58	27	10	15.3	玉髓	
第37図4	39	#	ST14-F	51	27	8	13.1	珪質頁岩	
第37図5	39	#	24-62G IIa	63	51	14	38.8	#	RQ100
第37図6	39	不定形石鏃	ST14-F	45	50	8	21.0	#	
第37図7	39	#	25-65G IIa	47	35	10	13.4	#	
第37図8	39	#	25-60G IIa	61	46	19	51.9	#	
第37図9	39	#	ST14-F	79	23	10	13.9	#	
第37図10	39	#	23-62G IIa	71	32	9	11.3	#	
第37図11	39	#	ST16-Y	73	34	10	20.5	#	RQ158
第37図12	39	#	23-61G IIa	76	35	10	31.5	#	左側刃部に使用痕あり
第37図13	39	#	23-59G IIa	80	33	10	32.6	#	RQ156
第37図14	39	ブレイド	24-56G III	138	46	21	93.4	#	RQ176
第38図1	40	凹石	ST14-EL153	116	94	58	940	花崗岩	表面中央に浅い凹 溝・裏面に磨痕あり EL153-No2
第38図2	40	磨石	ST14-F	170	84	59	1330	砂岩	
第38図3	40	#	EL34	157	73	53	965	花崗岩	EL34-No5
第38図4	40	#	EL34	134	69	48	585	砂岩	一部被熱痕あり EL34-7
第38図5	40	#	ST15-Y	94	80	48	460	#	ST15-No8
第38図6	40	#	ST15-F	103	96	63	910	花崗岩	ST15-No2
第38図7	40	#	ST15-F	93	58	49	395	安山岩	ST15-No10
第38図8	40	#	ST15-Y	110	97	60	850	花崗岩	表面に被熱痕あり ST15-No9
第38図9	40	凹石	ST15-F	118	98	58	860	安山岩	表面中央に浅い凹 表面に磨痕あり ST15-No3
第38図10	40	磨石	ST16-EL18	146	59	44	555	花崗岩	下平に被熱痕あり EL18-No8
第38図11	40	#	ST50-F	150	64	50	645	安山岩	
第38図12	40	#	ST50-F	126	69	56	770	花崗岩	
第38図13	40	#	ST50-F	150	57	47	660	#	
第38図14	40	#	ST50-Y	171	117	70	1580	安山岩	赤色の被熱痕あり EP64磨痕

※ 備考のRQおよびNoは、検出時の登録番号である。

遺物：認められない。

#### 土坑（第31図）

不整楕円形で長軸約3mのSP19・20がある。壁高が約10cm遺存する。底面は平坦で、SK19は40cm、SK20は5cm弱の落ち込みがある。SK19覆土から縦位LR燃糸文を施す深鉢底部（第34図5）、石筥（第36図12）が出土している。楕円形で長軸約0.8m未満と小形で深さ約40cm土坑にSK21・44・45がある。SK21は焼土粒、SK44は炭化粒を多量に含む。

#### (2) 弥生時代の遺構（第28・29・31図）

弥生土器が出土した遺構は、土坑2基（SK13・17）、柱穴4基（SP22・24・26・47）である。SP24・26の検出状況や覆土から、周囲の柱穴の中には同時期のものがあると考えられ、建物の存在も推定できる。各遺構はⅢ層上面で確認している。

SK13土坑：上位削平で2つの不整円形を呈し、床面は平坦。長軸1.8m・短軸1.2m。西側に硬い焼土層・炭化材・5cm大の礫が床面直上に堆積している。焼土層とその上位覆土より磨消縄文が沈線で区画された特徴を持つ弥生土器（第35図3～8）、焼土層から石鏃（第36図5）が出土。

SK17土坑：楕円形を呈し、床面は緩い凸凹がある。長軸0.7m・短軸0.5m。床面直上に硬い焼土塊、炭化物を含む層がみられ、この層よりSK13と類似する弥生土器片が出土。

#### (3) 遺物

遺物は整理箱にして約7箱出土している。縄文時代中期中葉の資料を主体とし、他に後期旧石器時代、縄文時代草創期、弥生時代に関するものが出土している。ここでは、その概括を述べ、細部については観察表・計測表に示す。

土器は、遺構出土遺物を図化した。縄文時代中期中葉と弥生時代の土器が出土している。縄文土器は、器形が確認できるものとして深鉢形土器と浅鉢形土器（第34図4、SK35とST15の接合資料）がある。図化した深鉢形土器は、文様帯と地文で構成され、口縁部に文様帯を持つ。頸部に沈線で区画された明確な無文帯を持ち、胴部文様帯が展開するものに、第32図2、第33図2がある。口縁部には、調整のある隆起線文で横位渦巻文が施され、胴部は、第32図2が調整された沈線文、第33図2が調整された隆起文で表現された文様が展開している。頸部途中から胴部文様帯が展開するものに第32図1・4がある。口縁部は、調整隆起線文で文様が施され、胴部は調整沈線で表現された文様が展開する。第32図1は、2個1対の突起を有し、北陸系の影響が認められる。第32図1・2・4、第33図2は、口縁部が内彎し、キャリパー形を呈する。粘土の貼り付け方や、調整の仕方に各々違いがみられる。第33図1は、口縁部直下から地文が施され、口縁部がほぼ直立し胴部がやや内彎している。他に、底部が遺存し燃糸文が施された第34図5、半截竹管平行沈線文がみられる第34図6、7がある。

弥生土器は、SK13・17、SP21・24・26・47から出土している。鉢形土器と壺があり、胎土は白く柔かい。磨消縄文が施されている。文様構成は不明である。

石器は、打製石器33点、礫石器14点出土している。第36図1は、薄い縦長の剣片を素材

とした尖頭器である。両面の全面にわたってフルーティング様の剥離が行なわれている。石鏃は、有茎3点(第36図3~5)、無茎1点(第36図2)が出土した。やや小形の第36図5は、弥生土器に伴い、SK13から検出された。剥片の縁辺に調整加工を施し、一端に尖った先端部を持つ錐(第36図6・7)、つまみ状のものを作り出している石匙(第36図8・9)は、各々2点出土している。背面と主要剥離面の両面が加工され、長軸の末端が刃部と考えられるものを石筥とした。片面加工で刃部の角度が45°以下の緩やかなものもこれに付け加えた。第36図10~19が石筥に属し、打製石器の1/3を占める。縦長剥片の先端部に、急角度の調整加工を施して刃部を作り出したものを振器とした。第37図1~5がこれに属する。他に剥片に二次加工が認められるもの8点(第37図6~13)、末端部が厚いブレード(第37図14)1点が出土している。

#### 4 まとめ

調査では、住居跡5棟、土坑10基、柱穴群、地床炉が検出された。削平を受けており不明の点が多いが、柱穴の検出状況からさらに住居跡が存在した可能性がある。

石囲炉を持つ住居と地床炉を持つ住居が検出されたが、出土遺物による時期的な差は認められない。ST15、25~27-59~62G区内、ST50北側のEL70・71等、被熱痕を持つ遺構の性格が判然とせず、資料としては制限があるが、炉の形態の違いがどのような意味を持つのか課題である。

ST14・16は、段丘面縁辺の急斜面に沿って位置している。段丘の崩落等の地形の変化を考慮しながら、住居をこの環境に築く理由について再度検討する必要がある。夏期冬期の使い分け(文献6)や、サイクルのある一時滞在等も考えられる。

遺物の主体は、縄文時代中期中葉大木8b式に併行するものと理解される。該期の遺跡は、山形県の内陸部に大きな集落跡としてまとまってみられるが、庄内地方では現在のところ希薄である。月山を狭んで、西側の庄内地方と東側の内陸地方の盛衰を左右したものは何であろうか。なお、栗山遺跡よりやや時代が新しいものとして朝日村野新田遺跡が知られている(文献5)。

縄文時代中期中葉と時代を異にするものとして、弥生時代後期に属するであろう遺物を伴う遺構が検出されている。柱穴も確認されることから、建物の存在も考えられる。他に縄文時代草創期(中石器時代)の尖頭器、後期旧石器時代のブレードが各1点出土している。これに伴う遺構は確認できなかった。

#### 栗山遺跡参考文献

- 1 『岡山遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第4集 山形県教育委員会 1975年
- 2 『主要地方道尾花沢・寒河江線道路改良工事発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第9集 山形県教育委員会 1977年
- 3 『上深沢遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書1』宮城県文化財調査報告書第52集 宮城県教育委員会 日本道路公団 1978年
- 4 『企画展 縄文絵巻』福島県立博物館 1991年
- 5 『分布調査報告書(19)』山形県埋蔵文化財調査報告書第171集 山形県教育委員会 1992年
- 6 『季刊考古学』第44号 小林達雄他 1993年



## 第V章 柳沢A遺跡

### 1 調査の概要

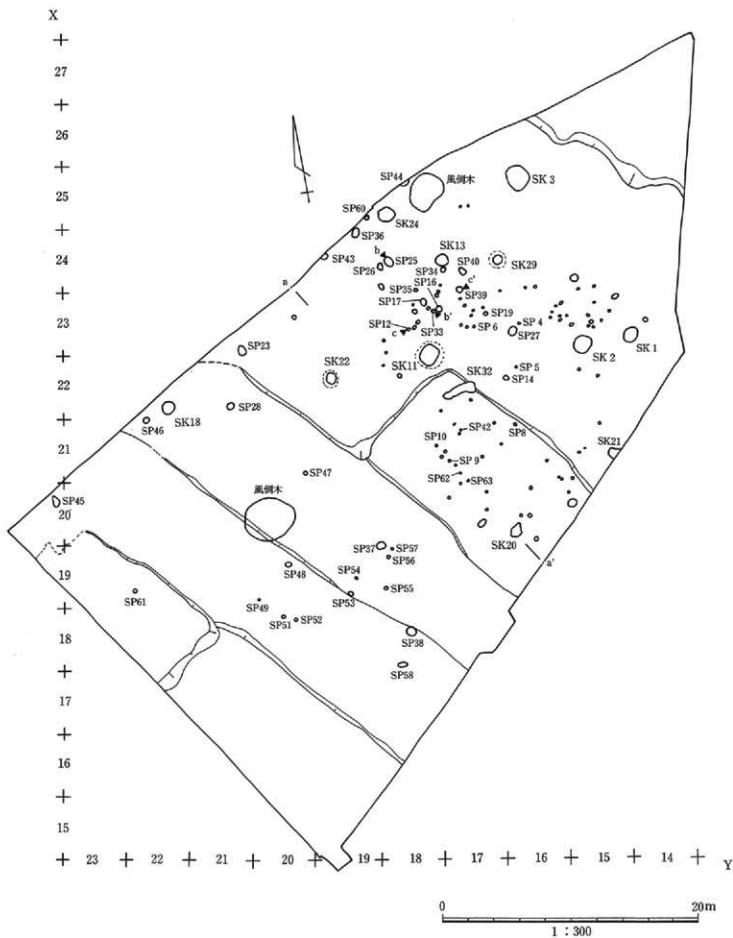
調査区は2ヶ所に設定し、岡山と蔵王山の2つの峰に囲まれた中央の平坦部に位置する調査区を第1調査区、柳沢集落の西側斜面に広がる調査区を第2調査区と呼称することとした。建設予定道路幅のセンター杭(工事計画図STA42+60とSTA42+80)を基にX軸とし、5m四方のグリッドを設置した。第1・2調査区共通に番号を付し、Y軸はN-78°30'-Wを測る。

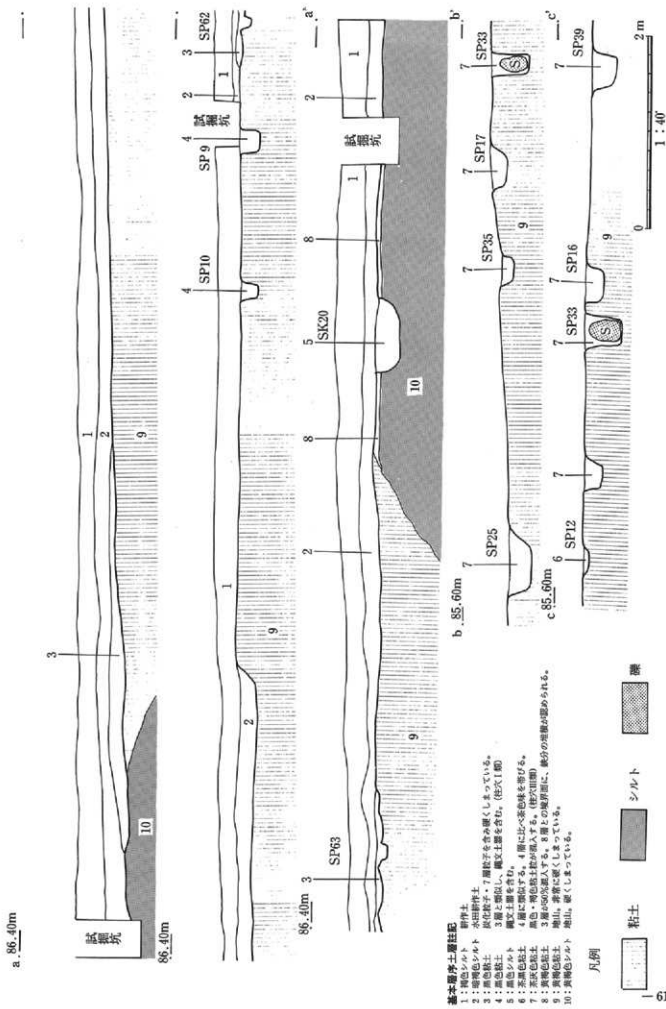
調査は、7月19日、調査区とその周辺的环境整備から開始した。次いで、第1調査区、第2調査区の順にトレンチ調査を実施し、先に行った分布調査の結果と照合させながら、層序を観察した。そのデータに基づき、第1調査区は重機を用いて表土を除去し、その後、人力で面を削り遺構を確認して行った。プラン検出された遺構は、写真撮影・図面作成等の記録作業を並行して精査を進めた。一方、第2調査区は、柳沢地区集落直上の急斜面にある立地条件と、異常気象による悪天候の影響から、当初予定した調査工程について安全性に不安があるとし、再度検討することになった。そして、さらに密なトレンチ調査を実施して、遺構や遺物の所在を把握し、その部分についてののみ表土を除去することとした。トレンチ調査の結果、A区(塚状遺構)・B区(石塔の集石)・C区(板碑)・D区(炭化物を含む落ち込み)の4ヶ所について特定することができた。永慶寺跡と伝えられる平場の裏山に当たる、路線内の斜面についても調査を実施したが、遺構等は確認されなかった。A・D区は人力で、B・C区は重機を用いて表土を除去し、面削りを行い遺構・遺物の検出に努めた。第1調査区同様に記録作業も並行して進め、9月22日に第1・2調査区の写真測量を行った。それに先立ち、快晴の9月21日、関係機関各位・地元の方々をはじめとする93名の参加者のある中、調査説明会を開催した。最後に、残土の処理と危険箇所の埋め戻しを行い、9月29日、器材を撤収し現地調査を終了した。

### 2 遺跡の概観(第3・40・42図)

第1調査区は、北と南東を尾根に囲まれた台地上にあり、調査期間中に襲って来た台風の影響を全く受けなかった。昭和40年代に行われたほ場整備の際、第1調査区はかなりの削平を受けて水田が造られている。現在は果樹畑となっているが、耕作土を取り除くと重機痕と水田面が顔を出す状態で、地山まで削平されていることが分かる。地山は、粘性の強い黄褐色粘土で、台地の縁辺はシルト質となっている。遺構は、この地山まで深く掘り込んだもののみ遺存している。フラスコ状土坑7基は、調査区中央部に点在している。柱穴は、縄文時代のものは調査区全域にあり、土師器を含む覆土に類似するものは、調査区中央部西寄りに集中していることが分かった。

第2調査区は、戦後の畑地造成で緩斜面が人力で開墾され、石塔を含む礎が集石されたと考えられる。また、昭和40年代には、北側の峰裏から重機が導入され、かなりの土量を動かして果樹畑が造られているが、この際B区も擾乱を受けた状態である。A・C・D区



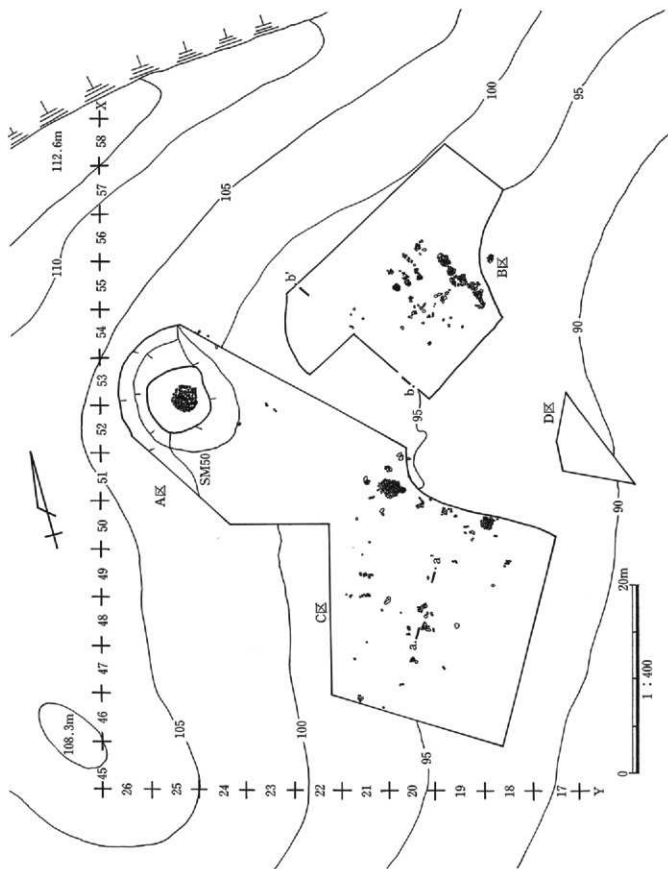


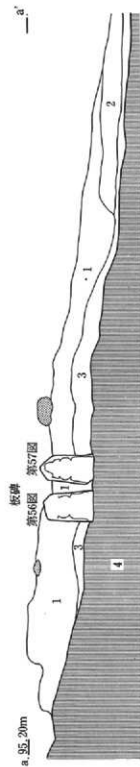
基本層序土層註記

- 1 : 褐色シルト
  - 2 : 褐色粘土
  - 3 : 黒色粘土
  - 4 : 黒色粘土
  - 5 : 黒色シルト
  - 6 : 赤黒色粘土
  - 7 : 赤黒色粘土
  - 8 : 赤褐色シルト
  - 9 : 赤褐色粘土
  - 10 : 赤褐色シルト
- 粉作土  
水田耕作土  
灰化粘土・7層粘土を含み厚くしまっている。  
3層と類似し、腐植土層を含む。(注1層)  
腐植土層を含む。  
4層に比へば赤色味を帯びる。  
黒色・褐色粘土が混入する。(注6層)  
腐植土層が混入する。8層との境界面に、細分の境界が認められる。  
堆山、表面で硬くしまっている。  
堆山、硬くしまっている。

凡例

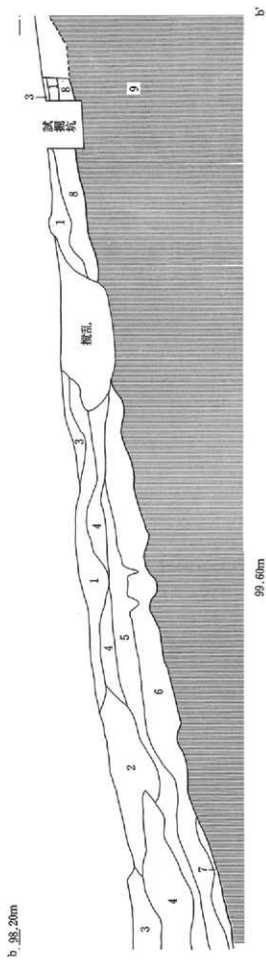
- 粉作土
- 粘土
- シルト
- 礫





基本層序土層柱記(a-a')

- 1: 灰褐色シルト 砂付土
- 2: 褐色シルト 1層および3層の侵入する。腐土。
- 3: 褐色シルト 旧状土。均質で砂が少なくなる。
- 4: 褐色シルト 強くしまっている。



基本層序土層柱記(b-b')

- 1: 暗褐色シルト 腐土・砂付土。
- 2: 暗褐色シルト 腐土。1層よりしまっている。
- 3: 腐土。
- 4: 灰褐色シルト 木炭粒と少量の少量層を侵入する。
- 5: 灰褐色シルト 木炭粒を侵入する。旧状土と考えられる。
- 6: 暗褐色シルト 分層が本層に似てしまっている。
- 7: 暗褐色シルト 分層・木炭粒をわずかに侵入する。
- 8: 褐色シルト 9層を少量に侵入し、6層と類似するが、あまりがない。
- 9: 暗褐色シルト 粗粒。しまっている。



は、現在の耕作土が10~15cm堆積し、その直下にSM50構築時の旧表土と推定される黒色シルト・暗茶褐色シルトが堆積している。事業区域外であるが、第2調査区の位置する斜面の先端部が舌状に張り出しており、ここから石筍が出土している（文献43）。

### 3 遺構と遺物

#### (1)第1調査区

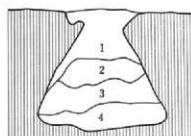
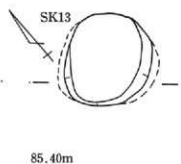
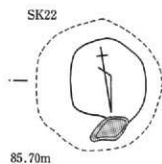
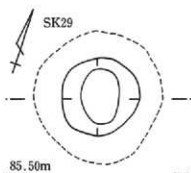
**遺構** 上位は削平されているが、地山まで掘り込み遺存している遺構として、土坑12基、柱穴121基が確認された。

土坑は、次の4類に分類することができる。I類は、平面形が円や楕円形を基調とし、開口部から径が一端狭くなり、その下部で大きく内側に入り込むフラスコ状の断面形を示すもので、SK1・11・13・22・29が属する。SK1は、機能時はフラスコ状を呈し、廃棄後壁の崩落が進んだと見られるため、I類に含めた。粘土を掘り込み底面は平坦である。覆土は自然堆積で、オーバーハングした壁の崩落状態がよく観察できる。このことから、検出時の断面形は、機能時の形を留めていないと理解される。SK11の6層床上5cmから鉢（第45図2）が斜位で、その上位から磨石（第48図1~3）・凹石（第48図4）が出土している。これは、土坑が機能されなくなった直後の廃棄または流れ込みと考えられる。II類は、平面形が円形を基調とし、部分的に底部が開口部より内側に入り込むもので、SK18・24が属する。シルト質の地山を掘り込み壁は緩やかなカーブを描き底面は平坦である。SK18覆土から、流れ込んだ弥生土器壺片（第46図6）が出土している。III類は、平面形が円や楕円形を基調とし、底部が開口部より内側に入り込まないもので、SK2・3が属する。SK3は、シルト質と粘土質の地山の境界部に位置する。覆土もシルトと粘土が混在し深鉢（第46図1）を含む。IV類は、平面形が不整形で浅く壁が緩やかな傾斜のもので、SK20・21・32が属する。SK21はシルト質、20・32は粘土質地山を掘り込む。

柱穴は、覆土の観察から次の3類に分類することができる。I類は、黒色粘土・シルトで炭化粒を含み、土坑の堆積土中に類似するものがある。直径・深さ約20cmと小型で浅い。II類は、I類の覆土に茶褐色粒子を含むものである。I類に比べて規模がやや大きい。I・II類は、縄文土器片やフレイクが出土している。III類は、やや灰色を帯びた暗茶色粘土・シルトで炭化粒子を含む覆土である。III類には、土師器が出土したSP16が属する。他に土師器出土の例がないため断定はできないが、I・II類と時期を異にする一群があると推定できる。長径は50~60cm前後と大きく、深さは20~40cmである。柱穴群の組み合わせについては不明である。

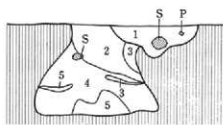
**遺物** 遺物は、整理箱3箱と非常に少ない。縄文時代中期初頭の資料を主体とし、他に弥生土器、中世陶器、近世陶・磁器が数点出土している。ここでは、概要を述べ、細部については遺物観察表に記すこととする。

土器は、遺構出土物を中心に図化した。口唇部に単節の捻糸圧痕文の縦位施文、口縁部に横位施文が行われ、器形は円筒式土器の特徴を示す深鉢（第45図1）がSK11、折り返し状口縁で結節結束羽状縄文の横位施文を持つ深鉢（第46図1）がSK3の覆土から出



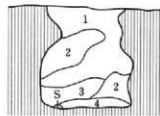
SK29土層註記

- 1: 黒色粘土 炭化粒を含む。しまっている。
- 2: 黒白色粘土 1層を部状に含む。しまっている。
- 3: 褐色粘土 地山に比べやや粘性を帯びる。
- 4: 黒色粘土 やわらかく、しまりが少ない。3層をまだらに含む。



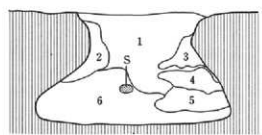
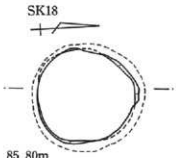
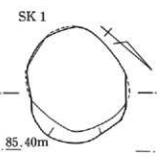
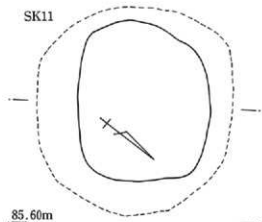
SK22土層註記

- 1: 茶褐色粘土 黒刺木層土
- 2: 黒色粘土 3層をまだらに30%含む。
- 3: 褐色粘土 2層をまだらに30%含む。
- 4: 茶褐色粘土 2層より茶色味が強い。
- 5: 褐色粘土 4層を5%含む。



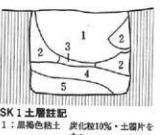
SK13土層註記

- 1: 茶褐色粘土 炭化粒を5%含む。
- 2: 褐色粘土 炭化物・1層を含む。オーバーハングした壁の崩落土。
- 3: 黒褐色粘土 地山粒子を含む。炭化物が1層に比べて少なく、粘性が強い。
- 4: 灰褐色粘土 炭化粒3%含む。しまりが少ない。



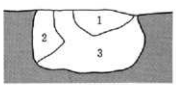
SK11

- 1: 灰茶褐色粘土・炭化粒 黒色粒を含む。
- 2: 褐色粘土 地山(褐色粘土)に1層を50%含む。壁崩落土。
- 3: 褐色粘土 地山に1層を5%含む。壁崩落土。
- 4: 褐色粘土 地山に1層を10%含む。壁崩落土。
- 5: 褐色粘土 地山に1層を20%含む。壁崩落土。
- 6: 黒褐色粘土 炭化粒・1層を10%含む。しまりがなく粘性が強い。



SK 1土層註記

- 1: 黒褐色粘土 炭化粒10%・土層片を含む。
- 2: 褐色粘土 オーバーハングした壁部の崩落土。しまりが少ない。
- 3: 黒褐色粘土 1層に2層が混入した状態。しまりが少ない。
- 4: 黒褐色粘土 炭化粒3%含む。
- 5: 褐色粘土 4層を若干含む。しまりが少ない。



SK18土層註記

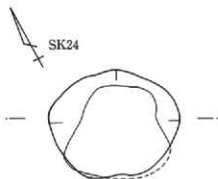
- 1: 黒色シルト 炭化粒10%含む。
- 2: 褐色シルト 1層を10%含む。
- 3: 褐色シルト 1層を30%・炭化粒10%含む。

凡例 (第43・44図)

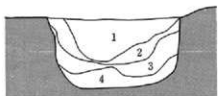
- 黄褐色シルト
- 黄褐色粘土



1 : 40

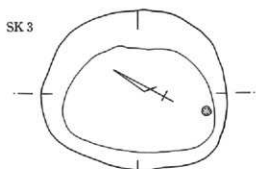


85.20m

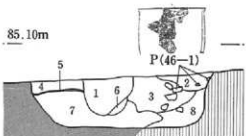


SK24

- |            |                                     |
|------------|-------------------------------------|
| 1: 暗茶褐色シルト | 炭化粒子・赤褐色粒子を含む。                      |
| 2: 茶褐色シルト  | 炭化粒子・赤褐色粒子を含む。                      |
| 3: 暗褐色シルト  | オーバーハングする壁が崩落したものの<br>地山をまだらに30%含む。 |
| 4: 暗褐色シルト  | 地山をまだらに10%含む、しまりが無い。                |



85.10m



SK3

- |           |                   |
|-----------|-------------------|
| 1: 黒色シルト  | 炭化物を含む。           |
| 2: 黒色粘土   | 炭化物を含む。硬くしまっている。  |
| 3: 茶褐色シルト | 炭化物・褐色シルト・土器を含む。  |
| 4: 茶褐色粘土  | 炭化物・褐色シルト・土器を含む。  |
| 5: 鉄分電層   |                   |
| 6: 褐色シルト  |                   |
| 7: 黒褐色シルト | 地山粒(褐色シルト)を10%含む。 |
| 8: 黒褐色粘土  | 地山粒を10%含む。        |

SK32



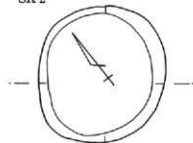
85.80m



SK32土層註記

- 1: 黒色粘土 炭化粒を10%含む。

SK2



85.50m

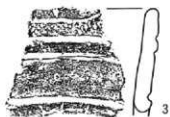
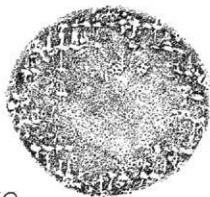
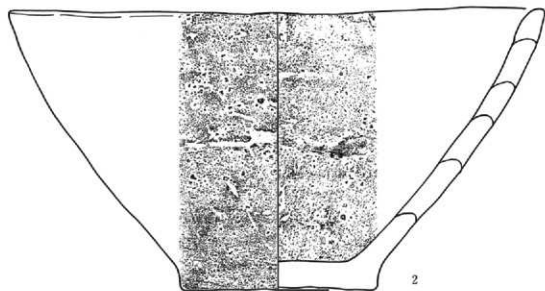


SK2土層註記

- 1: 暗茶褐色粘土 炭化粒10%含む。

0 2m  
1: 40

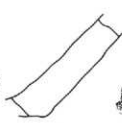
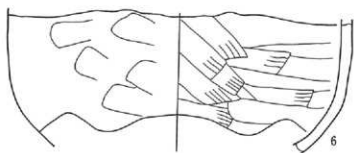
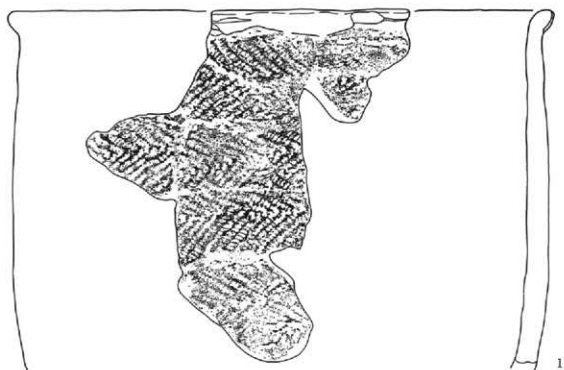




0 10cm

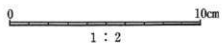
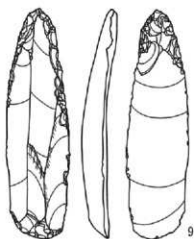
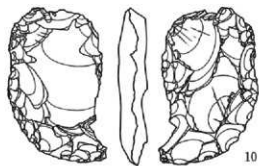
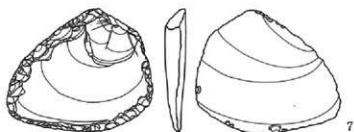
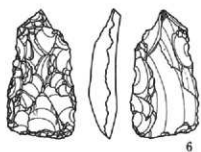
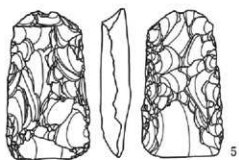
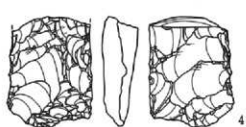
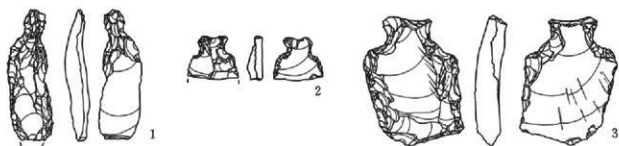
1 : 2

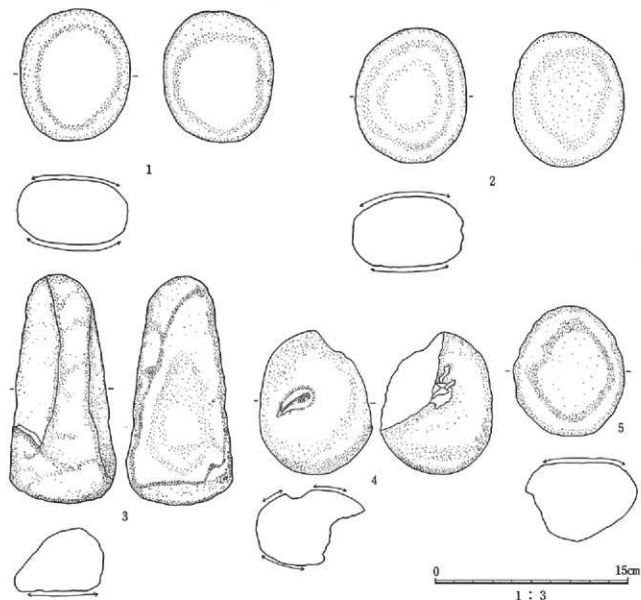
第45図 遺物(1)



0 10cm

1 : 2





第48図 遺物(4)

土している。第45図1・第46図1は繊維を含まないが、胎土に湿り気を持つ。半截竹管平行沈線文が施された第46図2・3は、柱穴から出土した資料で、羽黒町郷ノ浜遺跡に出土例がみられる(文献21)。他に、口縁部が直立した横位施文をもつ弥生時代前期の所産と考えられる甕(第46図6)、SP16から出土した土師器壺(第46図7)、耕作土中から出土した珠洲系陶器摺鉢(第46図8)、灰釉と鉄釉のみられる瀬戸焼、染付のある磁器等が出土している。

石器は、打製石器10点、礫石器5点が出土した。打製石器は、相対するノッチによってつまみを作り出しているものを石匙(第47図1～3)、背面と主要剥離面が加工され長軸の末端を刃部としているものを石筥(第47図4・5)、剥片の縁辺に刃部を作り出しているものを削器(第47図10)、刃部を急角度の調整加工で作出し、背面のみの片面加工を施しているものを搔器(第45図7～9)とした。第47図9は、縦長剥片を利用したエンドスクレイパーで、基部は両面から調整加工が入り打面とバルブを飛ばしている。側縁部の調整は

貝殻状である。SK21と耕作土から黒曜石のフレイクが各1点出土した。礫石器は、自然石に磨痕がある磨石（第48図1～3・5）、敲打痕と磨痕がある凹石（第48図3）の2種で、すべて土坑からの出土である。

## (2) 第2調査区

柳沢地区集落の直上に位置する第2調査区からは、北に鳥海山、東に月山を望むことができる。東に面した斜面は、北東を蔵王山、東を岡山に囲まれた奥まった地形である。調査区下方には、平安時代～南北朝時代に永慶寺が所在したと伝えられる平場がある。永慶寺はその後、藤島町八色木に移転し現在に至る（文献1）とされている。また、隣接する蔵王山には、5本の堀切りがあるとされ、掘跡に関連する施設の存在の可能性が考えられている（平成2年度柳引町教育委員会調査結果）。

**遺構** 今回の調査区では、A区から塚状遺構（SM50）、B・C区から転位している石塔が検出された。D区の炭化物を伴う落ち込みは、人為的な痕跡が認められなかった。

SM50は、第2調査区の西側斜面の上位、51～53-24～26グリッド内に位置する。旧表土（第49図35層）上面に構築され、長軸12.40m、短軸11.60m、長軸はN-25°-Wを測る。北西側裾部は、昭和40年代の畑地造成の際の盛土を受けている。以下、推定される構築順を示し、併せて検出状態と構造についても記す。

### ①斜面を切り崩し、平坦部を造り出す。

約25度の角度で西から東に降りる斜面を崩して、一辺約7mの方形の平場を造り出し整地している。

### ②平場に方形の掘り込みをし、その斜面上位側に、溝状の掘り込みを巡らす。

整地した平場のほぼ中央に、底面が一辺約4mの方形施設を構築している。西側は約60cmと深く掘り込み、地山（37層）まで到達している。面は平坦で黄褐色粘土が丁寧に敷かれている。溝は一部不明であるが、施設の斜面上位を巡るように、幅1～2m、深さ約40cmで認められる。

### ③施設中央に壺を設置し、礫を周囲に積み上げる。

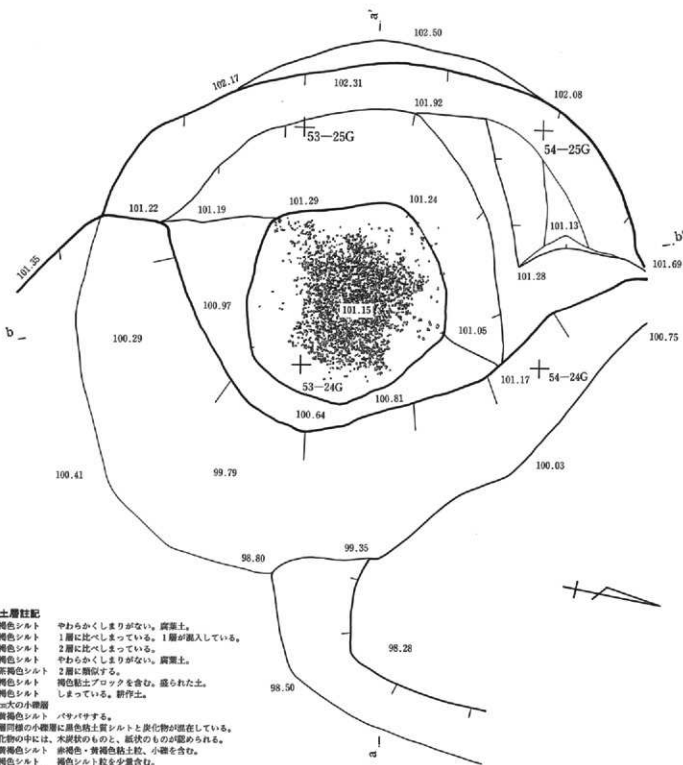
施設のやや北東よりに珠洲系陶器壺（第51図）を正位に設置し、15cm前後の礫を周囲に積み上げている。約50cmの礫が1つみられる。壺は頸部から口縁部が打ち撞かれている。18cm、6.5kgの礫（図版51）が壺の上位を覆っている。壺内は、土壌（リン・カルシウム分析試料3・4）が堆積し水が混入している状態であった。

### ④施設部分を埋め戻し、マウンドの輪郭を整える。

方形に掘り込んだ部分を埋め戻し、中央部がやや窪んだ一辺約6.5mの隅丸方形の平場を構築し、粘性のある土（化粧土）で成形している。

### ⑤埋め戻した平場に、方形の集石を行う。

10cm～20cmの礫で、長軸4m、短軸3.5mの長方形の集石が行われている。北側と東側の先端が攪乱を受けている。集石の中央部は、直径1.3mの範囲で、摺鉢状に窪んで礫が組まれている。窪んだ部分は礫が黒色化しており、炭化物を多量に含んだ土壌と5cm大の



#### SM50土層註記

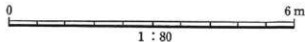
- |                                   |                                 |
|-----------------------------------|---------------------------------|
| 1: 赤褐色シルト                         | やわらかくしまりが無い。腐葉土。                |
| 2: 茶褐色シルト                         | 1層に比べしまっている。1層が混入している。          |
| 3: 黄褐色シルト                         | 2層に比べしまっている。                    |
| 4: 黒褐色シルト                         | やわらかくしまりが無い。腐葉土。                |
| 5: 暗茶褐色シルト                        | 2層に類似する。                        |
| 6: 茶褐色シルト                         | 褐色粘土ブロックを含む。選られた土。              |
| 7: 黒褐色シルト                         | しまっている。耕存土。                     |
| 8: 5cm次の小礫層                       | バヤバヤする。                         |
| 9: 暗黄褐色シルト                        | バヤバヤする。                         |
| 10: 8層間様の小礫層に黒色粘土質シルトと炭化物が存在している。 |                                 |
| 炭化物の中には、木炭状のもの、紙状のものが認められる。       |                                 |
| 11: 暗黄褐色シルト                       | 赤褐色・黄褐色粘土粒、小礫を含む。               |
| 12: 黒褐色シルト                        | 褐色シルト粒を少量含む。                    |
| 13: 暗黄褐色シルト                       | しまっている。                         |
| 14: 暗褐色シルト                        | 均質でしまっている。                      |
| 15: 黄褐色粘土                         | 黄白色・白色粘土ブロックを含む。しまっている。         |
| 16: 褐色粘土質シルト                      | 18層が混入している。22層と類似する。            |
| 17: 暗黄褐色シルト                       | 均質でしまっている。                      |
| 18: 暗褐色シルト                        | 14層と類似するがやや色調が暗い。               |
| 19: 黒色シルト                         | 炭化粒・小礫を含む。                      |
| 20: 赤褐色粘土                         | 22層と類似するが、やや赤味を帯びた色調である。        |
| 21: 暗褐色粘土質シルト                     | 14層と類似するが、やや粘性がある。              |
| 22: 褐色粘土質シルト                      | マウンド下位(0°方向)につれて粘性が増す。          |
| 23: 黒褐色シルト                        | 18層と類似するが、色調がやや黒味を帯びる。          |
| 24: 赤褐色粘土質シルト                     | 20層と類似するが、粘性が弱い。                |
| 25: 暗褐色シルト                        | 黄褐色・黒褐色シルト等の粒子をまだらに含む。          |
| 26: 暗褐色シルト                        | 25層に比べ黄褐色シルト粒を多く、黒褐色シルト粒を少なく含む。 |
| 27: 黒褐色シルト                        | 黄褐色シルトを少量含む。黒味を帯びた色調である。        |
| 28: 暗赤褐色シルト                       | 18層と類似するが、やや赤味を帯びた色調である。        |
| 29: 黒色シルト                         | 18層と類似し、小礫・炭化粒を少量含む。            |
| 30: 暗褐色シルト                        | 26層と類似。粒子の向きが異なり、26層と分けて藍土である。  |
| 31: 茶褐色シルト                        | 均質で、炭化粒を少量含む。                   |
| 32: 茶褐色シルト                        | 31層に比べ、赤味の強い色調で粘性がある。           |
| 33: 暗褐色シルト                        | 褐色シルト粒を少量含む。                    |
| 34: 暗黄褐色シルト                       | 褐色シルト粒を少量含む。                    |
| 35: 黒色粘土質シルト                      | しまっている。                         |
| 36: 黄褐色粘土質シルト                     | 35層から37層への隣移層。                  |
| 37: 黄褐色粘土質シルト                     | 硬くしまっている。                       |

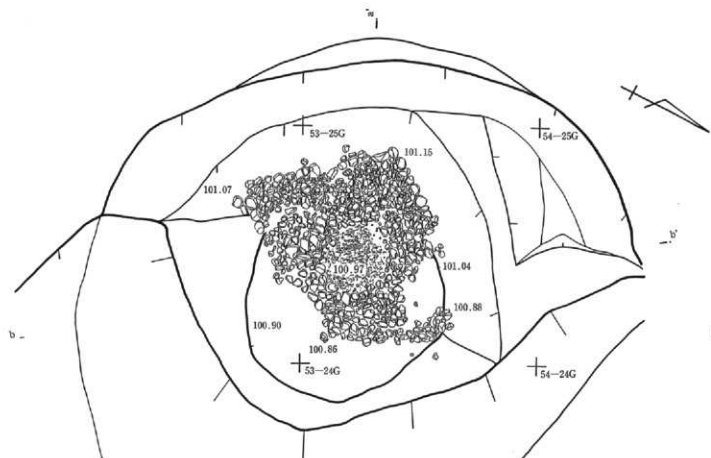
#### SM50現況

#### 土層註記補註

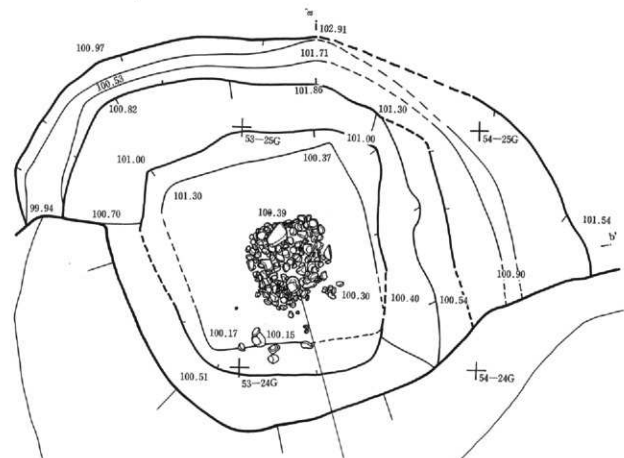
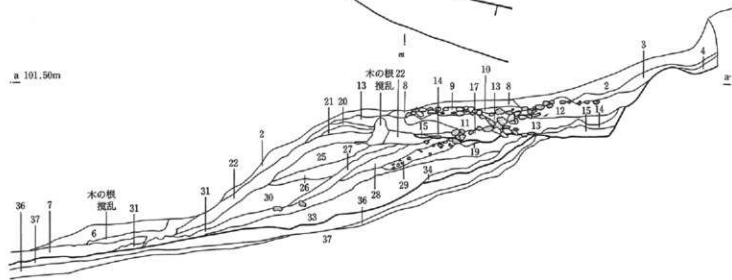
- SM50構築後の藍土 1~7層
- SM50内埋積放積層を目的とするもの 8~18層
- SM50化整土 20~24層
- SM50構築のための藍土(埋積の切り崩し土を含む) 25~34層
- SM50構築時の旧藍土 35層

図中の数字は絶対高を示し、単価はmである。

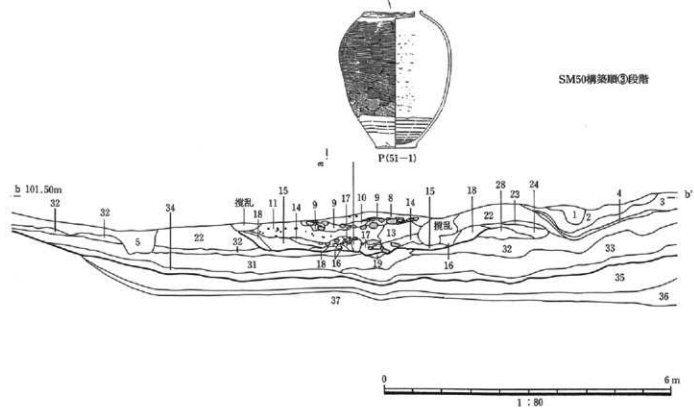


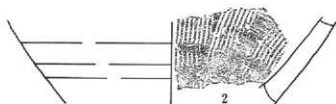
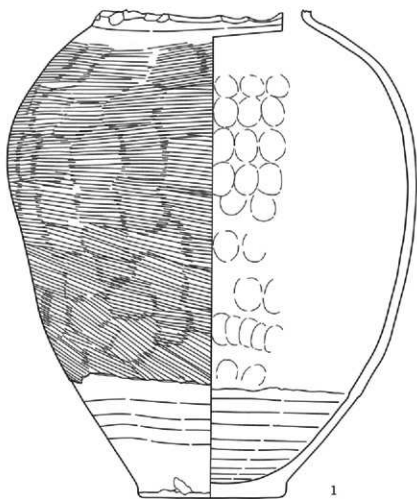
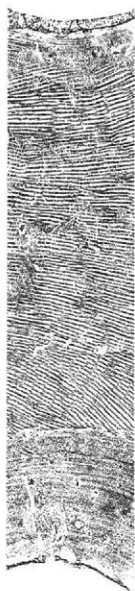


SM50構築跡⑤段階

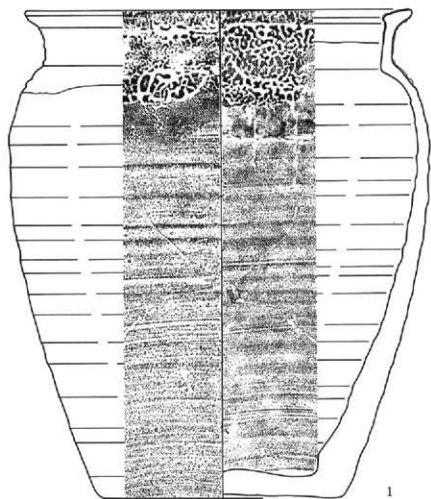


SM50構築跡⑥段階

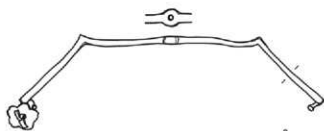




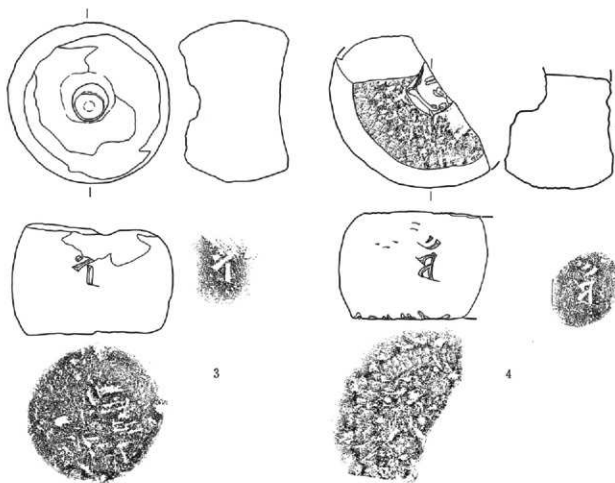
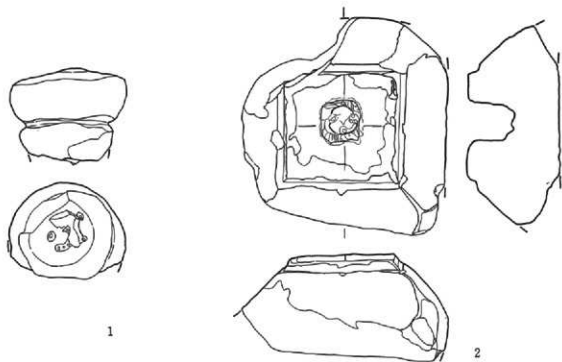




1

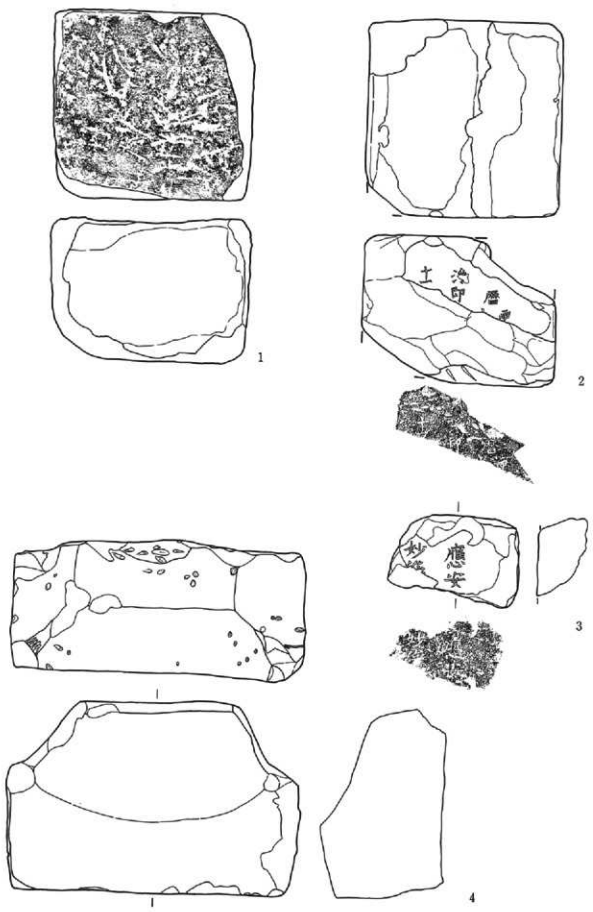


1 : 2

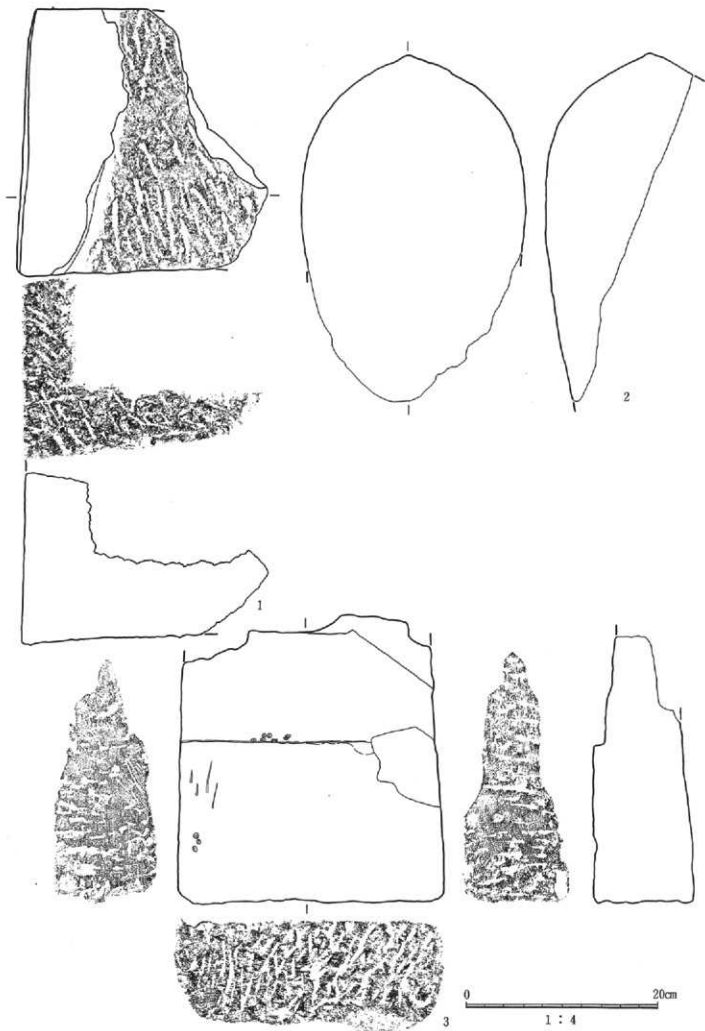


0 20cm

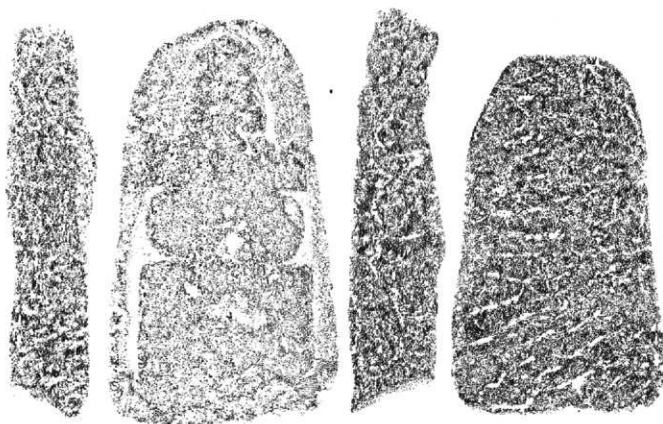
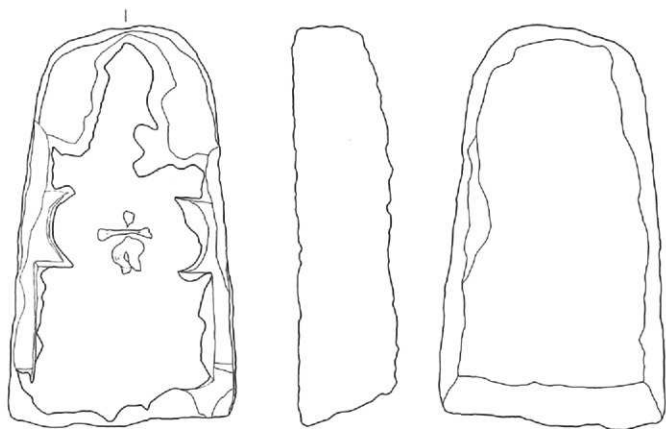
1 : 4

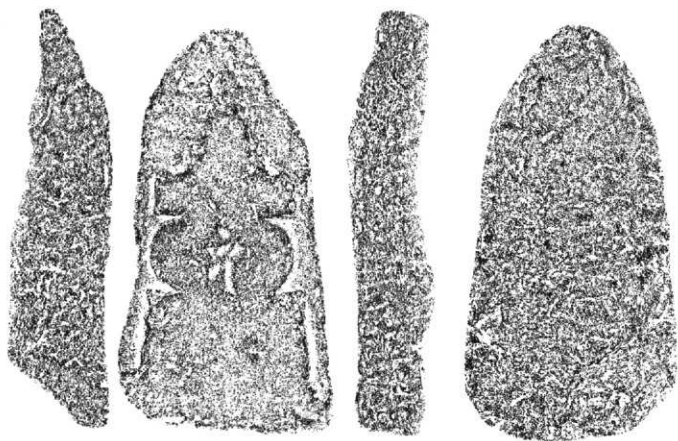
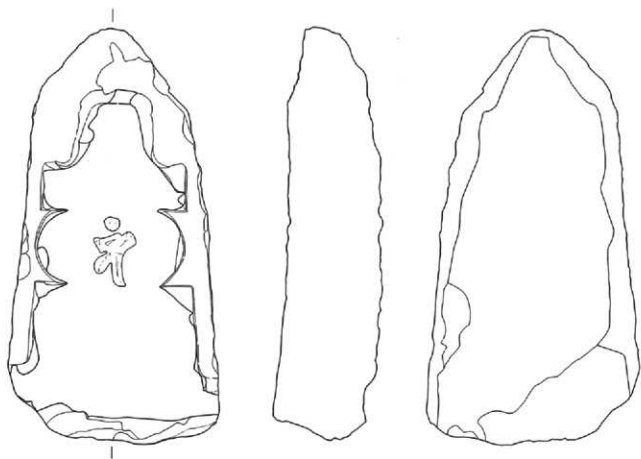


0 20cm  
1 : 4



第55図 遺物(9)

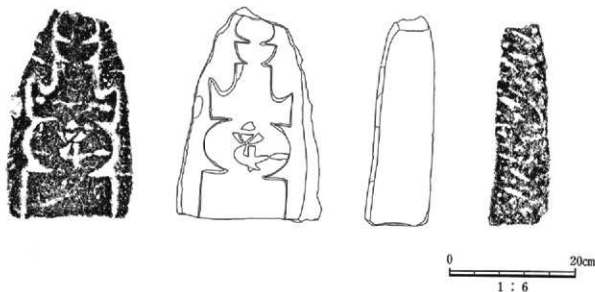




0 20cm  
1 : 6

第57圖 遺物(1)

- 81 -



第58図 参考資料 羽黒町高寺出土板碑(致道博物館蔵)

小礫が約20cm堆積している。炭化物の中には、材質と紙質のものが含まれている。壺の埋設されている位置は、中央窪地の西隅に当たる。

⑥方形の集石を小礫で覆う。構築終了。

方形の集石上位に直径約3mの範囲で、直径5cm大の礫が約20cm堆積しているのが見られる。

この状態で構築は終了して現在に至ったと考えられる。

現存状態(第49図)は、ぶどう畑の斜面に不自然なテラス状の張り出しがあり、テラスの中央部に直径3mの範囲で小礫が露出していた。溝は埋没し、上面からは確認することはできなかった。

B区では、10m四方の範囲に礫が散在し、1ヵ所にまとまりが見られた。この中には、五輪塔の各部、石塔の基礎に用いられたと推測される礫、加工痕のある凝灰岩、砂岩、安山岩が含まれていた。この集石中にビニール片が含まれており、畑地造成の際の集石と理解される。

C区では、板碑2基と集石が見られた。集石はB区同様、畑地造成の際のもので、板碑片等を含んでいる。五輪塔板碑は、早くからその存在は知られていたが、明確な出土位置は不明である。

遺物 珠洲系陶器2点、近世陶器・銅製品が各1点、五輪塔板碑2基、五輪塔等の石塔片が出土している。

SM50内部から珠洲系陶器壺が出土した。頸部から口縁部が欠損し、礫が蓋状に覆っていた。鉢形底部は紐輪軸成形成、継ぎ足された胴部は紐印打成形成が行われている。胴部上位が球状に膨らみ、鉢形底部が全体の四分の一を占める。やや浅い叩き目は、頸部部下約2cmのところから始まり、整然として緩やかな右下がりを示す。内面には、押圧具の当痕が見られる。底部の切り離しは、静止糸切りである。SM50東側の旧表土より、珠洲系陶器

表5 遺構観察表(1) SP:柱穴

SP No	位置 (7×7)	規模 (長×幅)	深さ	分類	出土遺物 ( )は遺物番号
4	23-16	24×20	12	I	
5	23-16	22×20	14	I	
6	23-17	20×16	15	I	
7	23-17	24×24	16	II	
8	21-16	24×24	12	I	
9	21-17	28×26	16	I	縄文土器(46-4)
10	21-18	24×20	13	I	
12	22-18	32×20 (30)	11	II	縄文土器
14	22-16	42×44	14	II	縄文土器黒赤文
16	23-18	28×26	19	III	土師器(46-7)
17	23-18	64×36	19	III	フレイク頁岩
19	23-17	32×32	12	I	フレイク頁岩
25	24-18	80×80 (34)	11	II	フレイク頁岩
26	24-18	36×24	33	II	
27	23-17	80×50	19	I	縄文土器(46-3)
33	23-18	36×28	42	III	礎
34	24-18	40×26	39	II	
35	23~24 -18	38×32	19	III	フレイク頁岩
36	24-19	80×68	38	II	
37	19-20 -19	64×(50)	12	III	
38	18-18	76×64	38	III	
39	24-17	56×48	46	III	
40	24-17	68×48	23	III	
41	23-17	22×16	22	II	縄文土器
42	21-17	16×16	22	I	縄文土器(46-2) 結東羽状縄文
43	24-19	17×(48)	42	II	
44	23-18	78×(56)	71	II	
45	20-24	96×52	76	II	
46	21~22 -22	62×36	32	II	
47	21-20	不明		II	
48	19-20	52×44	45	II	
49	19-20	20×20	7	II	
51	18-20	52×24	20	II	
52	18-20	28×24	24	II	
53	19-19	44×36	39	III	
54	19-19	28×24	24	II	
55	19-18	32×28	19	III	
56	19-18	36×28	15	III	
57	19-18	28×24	27	III	
58	18-18	72×44	27	III	
59	23-18	28×28	19	II	
60	26-19	36×36	12	II	
61	19-22	32×28	19	II	
62	21-17	12×12	8	I	
63	21-17	16×16	8	I	

表6 遺構観察表(2)

SK:土坑

探検 番号	図版 番号	土坑番号	地区名 (グリッド)	規模(m)長径×短径 上:口徑 下:底径	深さ	分類
43	42	SK 1	23-14~15	12×10 11×9	180	I
44		SK 2	23-15	15×13 13×11	100	III
44	44	SK 3	25-16	19×17 16×11	54	III
43	42	SK11	22~23-18	18×14 36×23	118	I
43	42	SK13	24~17~18	10×9 10×10	108	I
43	43	SK18	22-22	11×10 12×11	67	II
40		SK20	20-16	88×84	6	IV
39		SK21	21-15	不明	15	IV
43	43	SK22	22-19	9×8 14×13	96	I
44	43	SK24	25-18	14×11 11×9	74	II
43	43	SK28	24-17	9×8 14×13	128	I
44	43	SK32	22-17	25×5 24×3	12	IV

表7 遺物観察表(1)

探検番号	図版 番号	器種	出土位置	法 量(mm)			重さ (g)	石 材	備 考
				長さ	幅	厚さ			
第47回 1	50	石匙	SK11-F	(69)	21	10	16.6	玉髄質	未端の刃部欠損
# 2	50	#	20-21G	(23)	26	6	3.8	珪質頁岩	基部のみ遺存
# 3	50	#	X-0	69	48	13	51.4	#	
# 4	50	石鏡	SK11-F	(57)	44	19	52.0	#	基部・半端の刃部 片断欠損
# 5	50	#	SK-13-Y	(78)	43	16	62.3	#	基部欠損 RQ 4
# 6	50	#	X-0	67	36	15	36.5	#	
# 7	50	鑲器	SP30-F	63	78	10	48.9	#	
# 8	50	#	SP41-F	36	36	9	10.7	#	
# 9	50	#	26-17G	121	34	14	55.5	#	RQ 1
# 10	50	削器	23-19G	78	49	15	72.1	#	
第48回 1	50	磨石	SK11-F	931	752	53	750	花崗岩	
# 2	50	#	SK11-F	954	752	54	740	#	
# 3	50	#	SK11-F	165	716	53	950	#	
# 4	50	凹石	SK11-F	1018	751	.56	570	安山岩	両面磨痕あり
# 5	50	磨石	SK22-F	919	736	58	570	花崗岩	

※出土位置のFは覆土、Yは断面、Gはグリッド、X-0は位置不明を示す  
備考のRQは検出時の登録番号を示す。



表8 遺物観察表(2)

探頭 番号	図版 番号	種 別	出 土 位 置	測 量 (cm)			重 量 (g)	石材	備 考
				高 さ	幅	厚 さ			
53-1	54	五 輪 塔 空 風 輪	B区	10.1	12.1	(8.5)	0.73	凝灰岩	
	54(1)		B区	10.0	10.3	(7.6)	0.41	※	
53-3	54	五 輪 塔 水 輪	B区	11.7	17.0	17.0	2.50	※	種子ノミ
53-4	54		B区 1ブロック	11.5	19.4	(11.9)	(3.90)	凝灰質 砂 岩	種子ノミ?
	54(2)		B区 3ブロック	14.8	18.0	(7.5)	1.77	※	
54(3)	B区 20ブロック		14.3	20.2	(6.9)	2.11	※		
54(4)	不 明	C区	20.0	20.0	22.0	12.50	花崗岩	花弁状の加工痕か?	
54(5)	五輪塔水輪or火輪	B区	13.5	16.0	14.3	3.00	燧石		
53-2	55	五 輪 塔 火 輪	B区	10.3	22.4	21.7	3.10	凝灰岩	
54-4	55		B区	19.5	30.8	(12.5)	10.90	凝灰質 砂 岩	
	55(1)		B区	11.8	22.0	22.1	4.50	凝灰岩	
55(2)	B区		11.1	20.6	17.8	2.50	※		
55(3)	B区		19.5	28.1	(5.6)	2.80	※		
55(4)	B区2・3・4 ブロック接合		19.7	29.6	33	22.50	凝灰質 砂 岩		
54-1	56	五 輪 塔 地 輪	B区3ブロック	15.7	19.7	19.9	6.50	凝灰岩	
54-2	56		B区3ブロック	20.5	22.5	(15.4)	5.00	※	文字彫刻
54-3	56		B区3ブロック	9.4	13.9	5.0	0.40	※	※
55-1	56		B区10ブロック	28.7	26.3	(19.3)	10.90	凝灰質 砂 岩	
	56(1)		B区4ブロック	9.4	20.8	21.1	3.60	凝灰岩	
	56(2)		B区8ブロック	14.8	20.0	21.0	6.00	※	
	56(3)		B区1・7ブロック 接合	26.6	16.5	(29.4)	25.90	※	
55-2	57		無縁塔 塔身	B区4ブロック	37.6	23.8	(10.3)	9.00	凝灰質 砂 岩
57(1)	無 縁 塔 基	B区4ブロック	13.4	30.4	30.0	17.00	※		
57(2)		B区7ブロック	7.8	23.0	(8.3)	1.35	※	六角形を呈す	
57(3)	蓋 石	B区9ブロック	8.6	8.9	(6.7)	0.43	※		
55-3	57	板 碑	C区	31.0	28.4	(11.3)	11.50	※	
56-1	53		C区	65.0	34.0	14.2	48.50	火山礫 凝灰岩	種子ノミ
57-1	53		C区	65.8	32.9	15.4	42.20	※	※

※法量：正位に置いた時の高さを高さ、横幅を幅、奥行きを厚さとした。  
石材：附編III-3による。

表9 遺物観察表(3)

探検番号	図版番号	出土位置	種別	器種・器形	文様他	法量(mm)	備考
第45図1	49	SK11-F6	縄文土器	深鉢 口縁部、胴部 がやや外傾	口唇部～黒赤圧痕文 RL(縦) 口縁部～黒赤圧痕文 RL(横) 胴部～縄文RL(横) 紫地土編3cm襷み上げ	口径(216) 器高(160) 器厚9	胴部から口縁部の一部 に炭化物が付着する。
第45図2	49	SK11-F6	#	鉢	内外面～ナデ・ミガキ 底部～割代痕 紫地土編約3cm襷み上げ、 底部周縁をつまみ出し 胴部を襷み上げる	口径(282) 器高149 底径104 器厚11	
第45図3	49	SK11-F	#	鉢形土器 口縁部波状?	外面～半截竹管比線文 口縁部に縄文 LRミガキ 内面～ミガキ	器厚9	
第45図4	49	SK11-F	#	鉢形土器	黒赤文L	器厚8	
第46図1	49	SK3-F2・3	#	深鉢	口縁部が折り返し状に なる。 胴部～結節結非羽状縄 文RL-LR(横) 紫地土編約3cm襷み上げ	口径(288) 器高(187) 器厚(13)	胴部に炭化物付着 RP3
第46図2	49	SP43-F	#	鉢形土器	口唇部～黒赤圧痕文 口縁部～半截竹管比線 文・沈線による格子状 文	器厚8	炭化物付着
第46図3	49	SP27-F	#	鉢形土器	半截竹管沈線文	器厚10	
第46図4	49	SP9-F	#	鉢形土器	異部条文L RL LR	器厚7	
第46図5	49	SP21-F	#	鉢形土器	磨消縄文 地文～縄文RL	器厚9	
第46図6	49	SK18-F	弥生土器	甕	口縁部～ミガキ 地文～縄文RL	器厚6	内外面に炭化物付着
第46図7	49	SP16-F	土器器	甕	内面～ハケナデ 外面～ミガキ 磨減が激しい	器厚7	
第46図8	49	25-17G 2層	珠洲系 陶器	深鉢	内面～節目、単位不明 外面～ロクロナデ	器厚13	
第51図1	51	SM50-17層	珠洲系 陶器	甕	内面～アテ痕 外面～アタキ ロクロナデ 底部～静止糸切り	最大径 (胴部)204 器高390 器厚13 底径117	口縁部から胴部欠損
第51図2	51	第2調査区A区	珠洲系 陶器	深鉢	内面～節目約3cmに 5本 外面～ロクロナデ	器高(70) 器厚(14)	
第52図1	52	第2調査区B区	近畿陶器	甕	内面～ロクロナデ 外面～ロクロナデ 内外面に海鼠輪 底部～糸切り後調整	口径(204) 器高259 器厚10 底径129	内面底部に黒色の汚れ
第52図2	52	第2調査区C区	銅製品	仏具	花卉状の裝飾	長軸160 短軸35	

摺鉢片が1点出土した。卸目が8本確認される。

近世陶器壺は、B区耕作土から出土した。胴部が鉄釉で口縁部の内外面に海鼠釉がみられ、白濁の袖膚状を呈する。胎土は、灰茶色で緻密である。

銅製品は、C区耕作土から出土した。五弁の花状の装飾を持つ。仏具と考えられる。

板碑2基は、火山礫凝灰岩を板状に造り、その1面を平滑にして五輪塔を浮き彫りにした五輪塔板碑である。舟形光背状を呈し、水輪に種子が刻まれている。板碑2（第57図）は、薬研彫りでパンが刻まれているのが分かる。板碑1（第56図）は摩滅が激しいが、板碑1と同じ種子だと見られる。背面側面にはノミ痕が認められる。

五輪塔は、各部位が出土している。石材は、白色と緑色の柔らかい凝灰岩と茶灰色の凝灰質砂岩の2種があり、前者が後者に対してやや小型である。水輪（第53図3・4）には、種子が、地輪と考えられる部位（第54図2・3）に文字の彫り込みが認められる。他に無縫塔の塔身（第55図2）、石塔の基礎部（図版57）、板碑塔身下部（第55図3）等が原位置を留めることなく出土している。各石塔は、ノミ痕をよく観察することができる。

#### 4 まとめ

今回の調査は、性格の異なる2つ調査区からなっている。各調査区について、それぞれいくつかの項目を上げ、まとめることとする。

##### 第1調査区

かなりの削平を受けているが、遺構は、土坑12基、柱穴121基、遺物は、整理箱で3箱が検出された。

##### (1) フラスコ状土坑の用途

土坑12基中、I類に属するものは5基検出された。I類と分類した断面形がフラスコ状を呈する土坑の用途は、堅果類等の貯蔵穴と考えられている（文献20）。遊佐町吹浦遺跡では、多数のフラスコ状土坑が検出されているが、そのほとんどが地山粘土層を掘り抜き、雨水等が浸透する構造になっている（文献31）。これに対して、本遺跡で検出されたものは、底面が粘性の強い粘土層にあり、一晩の降雨で満水となる状態である。このことから、フラスコ状土坑に堅果類を単に充填させたとは考えにくく、何らかの工夫とともに利用されたと推定される。開口部が狭い構造は、一定の温度・湿度が保たれる空間（文献20）として、貯蔵に適していたのであろうか。今回の調査では、貯蔵内容を理解できるような遺物は、認められなかった。

##### (2) 柱穴の時期

柱穴は、I類87基、II類21基、III類13基検出された。I・II類からは、土坑出土と同時期の縄文土器・フレイクが出土している。III類に属するSP16からは、土師器壺が出土している。柱穴には大きく分けて、土坑と同時期に存在した一群と土師器を伴う一群があることが推定される。

##### (3) 主体を占める遺物

資料が非常に希薄であるが、その類例を前出の郷ノ浜遺跡、吹浦遺跡にみることができ

る。口唇部に縦位燃糸圧痕文、口縁部に横位燃糸圧痕文を施す深鉢は、吹浦遺跡で第II群土器に分類されるものの流れを汲むものと理解できる。燃糸圧痕と地文の構成、湿気を持つ胎土に特徴を持つ。折り返し口縁で、結節結束羽状縄文を持つものもみられる。他資料との伴関係からの判断ができないが、縄文時代中期初頭と考えられる。他に半截竹管平行沈線文を持つ北陸系の土器も出土している。

## 第2調査区

### (1) SM50の性格と時期

SM50は、斜面を切り崩して平場を造り出し、その内部に珠洲系陶器を埋設している。珠洲系陶器は、石組中に正位に安置され、口縁部が打ち欠かれており蓋石が無造作に乗せられていた。その上位に、礫が長方形に平積みされている。平積みの中央には、摺鉢状の窪みがみられ紙状の炭化物(註1)が出土している。礫の平積みは、区画を示すと理解され、遺存する縁辺には区画縁石状のものも認められる。しかし、内部主体である珠洲系陶器は、平積みの中央部からやや北東にずれており、長方形区画の中心には位置していない。長方形の礫の平積みの主体部は、あくまで炭が堆積する中央の摺鉢状の窪地だと考えることもできる。SM50は、二重構造を呈すのか、切り合い等は確認はできなかった。SM50構築順で言うならば、④から⑤が連続して行われたものであるか、連続せず、一定の時間が経過した後⑤が行われたのかという疑問が残る。

SM50から出土した、珠洲系陶器壺は、口縁部欠損のため判然としなが、13世紀後半から14世紀所産(文献32)のものと推定される。SM50は、それ以降の構築となる。

壺内と平積みの中央窪みの土壌からは、SM50構築土と比較するとリン・カルシウムが高い値でみられ(附編III-1)、埋葬が行われていることが推定できる。礫を積み重ねて墳丘上部を覆ったり、葬石状に蔵骨器上とその周囲に礫石を置くことが、中世の火葬墓では認められる(文献9)ことから、SM50もこれに属する可能性がある。類似する例としては、鶴岡市北八地沢火葬墓(文献6)が上げられる。ここでは、事実報告に留め、今後、他資料との比較検討を重ね、性格付けを行いたい。

### (2) 五輪塔板碑

五輪塔板碑2基が原位置を留めない状態で出土した。厚手に五輪塔を彫出し、舟形光背状を呈する。石材は、火山礫凝灰岩であるが、産地は特定できなかった(註2、附編III-3)。羽黒町高寺(註3、文献25)出土、鶴岡市青竜寺の境内(註4、図版52)に類例がみられ、16世紀末から17世紀所産と推定される。

### (3) その他の石塔

五輪塔・無縫塔等が築石され、原位置を留めずに出土した。石材は、凝灰岩・凝灰質砂岩・変質安山岩である。五輪塔は各部位が出土し、確認された数は火輪の6基が最高である。中には、人為的かどうかは不明であるが、かなり細かく砕かれたものも認められる。時期の特定はできないが、地輪(第54図3)に「塵安」の文字が彫られており、北朝の年号(1368~1375年)を指すことも考えられる。ノミ痕を明瞭に残すものが認められ、今後

その技法によって類別する機会を得たいと考える。

#### (4) 第2調査区の景観と性格

景観は、在地霊場の性格を考えると、共同体の中の霊場の在り方を考えるときの重要な問題となることが指摘されている(文献38・41)。東に降りる斜面に面した本遺跡第2調査区は、眺望の利く美しい景観に位置し、まさに聖別された土地「勝地」と言える。柳沢地区集落を見下ろし、遠く庄内平野南半を一望できるが、北と東は、峰に囲まれ奥まっている。柳沢A遺跡は、13世紀末から14世紀の塚状遺構と、16世紀末から17世紀の五輪塔板碑が出土しているが、その間、断絶なく存在したのかは分からない。しかし、塚状遺構の構築が可能な在地勢力の成長が集落周辺であったこと、その後板碑建立の背景となる信仰上の拠点が近くに存在したことは理解できる。その時常に、柳沢A遺跡の所在する位置が霊場の対象の1つとなる景観にあったと言える。前出の青龍寺も柳沢A遺跡と非常に似た景観を持ち、境内裏山には五輪塔が散在し、小礫の集石や掘切りがあり注目される(註4)。

第2調査区の東下方の平場は、永慶寺跡と言われているが、今回の調査区内では、関連する遺構・遺物は確認されなかった。塚状遺構の構築年代と寺の存在時期(文献1)に、近似がみられるため、今後の資料の増加を待ちたい。

- 註1 図版51掲載。数枚の紙状炭化物が重なった状態で出土している。現段階では炭化しているため文字等の記載は確認できない。東北歴史資料館鈴木拓也氏に実見していただいた。
- 註2 本遺跡周辺における火山礫(角礫)凝灰岩の産出場所として、金峯山中腹(鶴岡市大字藤沢)があることが文献18で植松芳平氏によって報告されている。
- 註3 第58図、図版52掲載。致道博物館所蔵。致道博物館酒井英一氏のご協力をえて資料を掲載させて戴いた。
- 註4 酒井英一氏、渡部正男氏のご案内で実見する機会を得た。

#### 柳沢A遺跡参考文献

- 1 『明跡宗百神録御神記』吉住治藏 山形県東田川郡八栗島村永慶寺住職 山田敬全 1927年
- 2 『庄内史年表』鶴岡史編さん委員会 鶴岡市役所 1955年
- 3 『鶴岡市史』上巻 大瀬欽哉他 鶴岡市役所 1962年
- 4 『藤島町史』上巻 長沼源藏他 藤島町役場 1965年
- 5 『余目町史年表』佐藤東一 山形県余目町長富樫義雄 1969年
- 6 『鶴岡市三瀬地内横石塚二例』『庄内考古学』第11号 酒井忠一 庄内考古学研究会 1972年
- 7 『三川町史』大瀬欽哉他 三川町 1974年
- 8 『山形県埋蔵文化財発掘調査報告書一昭和48・49年度山形県富農林事業関係遺跡一』山形県埋蔵文化財調査報告書第6集 山形県教育委員会 1975年
- 9 『山形県における古代・中世の火葬墓について』『東北考古学の諸問題』川崎利夫 1976年
- 10 『中世考古学の諸問題』『庄内考古学』第14号 川崎利夫 庄内考古学研究会 1977年
- 11 『庄内地方の城館(堀)跡について』『庄内考古学』第14号 佐々木七郎 庄内考古学研究会 1977年
- 12 『立川町羽川経塚について』『庄内考古学』第14号 川崎利夫 庄内考古学研究会 1977年
- 13 『東田川郡羽黒町玉川袋出土の戴骨器について』『庄内考古学』第14号 酒井忠一 庄内考古学研究会 1977年
- 14 『飽海地方の板碑』『庄内考古学』第14号 小野忍 庄内考古学研究会 1977年

- 15 『郷引町史』 戸川安章他 郷引町 町長佐藤良哉 1978年
- 16 『朝日村史』 上巻 朝日村 1980年
- 17 『勝楽寺遺跡発掘調査報告書』 藤島町埋蔵文化財調査報告書第1集 山形県藤島町教育会 1980年
- 18 『山形県鶴岡市藤沢岩屋遺跡—第II期第2次調査報告書—』 鶴岡市教育委員会 1981年
- 19 『山形県平田町八幡森塚墓の再検討』 『さあべい』 第3巻第3号 川崎利夫他 さあべい同人会 1981年
- 20 『秋田県内におけるフラスコ状ピットについて』 『秋田地方史論集』 永瀬福男 1981年
- 21 『舞ノ浜」遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第50集 山形県教育委員会 1981年
- 22 『中山虎寺跡発掘調査報告書』 藤島町埋蔵文化財調査報告書第3集 山形県藤島町教育委員会 1982年
- 23 『山形県史』 第1巻 山形県史編さん会議 山形県 1982年
- 24 『庄内考古学』 第18号 庄内考古学研究会 1982年
- 25 『山形県の板碑』 『板碑の総合研究 地域編』 川崎利夫 1983年
- 26 『砂川A遺跡発掘調査報告書』 山形県朝日村教育委員会 1984年
- 27 『西荒屋史』 西荒屋部歴史編纂委員会 1987年
- 28 『山形県史』 要覧 山形県 1987年
- 29 『山形県史』 年表 山形県 1987年
- 30 『大門山遺跡発掘調査報告書』 名取市文化財調査報告書第22集 名取市教育委員会 1988年
- 31 『次浦遺跡第3・4次緊急発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第120集 山形県教育委員会 1988年
- 32 『珠洲の名陶』 吉岡康暢監修 珠洲市立珠洲歴史資料館 1989年
- 33 『藤島城跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第159集 山形県教育委員会 1990年
- 34 『山形県の地名』 長井政太郎他 1990年
- 35 『羽黒町史』 戸川安章他 羽黒町 1991年
- 36 『板碑の総合研究 総論』 板詒秀一編 1991年
- 37 『山形県の埋・納経遺跡』 『山形考古』 第4巻第4号 川崎利夫 山形考古学会 1991年
- 38 『板碑・石塔の立つ風景—板碑研究の課題—』 『考古学と中世史研究』 帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告書集 千々和到 1991年
- 39 『上郷の歴史』 上郷の郷土史をつくる会 上郷地区自治振興会 1993年
- 40 『墓と葬送の社会史』 森 謙二 1993年
- 41 『中世社会と墳墓—考古学と中世史研究3—』 帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告書集 石井進・萩原三穂編 1993年
- 42 『食料貯蔵』 『季刊考古学』 第44号 塚本節也 1993年
- 43 『分右調査報告書 (20)』 山形県埋蔵文化財調査報告書 182集 山形県教育委員会 1993年

## 報告書抄録

ふりがな <small>なみのだい いせき・くりやま いせき・やまがしら いせき ぽつにつちよう ほうこくしょ</small>								
書名	仲台遺跡・栗山遺跡・柳沢A遺跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	齊藤主税 水戸弘美 青山 崇							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒990 山形県上市市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行年月日	西暦1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
仲台	山形県東 山形郡朝日 村大字熊出 字仲台	06427	昭和63年度 登録	38度 38分 11秒	139度 50分 18秒	19930512～ 19931025	4,750	東北横断自 動車道(朝日 ～酒田間)建 設工事
栗山	山形県東 山形郡朝日 村大字熊出 字栗山	06427	昭和63年度 登録	38度 38分 17秒	139度 50分 28秒	19930512～ 19930714	4,725	同上
柳沢A	山形県東 山形郡柳沢 町大字西元 蔵字柳沢	06425	1945	38度 38分 53秒	139度 50分 1秒	19930719～ 19930929	3,200	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
仲台	集落跡	縄文後期末 ～晩期	竪穴住居 土坑 炉跡 列石 柱穴	1棟 13基 2基 2条	縄文土器 深鉢、鉢、浅鉢 壺、注口土器 石器 石鎌、尖頭器 石錐、石匙、石匱 搔器、削器	近世の列石が2条検 出。		
栗山	集落跡	縄文中期	竪穴住居 土坑 柱穴	4棟 8基	縄文土器 深鉢、浅鉢 石器 尖頭器、石鎌、石匙 石匱、搔器、磨石	石囲炉及び地床炉を 伴う竪穴住居の検出。 土坑内から弥生土器 の出土。		
		弥生	土坑 柱穴	2基	弥生土器 壺、甕			
柳沢A	集落跡	縄文中期 初頭	土坑 柱穴	11基	縄文土器 深鉢 石器 石匱、搔器、磨石	縄文土器を伴う土坑、 柱穴の検出。		
		祭祀遺構	中世 塚	1基	珠洲系陶器 壺、攪鉢 石塔	塚の検出とその内部 より珠洲系陶器の出 土。さらに周辺より 石塔出土。		

付 編





## I 放射性炭素年代測定結果

株式会社パレオ・ラボ

### 1 仲台遺跡

#### (1) 測定結果

放射性炭素年代測定は、仲台遺跡から採取された1試料について行った。分析用試料は、炭化材を用いた。以下の表1に測定結果を示す。なお、測定は学習院大学放射性炭素年代測定室の木越邦彦氏にお願いした。

年代は、 $^{14}\text{C}$ の半減期5570年(LIBBYの半減期)にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数(yrs BP)として示している。付記された年代誤差は、 $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また、 $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値として表示してある。

表1 仲台遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料	測定試料	コード番号	測定値(yrs BP)
SK3土坑	炭化材	GaK-17783	3,020 $\pm$ 90 (1,070 B.C.)

#### (2) 測定結果に関する若干の考察

放射性炭素年代測定は、SK3土坑の覆土から出土した炭化材で行った。なお、SK3土坑からは、多数の縄文土器や石器が出土している。ここではSK3土坑の記載を行わないことから、詳細は考古の章を参照されたい。

仲台遺跡では、縄文時代前期の土器が僅かに出土し、縄文時代後期末～晩期初頭の土器が大半を占める。年代測定結果は、3,020 $\pm$ 90yrs BPを示し、年代値的には縄文時代後期末ないし晩期初頭を示す。現時点では、SK3土坑から出土した遺物の詳細な時期の資料がないことから断定は出来ないが、少なくとも仲台遺跡で多く出土する遺物の時期とは一致する。

## 2 栗山遺跡

### (1) 測定結果

放射性炭素年代測定は、栗山遺跡から採取された3試料について行った。分析用試料は、いずれも炭化材を用いた。以下の表1に測定結果を示す。なお、測定は学習院大学放射性炭素年代測定室の木越邦彦氏にお願いした。

年代は、 $^{14}\text{C}$ の半減期5570年(LIBBYの半減期)にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数(yrs BP)として示している。付記された年代誤差は、 $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また、 $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値として表示してある。

表1 栗山遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料番号	層 準	測定試料	コード番号	測定値(yrs BP)
No.1	ST50 覆土	炭化材	GaK-17780	4,280 $\pm$ 100 (2,330 B.C.)
No.2	ST15 柱穴	炭化材	GaK-17781	4,490 $\pm$ 90 (2,540 B.C.)
No.3	SK13 覆土	炭化材	GaK-17782	2,190 $\pm$ 80 (240 B.C.)

### (2) 測定結果に関する若干の考察

栗山遺跡では、第1調査区の南側より縄文時代中期の住居跡、土坑、柱穴、焼土などが確認されている。ここでは、縄文時代中期の住居跡のST50とST15の覆土中の炭化材(No.1)と柱穴より出土した炭化材(No.2)、及び弥生時代後期と考えられる土器が出土しているSK13土坑内の炭化材について放射性炭素年代測定を行った。なお、分析試料の採取地点ないし層準等については考古の章を参照されたい。

放射性炭素年代測定結果は、No.1、2では各々4,280 $\pm$ 100、4,490 $\pm$ 90yrs BPの縄文時代中期に相当する年代値が得られた。また、No.3では2,190 $\pm$ 80yrs BPのおおむね弥生時代前期頃の測定結果がでていた。したがって、ST50、ST15については考古遺物と一致し、SK13についても著しく異なった値は示さず、考古編年とおおむね矛盾しない結果と言える。

## II 栗山遺跡における自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

栗山遺跡(東田川郡朝日村大字熊出字栗山所在)は、赤川左岸の段丘東縁部に位置する。段丘は、武蔵野期・立川期に形成された中位面に比定されている(経済企画庁総合開発局, 1973)。本遺跡では、これまでの発掘調査により、縄文時代中期の住居跡、土坑、柱穴等の遺構や、土器、石器等の遺物が出土している。(山形県埋蔵文化財センター, 1993)。

今回の分析調査では、本遺跡周辺の縄文時代中期の古植生推定、住居構築材に関する検討、土坑の用途・性格の推定、埋蔵内の遺体埋葬に関する検討を行う。これらの分析調査目的に対して、以下に示す分析項目を設定した。

本遺跡周辺の古植生推定では、RP175(埋蔵)内から採取された土壌試料について花粉分析を実施する。また、土坑の燃料材および住居構築材の検討では、縄文時代中期の住居跡(ST15・ST50)から検出された炭化材と、炉址ではないかと推測される弥生時代の土坑(SK13)から検出された炭化材および土壌試料について、樹種固定・植物珪酸体分析を実施する。

縄文時代中期の住居跡(ST15)内からは、床面に焼土を含むピットが検出された。また、この北西にはST群と称されるピット集中部が認められ、覆土中に焼土と思われる赤色土が認められた。これらのピット群の性格については現時点では明らかになっていない。そこで、ピット内に認められた赤色土の由来を明らかにするための分析調査を行う。また、赤色土が焼土であるならば、ピット内で燃料材としてイネ科植物などが用いられた可能性もある。したがって、燃料材に関する情報を得るための分析調査も実施する。土壌や岩石に対する加熱の履歴や焼成温度の推定については、角閃石の色の変化を利用する方法など(増島, 1975; 加藤, 1988; 東村, 1990)がある。しかし、これらの手法は土器の焼成温度を調査する際に利用されることが多く、現段階では焼土を対象にした包括的分析法は確立されていない。そのため、今回はX線回折法による鉱物組成の調査法を応用する。すなわち、X線回折法により焼土とされる赤色土の鉱物組成を明らかにした上で、さらに地山土壌を実験的に燃焼してできた焼土の鉱物組成を明らかにし、その変化パターンおよび焼土とされる赤色土の鉱物組成との比較から焼成温度などについて検討する。なお、燃焼温度として300°C、500°C、900°Cの3つの温度を設定した。このうち、300°Cは鉄やアルミニウムの酸化物が形成される温度、500°Cは植物が灰化する温度、900°Cは野外で植物の燃焼により得られると思われる最高温度である。また、ピット内で植物が燃やされた場合には、燃料材の痕跡が残留していると思われる。炉などで草本類、特にイネ科植物が燃料材として用いられると灰中に植物珪酸体が組織片の形で残留している例が多い(例えば、佐瀬, 1982; 大越, 1985)。また、植物珪酸体は植物、特にイネ科植物の種類ごとに特有な形質を持つことから、燃料材として利用されたイネ科植物が推定できる。そこで、この土壌を対象とし

て植物珪酸体分析を実施し、組織片の産状から燃料材に関する情報を得る。

また、本調査区内からは、縄文時代中期とされる埋壘RP175が検出された。埋壘内には、これまでの考古学的知見から遺体を埋葬した可能性があるが、骨片などは認められなかった。そこで、この可能性を検証するために、これまでに分析調査事例が豊富であり分析操作が比較的簡便なリン分析と、リン酸とともに人骨の主成分とされるカルシウム含量を測定するカルシウム分析を実施する。

表1 分析試料一覧

試料番号	試料採取位置	試料の質	分析項目					
			P	W	Po	X線	P-Ca	
資料1	SK13	炭化材		●				
資料2	ST15	炭化材・土壌		●	●			
資料3	ST50	炭化材		●				
資料4	ST15	炭化材・土壌		●				
資料5	ST15ピット②	土壌			●	●		
資料6	ST群ピット内	土壌			●	●		
資料7	地山	土壌				●*2	●	
資料8	RP175下位	土壌	●				●	
資料9	RP175中位	土壌					●	
資料10	RP175上位	土壌	●					

注1) P：花粉分析，W：炭化材同定，Po：植物珪酸体分析，  
X線回折分析，P-Ca：リン・カルシウム分析を表す。

注2) 資料7のX線回折分析は、計4点実施した。

## 1. 古植生の検討

### (1) 試料

花粉分析用試料は、縄文時代中期の埋蔵RP175内から採取された土壌試料2点(資料8, 10)である。

### (2) 方法

試料約10gについて、水酸化カリウム処理、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数する。

### (3) 結果

分析を行ったいずれの試料からも花粉化石が検出されなかった。花粉化石は、好氣的環境下では酸化分解することが知られている。今回花粉化石が検出されなかった要因として、本遺跡が段丘上に立地することから、土壌は好氣的環境下で堆積したと考えられる。花粉化石は、低湿地などの還元堆積物に比較的良好に保存される。今後は、本遺跡周辺の低湿地堆積物を対象にして堆積年代を明らかにした上で同様の分析調査を行い、古植生に関する試料を得ることが望まれる。

## 2. 土坑の燃料材および住居構築材の検討

### (1) 試料

試料は、弥生時代の土坑(SK13)と縄文時代中期の住居跡(ST15・ST50)から検出された炭化材4点(資料1~4)である。資料1はSK13、資料2・4はST15、資料3はST50より採取されている。これらの試料のうち、資料2・4は土壌ごと採取されており、その中に含まれる炭化材について樹種同定を行った。また、資料2については植物珪酸体分析も行った。

### (2) 方法

炭化材は、試料を乾燥させたのち、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の断面を作製し、走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。

植物珪酸体分析は、湿重約5gについて過酸化水素水(H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>)・塩酸(HCl)処理、超音波処理(70w, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5)の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを適度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。プリユラックスで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下で全面を走査する。その間に、出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

### (3) 結果

#### a. 炭化材同定

炭化材は、全点クリに同定された。各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、学名・和名は「原色日本植物図鑑 木本編Ⅱ」(北村・村田, 1979)にしたがひ、一般的な性質については「木の事典 第4巻」(平井, 1980)も参考にした。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

環孔材で孔圏部は1~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。年輪界は明瞭。

クリは北海道西南部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材などの用途が知られている。

#### b. 植物珪酸体分析

植物珪酸体分析の結果、資料2からはイネ科植物の組織片は認められず、針葉樹の放射組織等の細かい木片が認められたのみである。

### (4) 考察

住居構築材と考えられる炭化材は、全てクリであった。クリを住居構築材として利用する例は、遊佐町木原遺跡等で知られている(未公表)。また、当該期には国内の多くの地域で住居構築材にクリが多用される傾向があり(千野, 1991)、北陸地方ではクリの木材を使用した巨木柱列等も知られている(古池, 1986; 藤, 1986)。今回の結果は、本地域でも当該期にクリが住居構築材として利用されていたことを示しており、これまでの結果と調和的である。一方、住居跡ST50から採取された土壌では、針葉樹の放射組織等の細かい木片が認められたことから、針葉樹材も住居構築材に利用された可能性がある。

また、SK13から検出された炭化材もクリである。当時、クリが炉の燃料材に用いられた例は各地で知られている。今回は1点のみで燃料材の組成まで検討することはできないが、今後より多くの炭化材について同定を行い、資料を蓄積していくことで明らかにされていくと思われる。

### 3. ビット内に見られる赤色土の由来と燃料材について

#### (1) 試料

試料は、ST15内のビット、ST群と称されるビットおよび遺構確認面の地山から採取された。このうち、資料5はST15土坑②の焼土、資料6はST群のビット内焼土、資料7は地山である。資料7は、資料5・6の対比試料として考え、300°C、500°C、900°Cに加熱した際の鉱物変化も確認した。

表2 土坑に関する分析試料一覧

試料番号	試料採取地点	土色・土性	腐植	乾湿
資料5	ST15ビット②	明褐(7.5YR5/6)・CL	有り	半乾
資料6	ST群ビット内	褐(7.5YR4/6)・CL	含む	半乾
資料7	地山	褐(7.5YR4/6)・CL	含む	半乾

1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。

2) 土性：土壤調査ハンドブック記載の野外土性の判定法(ペドロジスト懇談会編, 1984)による。

CL…埴壤土(粘土を強く感じ、砂をほとんど感じない。)

3) 腐植：腐植含量区分と判定のめやす(ペドロジスト懇談会編, 1984)による。

また、燃料材に関する調査では前述の資料5・6を分析試料とした。

試料の状態は、各試料ともに乾いた状態で、土色はいずれも褐色が強い。その中で資料5では赤色がさらに強い感じである。土性は、いずれも粘土を強く感じる。

#### (2) 分析方法

##### a. X線回折分析

風乾細土試料を粉砕器(平工製作所製T I-100)にかけて微粉砕試料(200メッシュ以下)を調整する。微粉砕試料をアルミホルダーに装着し、次の条件でX線回折分析を実施する。焼成実験では、測定した試料をアルミホルダーから離脱し、電気炉で300°C 1時間加熱し、再びアルミホルダーに装着して同一条件でX線回折分析を行う。この操作を500°C、900°Cについても実施する。測定された回折線の回折角度、原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム(五十嵐, 未公表)により検索する。



装置：島津製作所製XD-3A

Target: Cu (K $\alpha$ )                      Scanning Speed: 2°/min  
Filter: Ni                                 Chart Speed: 2cm/min  
Voltage: 30KVP                         Divergency: 1°  
Current: 30mA                          Receiving Slit: 0.3mm  
Count Full Scale: 5,000C/S         Scanning Range: 5~45°  
Time Constant: 1.0sec

#### b. 植物珪酸体分析

住居構築材の検討で述べた方法と同様である。今回の調査でも、組織片の産状に注目して行った。

### (3) 結果

#### a. 各試料の鉱物組成

X線回折チャートと検出鉱物を図1~6に示す。対比試料とした資料7の主要鉱物には、石英(quartz)、モンモリロナイト(montmorillonite)、クロライト(chlorite)、白雲母1M(muscovite)、カリ長石(K-feldspar)、斜長石(plagioclase)が検出される。また、資料5・6も主要な検出鉱物は資料7とほぼ同じである。

資料7の加熱処理後の鉱物変化については、300°C、500°C処理で顕著な変化は認められないものの、900°C処理においてヘマタイト(hematite;  $\alpha$ -Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)が新たに認められる。

#### b. 組織片の産状

検出される種類とその検出個数を表3に示す。組織片は、各試料から全く検出されない。また、イネ科起源の植物珪酸体もタケ草類などがわずかに認められるに過ぎない。

### (4) 考察

熱履歴および焼成温度の推定の手がかりとなる鉱物として、ギブサイト(gibbsite; Al(OH)<sub>3</sub>)とゲータイト(goethite;  $\alpha$ -FeOOH)がある。両者は、比較的土壌中に含有されていることが多い。ギブサイトは、250~300°Cの加熱でベーマイト(Boemite;  $\gamma$ -AlOOH)、400~900°Cの加熱でコランダム(corundam; Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)に変化する。一方、ゲータイトは300°C以上の加熱でヘマタイトに変化する。

資料5・6では、いずれも熱履歴の指標となる鉱物が認められず、加熱の有無は判然としない。ただし、資料7の900°C加熱処理ではヘマタイトが出現したのに対して、資料5・6ではヘマタイトが認められなかった。ピット内の土壌が仮に熱を受けていたとしても、高熱(900°C前後)は受けていなかったと推定される。

一方、資料5・6からは組織片が全く認められなかったことから、燃料材としてイネ科草本類が利用されたことは考えにくい。ただし、土坑内からは炭化粒子も認められていることから、他の植物を燃焼した可能性がある。

表3 資料5および資料6の植物珪酸体分析結果

種 類(Taxa)	資料5	資料6
イネ科葉部短細胞珪酸体		
キビ族	—	—
タケ亜科	—	1
不明キビ型	3	—
不明ダンチク型	—	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
キビ族	—	1
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	3	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体	0	1
検 出 個 数	3	3

#### 4. 埋壔内の遺体埋葬について

##### (1) 試料

試料は、縄文時代中期の埋壔(RP175)と遺構確認面から採取された土壌試料3点(資料7～9)である。このうち、資料8は埋壔内覆土の中部、資料9は埋壔内覆土の下位である。また、対比試料として地山の1点(資料7)を用いた。

試料の状態は、資料8でやや湿っている他は乾いた状態で、土色はいずれも褐色が強い。その中で資料8では赤色味がさらに強い。土性は、いずれも粘土を強く感じる。

表4 リン・カルシウム分析試料

試料番号	試料採取地点	土色・土性	腐植	乾湿
試料7	地山	褐(7.5YR 4/6)・CL	含む	半乾
試料8	RP175下位	明褐(7.5YR 5/6)・CL	有り	湿
試料9	RP175中部	黄褐(10YR 5/6)・CL	有り	乾

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

土性：土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法(ペドロジスト懇談会編、1984)による。

CL…埴壤土(粘土を強く感じ、砂をほとんど感じない。)

腐植：腐植含量区分と判定のめやす(ペドロジスト懇談会編、1984)による。

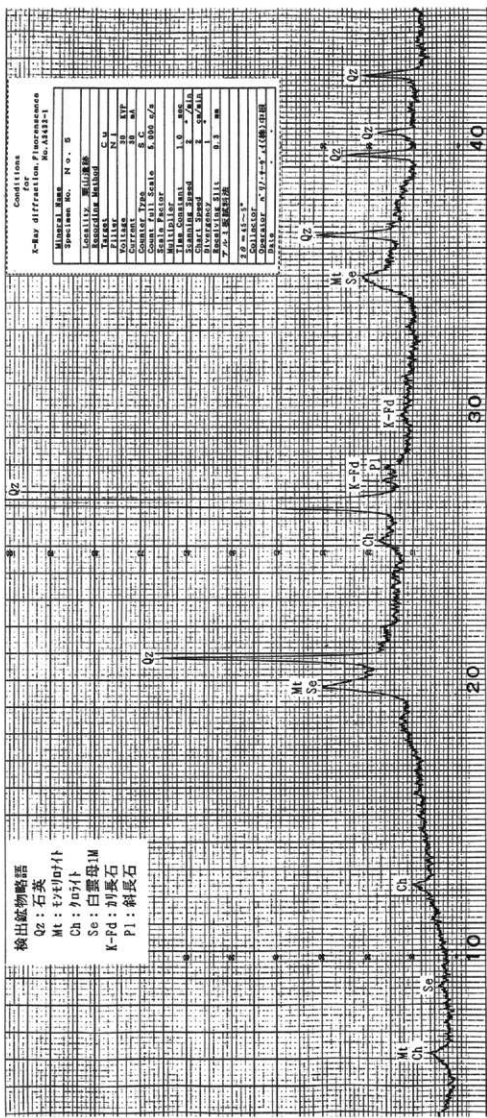


図1 資料5のX線回折チャートおよび抽出鉱物

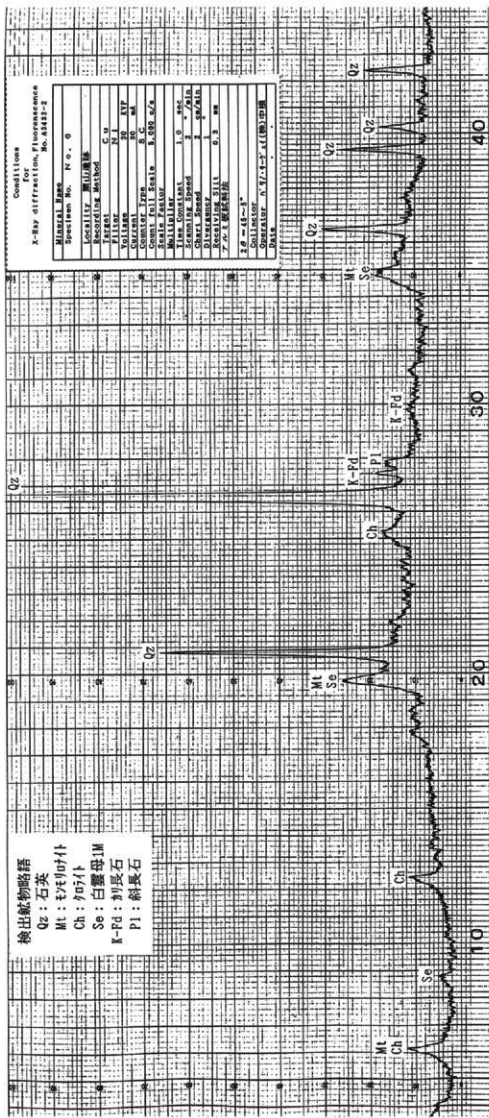


図 2 資料 6 の X 線回折チャートおよび換出鉱物

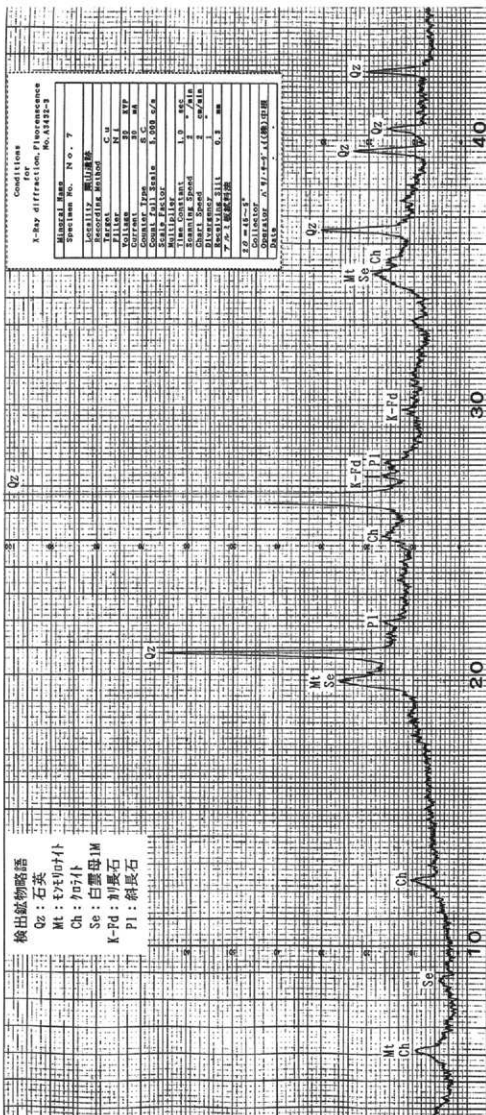


図3 資料7のX線回折チャートおよび検出鉱物(常温)

換出鉱物略語  
 Qz : 石英  
 Mt : モノクミン  
 Ch : チロイト  
 Se : 白雲母 1M  
 K-Pd : 斜長石  
 Pl : 斜長石

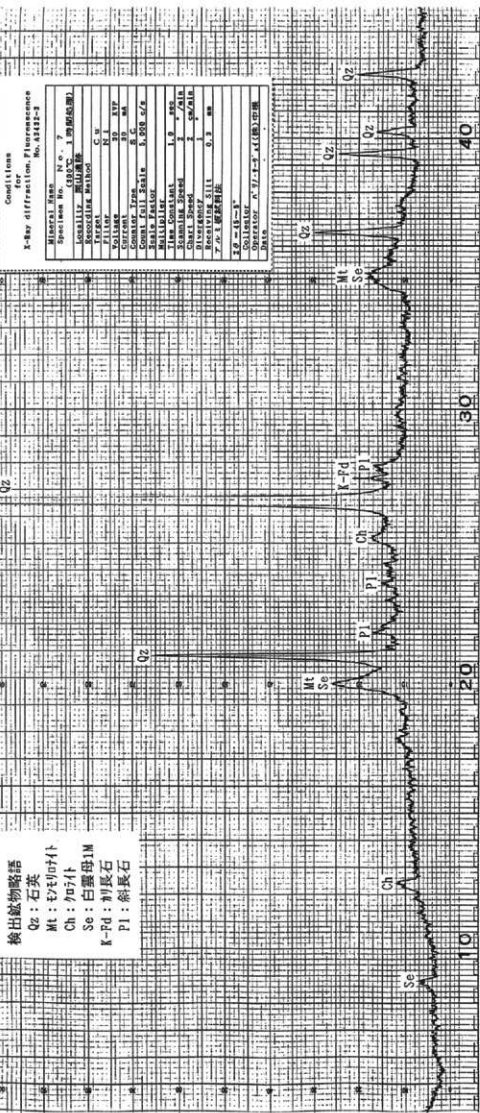


図4 資料7のX線回折チャートおよび換出鉱物(300°C, 1時間処理)

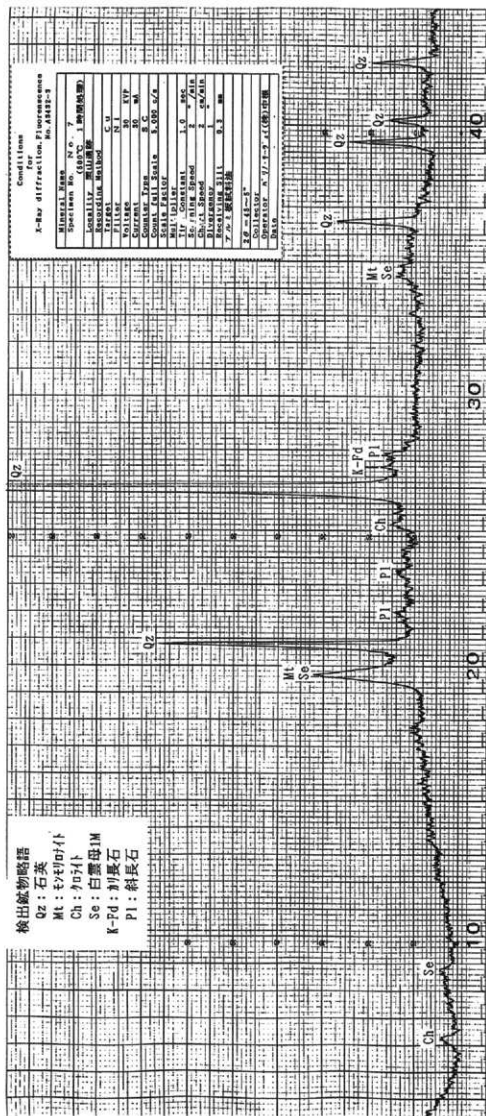


図5 資料7のX線回折チャートおよび検出鉱物(500°C, 1時間処理)

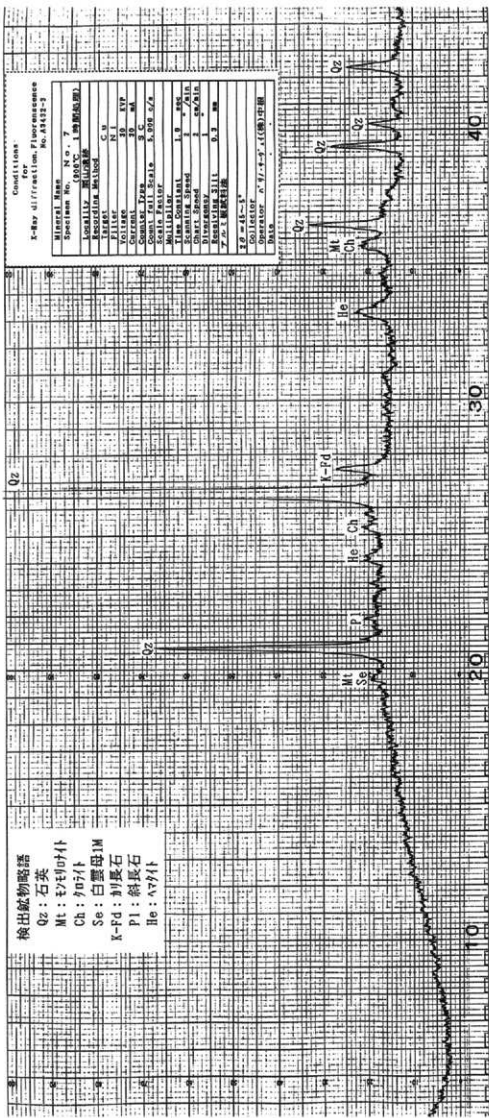


図6 資料7のX線回折チャートおよび検出鉱物(900°C, 1時間処理)



## (2) 方法

測定方法は、土壤標準分析・測定法委員会(1986)、土壤養分測定法委員会(1981)、京都大学農学部農芸化学教室(1957)などを参考にした。以下に操作行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105°C、5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤とり、はじめに硝酸(HNO<sub>3</sub>)約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO<sub>4</sub>)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

## (3) 結果

結果を表5に示す。

表5 リン・カルシウム分析結果

試料番号	試料採取地点	リン酸含量 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g
資料7	地山	0.54	1.04
資料8	RP175下位	0.72	0.93
資料9	RP175中位	0.54	1.08

注) リン酸、カルシウムともに乾土1gあたりのmgで表示。

リン酸:各試料ともに1.0mg/g未満の著しく低い値を示す。

カルシウム:各試料ともに1.0mg/g前後の近似した値を示す。

## (4) 考察

土壤に通常含有されるリン酸量、いわゆる天然賦存量には次のような報告例がある。Bowen(1983)では各国で分析されたデータの中央値が2.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g、Bolt・Bruggenwert(1980)では1.0~2.5P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g、川崎ほか(1991)ではリン含量の比較的高い黒ボク土の平均値が未耕地で2.1P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g、既耕地で5.5P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g、天野ほか(1991)では天然賦存量を2.7P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g以下と捉えている。なお、各調査例の記載単位が異なるために、ここではすべての単位をP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gで統一した。以上の事例から土壤中の天然賦存量は最高3.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gと推定され、この値を著しく越える土壤では天然賦存量以上のリンがある給源物質(遺体等)によって富化されたことを指摘できる。今回の調査では3.0mg/gを越える試料は認められず、リン酸含量の高い給源物質の痕跡を指摘することはできない。

一方、土壤中のカルシウム含量は普通1~50CaOmg/g(藤買, 1979)といわれ、天然賦存

量の含量幅がリン酸よりも大きい。そのため、天然賦存量と給源物質により富化された含量の区別は難しい。しかし、遺体などが埋葬されていれば、その場所ではリン酸含量とともにカルシウム含量の高いことが予想される。今回の調査結果では各試料の含量が低く、しかも比較試料とほぼ同じ含量が認められていることから、カルシウム含量の高い給源物質の痕跡を指摘することはできない。

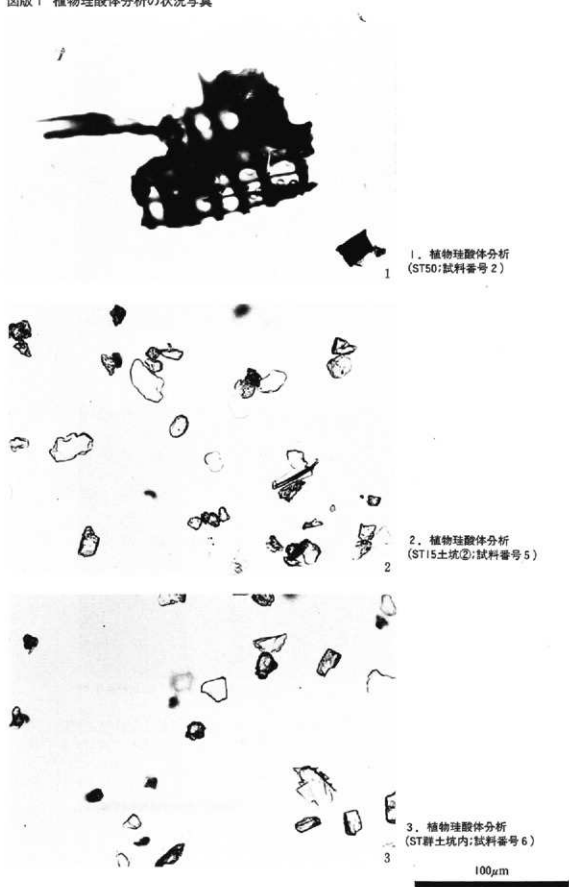
以上より、埋壙RP175内に遺体の痕跡を指摘することは難しい。しかし、現代に至るまでに埋壙内の内容物が分解・消失して成分が流亡してしまっただけの可能性も考慮する必要がある。

#### <引用文献>

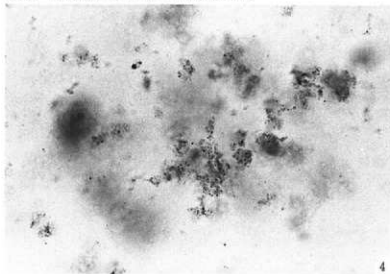
- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信(1991)中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』, p.28-36.
- Bowen, H. J. M. (1983)『環境無機化学—元素の循環と生化学—』。浅見輝男・宇野充男訳, 297p., 博友社 [Bowen, H. J. M. (1979) *Environmental Chemistry of Elements*].
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M. (1980)『土壌の化学』。岩田進午・三輪審太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 309p., 学会出版センター [Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. (1976) *SOIL CHEMISTRY*], p.235-236.
- 土壌標準分析・測定法委員会編(1986)土壌標準分析・測定法, 354p., 博友社。
- 土壌養分測定法委員会編(1981)土壌養分分析法, 440p., 養賢堂。
- 東村武信(1990)焼成温度。東村武信編『考古学と物理学』, p.171-184, 学生社。
- 平井信二(1979-1980)木の事典 第3巻～第6巻, かなえ書房。
- 藤 則雄(1986)植物遺体。「石川県能都町 真脇遺跡 —農村基盤総合整備事業能都東地区 真脇工区に係る発掘調査報告書—(本編)」, p.407-410, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団。
- 藤賀 正(1979)カルシウム。地質調査所化学分析法, 52, p.57-61, 地質調査所。
- 加藤芳朗(1988)考古学との出会い。加藤芳朗先生自選論文集刊行会編『加藤芳朗先生退官記念自選論文集 地学・土壌・考古環境—地表環境の研究37年の歩み—』, p.94-102.
- 川崎 弘・吉田 澤・井上恒久(1991)九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』, p.23-27.
- 北村四郎・村田 源(1979)原色日本植物図鑑 木本編 < I・II >, 453p., 545p., 保育社。
- 古池 博(1986)木柱根その他の木材ならびに大型堅果類の植物学的検討。金沢市文化財紀要60「金沢市新保本町チカモリ遺跡 —第4次発掘調査兼土器編—」, p.203-226, 金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・金沢市新保本町第一土地区画整理組合。
- 近藤隼三・佐瀬 隆(1986)植物珪酸体分析, その特性と応用, 第四紀研究, 25, p.31-64.
- 京都大学農学部農芸化学教室編(1957)農芸化学実験書 第1巻, 411p., 産業図書。
- 増島 淳(1975)遺跡内焼土の焼成温度について。「元野遺跡発掘調査報告」, p.49, 沼津市教

- 育委員会。
- 中野益男(1989)残留脂肪酸による古代復元。第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『講演収録集 新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, p.114-131, クバプロ。
- 農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準土色帖。
- ペドロジスト懇談会編(1984)土壌調査ハンドブック。156p., 博友社。
- 竹迫 敏・加藤哲郎・坂上寛一・黒部 隆(1980)神谷原遺跡への土壌学的アプローチ。「神谷原 I」, p.412-416, 八王子市栢田遺跡調査会。
- 竹迫 敏(1993)リン分析法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法 2 研究対象別分析法」, p.38-45, 東京大学出版会。
- 千野裕道(1991)縄文時代に二次林はあったか 一遺跡出土の植物遺物からの検討一。東京都埋蔵文化財センター研究論集, X, p.215-249。
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター(1993)朝日村 栗山遺跡 調査説明資料, 8p.

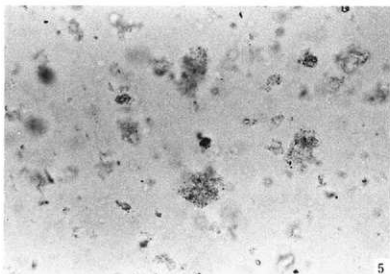
図版 I 植物珪酸体分析の状況写真



図版2 花粉分析プレパラートの状況写真



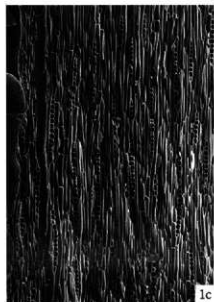
4. 花粉分析(RP175上位;試料番号10)



5. 花粉分析(RP175上位;試料番号10)

100 $\mu$ m

図版 3 炭化材



1. クリ(資料3)  
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 $\mu$ m : a  
200 $\mu$ m : b, c



### III 柳沢A遺跡における自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

柳沢A遺跡(東田川郡柳引町大字西荒屋字柳沢所在)は、母狩山東麓の舌状の丘陵の東斜面に位置する。本遺跡では、これまでの発掘調査により縄文時代前期末～中期初頭の集落および中世の塚・五輪塔が検出された。

今回の分析調査では、中世の塚(SM50)に埋設されていた蔵骨器とされる珠洲焼壺内の土壌を対象として、リン・カルシウム分析を行い、人骨埋葬について検証する。また、SM50の上面から検出された炭化材の樹種を明らかにする。さらに五輪塔に用いられた岩石の種類を明らかにして、岩石の産地に関する資料を得る。

#### 1. リン・カルシウム分析

##### (1) 試料

試料は、SM50から検出された蔵骨器とされる珠洲焼壺に充填された試料(資料3・4)と壺の上位から採取された試料(資料2)、SM50の構築土から採取された土壌試料(資料5)の合計4点である。資料4は壺内の充填土の中位から採取され、資料3はその下位から採取されたものである。資料2・5は、資料3・4の対照試料とした。

表1 リン・カルシウム分析試料

試料番号	試料採取地点	土色・土性	腐植	乾湿	その他の事項
資料2	SM50上面	黒(2.5Y 2/1)・SCL	極富む	半乾	炭化物を含む
資料3	SM50出土壺内底位	黒(2.5Y 2/1)・SCL	極富む	多湿	暗褐(10YR 3/3)混入
資料4	SM50出土壺内中位	褐(10YR 4/4)・L	含む	半乾	赤褐(5YR 4/8)混入
資料5	SM50構築土	暗褐(10YR 3/3)・L	富む	半乾	

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。

土性：土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法(ペドロジスト懇談会編, 1984)による。

CL…堆填土(粘土を強く感じ、砂をほとんど感じない。)

腐植：腐植含量区分と判定のめやす(ペドロジスト懇談会編, 1984)による。



## (2) 方法

測定方法は、土壤標準分析・測定法委員会(1986)、土壤養分測定法委員会(1981)、京都大学農学部農芸化学教室(1957)などを参考にした。以下に具体的操作行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105°C、5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤とり、はじめに硝酸(HNO<sub>3</sub>)約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO<sub>4</sub>)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

## (3) 結果

結果を表2に示す。

表2 リン・カルシウム分析結果

試料番号	試料採取地点	リン酸含量 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g
資料2	SM50上面	1.80	3.46
資料3	SM50出土壺内底位	2.74	0.57
資料4	SM50出土壺内中位	2.76	0.62
資料5	SM50構築土	0.84	0.54

注) リン酸、カルシウムともに乾土1gあたりのmgで表示。

### ・リン酸

珠洲焼倉内より採取された資料3・4が最も高い値を示し、しかも両者はほぼ同じ含量である。また、資料2も対比試料である資料5より2倍以上高く、差異が認められる。

### ・カルシウム

資料2で最も高い含量を示す。他の試料はこれより低い含量を示し、その値は同様である。

## (4) 考察

土壤に通常含有されるリン酸量、いわゆる天然賦存量には次のような報告例がある。Bowen(1983)では各国で分析されたデータの中央値が2.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g、Bolt・Bruggenwert(1980)では1.0~2.5P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g、川崎ほか(1991)ではリン含量の比較的高い黒ボク土の平均値が未耕地で2.1P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g、既耕地で5.5P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g、天野ほか(1991)では天然賦存量を2.7P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g以下と捉えている。なお、各調査例の記載単位が異なるために、ここではす

べての単位を $P_2O_5$ mg/gで統一した。以上の事例から土壌中の天然賦存量は最高 $3.0P_2O_5$  mg/gと推定され、この値を著しく越える土壌では天然賦存量以上のリンがある給源物質(遺体等)によって富化されたことを指摘できる。

一方、土壌中のカルシウム含量は普通 $1\sim 50CaO$ mg/g(藤貫, 1979)といわれ、天然賦存量の含量幅がリン酸よりも大きい。そのため、天然賦存量と給源物質により富化された含量の区別は難しい。しかし、人骨が埋葬されていれば、その場所ではリン酸含量とともにカルシウム含量の高いことが予想される。

今回の調査では、壺内外の土壌のリン酸含量は天然賦存量の最高値である $3.0P_2O_5$ mg/gを越えないことがわかった。また、壺内ではカルシウムを多く含む物質は遺存している。と判断できる。このように、壺内に人骨が埋葬されたことを直接的に示唆する結果は得られなかった。

しかし、壺内では塚の構築土や壺上位の石組に堆積する土壌より高いリン酸含量を示した。この要因として、壺内に人骨が埋葬されたが、後に骨が溶解して成分の一部が残留した可能性や、壺内がリン酸に富んだ土壌(例えば、当時の生活面の土壌)により充填された可能性が想定できるが、どちらの要因であるのか判断し難い。仮に前者であれば、壺が蔵骨器であった可能性がある。今後、壺内部の土壌の埋積過程を考慮して壺内のリン酸含量の相対的な高さを評価する必要がある。

## 2. 炭化材の樹種

### (1) 試料

試料は、SM50上面で確認された掘り込み内から検出された炭化材1点である。この掘り込みの性格については現時点で不明であり、炭化材の用途も不明である。

### (2) 方法

炭化材は、試料を乾燥させたのち、木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。

### (3) 結果

炭化材は、ハンノキ属の一種とトチノキに同定された。各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、学名・和名は「原色日本植物図鑑 木本編 I・II」(北村・村田, 1971, 1979)にしたがい、一般的な性質については「木の事典 第1巻・第4巻」(平井, 1979, 1980)も参考にした。

・ハンノキ属の一種(*Alnus* sp.) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2~4個が複合または単独、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は密に対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1~30細胞高のもの集合放射組織とがある。年輪界はやや不明瞭。

ハンノキ属は国内に約10種が自生し、ハンノキ(*Alnus japonica*(Thunb.)Steud.)の仲間(=ハンノキ亜属)とヤシャブシ(*A. firma* Sieb. et Zucc)やミヤマハンノキ(*A. crispa* (Aiton) Pursh subsp. *maximowiczii* (Call) Hult)の仲間(=ヤシャブシ亜属)に分けられる。

いずれも根に根瘤菌が共生しているため痩地でもよく生育する。材はやや軽軟～やや重硬で、加工は容易、薪炭材や各種器具材などとして用いられるほか、炭が黒色火薬の原料となる種類もある。

・トチノキ (*Aesculus turbinata Blume*) トチノキ科

散孔材で管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3(5)個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状～篩状となり、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列し、肉眼ではリップル・マークとして認められる。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

トチノキは北海道(南西部)・本州・四国・九州の主として谷沿いの肥沃地に生育する落葉高木で、東北地方に多く九州には少ない。材は軽軟で、加工・乾燥が容易で、耐朽性は小さい。器具・家具材や旋作材・木地などに用いられる。

### 3. 五輪塔の岩石の種類について

#### (1) 試料

試料は中世の五輪塔に用いられた岩石合計4点(資料6～9)である。これらの肉眼観察による特徴を示す。

資料6 白色基質に淡緑色を呈する破片を混ざる軽量の凝灰岩。

資料7 灰緑色を呈する緻密質岩石。

資料8 淡褐色を呈する細粒砂岩で表面に植物化石がみられる。

資料9 淡褐色を呈し、細角礫を含む火山礫凝灰岩。

#### (2) 鑑定方法

試料をダイヤモンドカッターにより切断し、研磨器を用いて厚さ0.03mmまで研磨した薄片プレパラートを作製する。薄片プレパラートを顕微鏡下で観察し、鉱物組成・組織を明らかにした。

#### (3) 結果

・資料6 (図版2)

岩石名: 凝灰岩

岩石の組織: 火砕状組織 (*pyroclastic texture*)

ガラス質の火山砕屑物で構成され、石英および斜長石結晶を伴う。

鉱物片

石英: 少量存在し、粒径0.1～1.0mmの破片状を呈する。大型のものは高温型石英の外形を留め、クラックおよび虫食い状の溶融組織が認められる。

斜長石: 少量存在し、粒径0.2～1.2mmの板状～破片状を呈する。集片双晶および累帯組織が発達する。

火山砕屑物

岩石の主体を構成し、ガラス質岩屑で充填され、粒径2～4mmの角礫状を示す。多くは

繊維状ガラスで、一部は泡状に発砲し、軽石質となっている。全般に脱ガラス化が進行し、微晶質のシリカ鉱物を生成している。

その他

本岩は、一般に白色凝灰岩または軽石質凝灰岩と呼ばれる酸性凝灰岩である。

・資料7(図版3)

岩石名：変質安山岩

岩石の組織：変質交代組織

斑晶

斜長石：中量存在し、粒径0.1~0.7mmの半自形板状~他形粒状を呈する。集片双晶が多くみられ、累帯組織が認められる。

石英：微量存在し、粒径0.1~0.6mmの他形粒状を呈する。粒の外縁に沿って反応リムがみられ、一部は溶融した組織を示す。

基質

基質はガラス質物質で構成されるが、破砕作用を受け、粒径0.2~0.6mmの角礫状になり、周囲は珪長質の変質鉱物で充填されている。基質中にはスメクタイトが生成されている。

変質鉱物

緑泥石：中量存在し、粒径0.1~0.6mmの葉片状~粒状を呈し、輝石・角閃石等の有色鉱物の外形を示して、繊維状の緑泥石の集合体に交代されている。一部にアクチノ閃石を残存するものが多い。緑泥石は淡緑色の色調を有し、複屈折が低い。

アクチノ閃石：少量存在し、粒径0.1~0.6mmの葉片状~粒状を呈し、上記の緑泥石と同様の産状を示すが、無色~淡緑色の多色性が著しく、複屈折が高く、斜消光することで区別される。一部は緑泥石に交代されている。緑泥石粒中には針状を示すアクチノ閃石がみられる。

緑簾石：微量存在し、粒径0.05mm以下の他形粒状を呈する。

スメクタイト：基質を交代して微量存在する。

珪長質鉱物：少量存在し、斑晶状の鉱物および角礫化した基質の粒間を充填して、微晶質で複屈折の低い珪長質鉱物が生成されている。

・資料8(図版4)

岩石名：凝灰質砂岩

岩石の組織：碎屑状組織(*clastic texture*)を示すが、構成物質はほとんど火山性物質である。

鉱物片

石英：少量存在し、粒径0.1~0.3mmの他形粒状を呈する。

斜長石：少量存在し、粒径0.1~0.4mmの破片状粒状・板状・長柱状を呈する。集片双晶が発達し、一部に累帯組織が認められる。

単斜輝石：微量存在し、粒径0.1~0.3mmの他形粒状・破片状を呈する。淡緑色の色調を

示す。

#### 岩石片

安山岩：少量存在し、粒径0.2～0.5mmの亜角礫状を呈する。多くはガラス基流晶質組織を有する。

凝灰岩：中量存在し、粒径0.1～1.0mmの亜円礫状を呈する。変質してスメクタイト(モンモリロナイト)化しているものが多い。

#### 基質

鉱物片・岩石片の粒間は微細な火山砕屑物で充填されている。多くはスメクタイトに変質し、一部は褐鉄鉱に汚染されている。

#### 変質鉱物

スメクタイト：中量存在し、基質および凝灰岩を変質交代して生成されている。淡黄褐色の色調で、繊維状を呈する。

褐鉄鉱：少量存在し、基質中に粒径0.2mm以下の不規則粒状を呈し、輝石等の有色鉱物・安山岩片・凝灰岩片から変質して生成された外形を示す。一部に赤鉄鉱を生じている。

・資料9(図版5)

#### 岩石名：火山礫凝灰岩

岩石の組織：火砕岩状組織(*pyroclastic texture*)で粒径数mmの角礫状安山岩片・凝灰岩片を含む特徴を有する。

#### 岩石片

安山岩：中量存在し、粒径0.2～6.5mmの角礫状を呈する。ガラス基流晶質組織を示す安山岩が多く、一部はガラス質安山岩である。ガラス基流晶質組織を示す安山岩中には斜長石斑晶が散点的にみられ、一部は集斑状を示すが、輝石等の有色鉱物の斑晶はみられない。石基は短冊状斜長石とその粒間を充填する火山ガラスで構成されている。

凝灰岩：少量存在し、粒径0.4～2.5mmの角礫状を呈する。ガラス質で非晶質であるが、稀に溶結組織がみられるものがある。

#### 基質

基質は微細な非晶質火山砕屑物で構成されている。

#### その他

火山砕屑岩は構成物質の粒度で分類され、粒径が32～4mmの火山砕屑岩は火山礫凝灰岩、32mm以上のものは凝灰角礫岩、4mm以下のものは凝灰岩と呼ばれる。

#### (4) まとめ

櫛引町西荒屋付近の地質に関する情報は得られていないが、新第三系中新統の善宝寺層・大山層(鶴岡地域)、大綱層(湯殿山地域)、立谷澤層(月山地域)と呼ばれる地層が分布する地区で、本結果を評価するにあたってはこれらの地層との対比が必要である。なお、資料8の凝灰質砂岩の表面には植物化石が含まれている。上記の地層はいずれも台島型植物化石を含む地層として知られている。

従来の記載によれば、善宝寺層はおもに酸性～中性の火山礫凝灰岩・凝灰質砂岩・泥岩からなり、輝石安山岩・礫岩を伴う。一般に下部は泥岩・砂岩が多く、上部は凝灰岩が多い。大山層は善宝寺層を覆う地層で、下～中部は酸性～中性の凝灰質砂岩・泥岩からなり、火山礫凝灰岩を挟む。上部は酸性～中性の火山礫凝灰岩・凝灰角礫岩を主とし、凝灰質砂岩・泥岩を挟む。

大綱層は、下部はおもに安山岩～玄武岩質の火砕岩で構成され、上部は軽石質凝灰岩・凝灰質砂岩・シルト岩からなる。

立谷澤層は、下部は凝灰質砂岩・シルト岩互層と軽石質凝灰岩、上部は灰～黒色泥岩で構成される地層である。

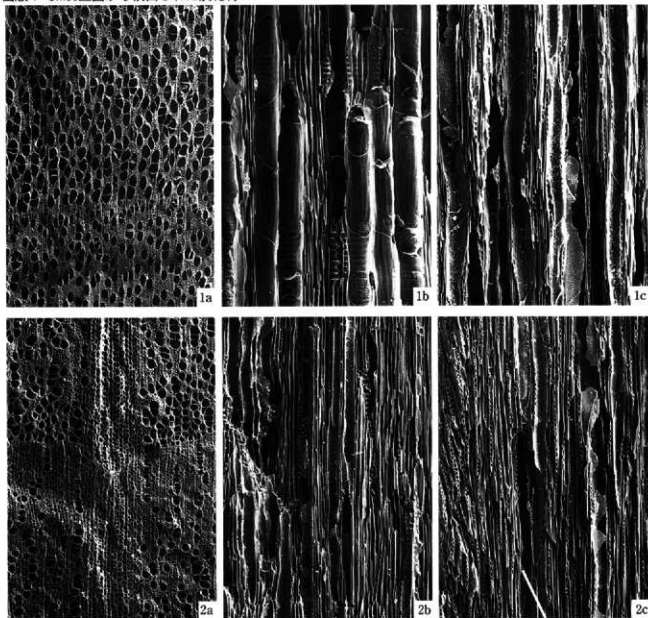
いずれにしても、今回試料とした五輪塔の石材は、上記のいずれかの層から得られた可能性がありそうである。

#### 〈引用文献〉

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』、p.28-36
- Bowen, H. J. M. (1983) 『環境無機化学—元素の循環と生化学—』。浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [Bowen, H. J. M (1979) *Environmental Chemistry of Elements*].
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M. (1980) 『土壌の化学』。岩田進午・三輪晋太郎・井上隆弘・關 捷行訳, 309p., 学会出版センター [Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. (1976) *SOIL CHEMISTRY*], p.235-236.
- 土壌標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壌標準分析・測定法, 354p., 博友社。
- 土壌養分測定法委員会編 (1981) 土壌養分分析法, 440p., 養賢堂。
- 平井信二 (1979-1980) 木の事典 第1巻・第4巻, かなえ書房。
- 藤貫 正 (1979) カルシウム・地質調査所化学分析法, 52, p.57-61, 地質調査所。
- 川崎 弘・吉田 澤・井上恒久 (1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』、p.23-27。
- 北村四郎・村田 源 (1971, 1979) 原色日本植物図鑑 木本編 <I・II>, 435p., 545p., 保育社。
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 第1巻, 411p., 産業図書。

- 中野益男 (1989) 残留脂肪酸による古代復元, 第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『講演収録集 新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, p.114-131, クバプロ.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会編 (1984) 土壌調査ハンドブック. 156p., 博友社.
- 竹迫 敏・加藤哲郎・坂上寛一・黒部 隆 (1980) 神谷原遺跡への土壌学的アプローチ. 「神谷原 I」, p.412-416, 八王子市門田遺跡調査会.
- 竹迫 敏 (1993) リン分析法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法 2 研究対象別分析法」, p.38-45, 東京大学出版会.
- 千野裕道 (1991) 縄文時代に二次林はあったか 一遺跡出土の植物性遺物からの検討一. 東京都埋蔵文化財センター研究論集, X, p.215-249.
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター (1993) 権引町 柳沢A遺跡 調査説明資料.

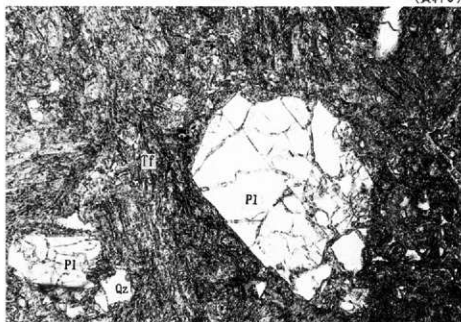
図版 I SM50上面から検出された炭化材



1. ヤナギ属の一種  
2. ハンノキ属の一種  
a: 木口, b: 芯目, c: 板目

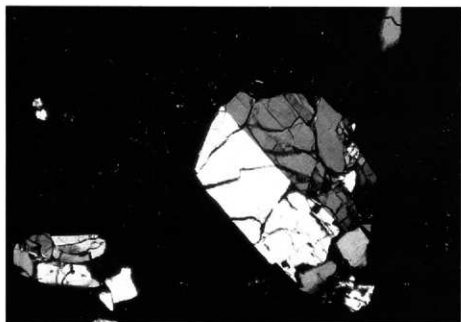
200 $\mu$ m : a  
200 $\mu$ m : b, c





下方ポーラー

0.5mm

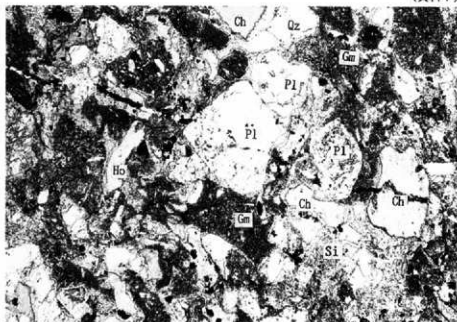


直交ポーラー

0.5mm

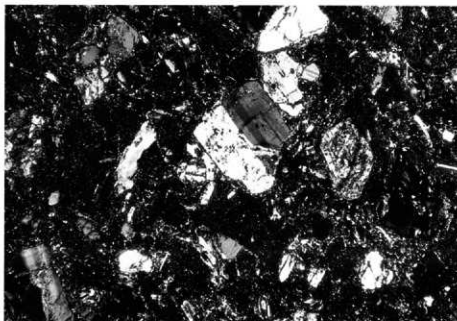
図版 3 薄片顕微鏡写真

(資料 7)



下方ポーラー

0.5mm



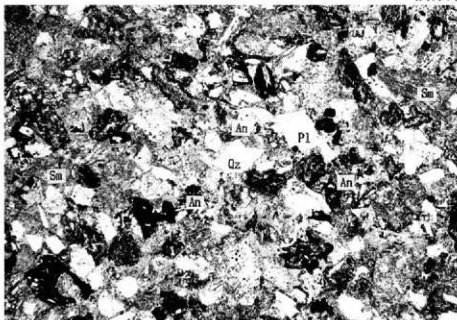
直交ポーラー

0.5mm



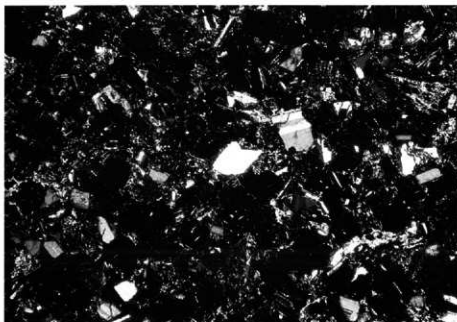
図版4 薄片顕微鏡写真

(資料8)



下方ポーラー

0.5mm



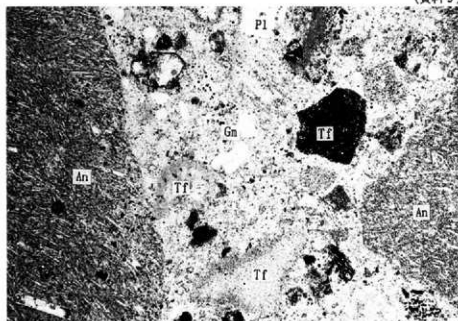
直交ポーラー

0.5mm



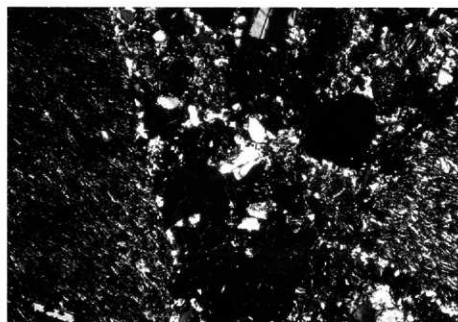
図版5 薄片顕微鏡写真

(資料9)



下方ポーラー

0.5mm



直交ポーラー

0.5mm





图 版





仲台遺跡空中写真(上空から)





仲台遺跡空中写真(北から)



遺跡遠景(東から)



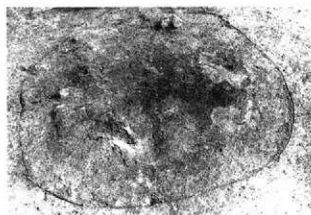
遺跡近景(栗山遺跡より)



ST I 住居跡検出状況(東から)



ST I 住居跡完掘状況(東から)



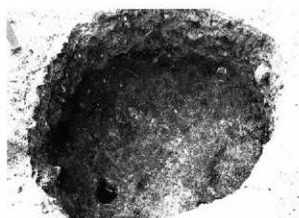
SK 3 検出状況(北から)



SK 3 半載状況(北から)



SK 3 遺物出土状況(北から)



SK 3 完掘状況(北から)



SK 3 遺物出土状況(北から)

図版 6



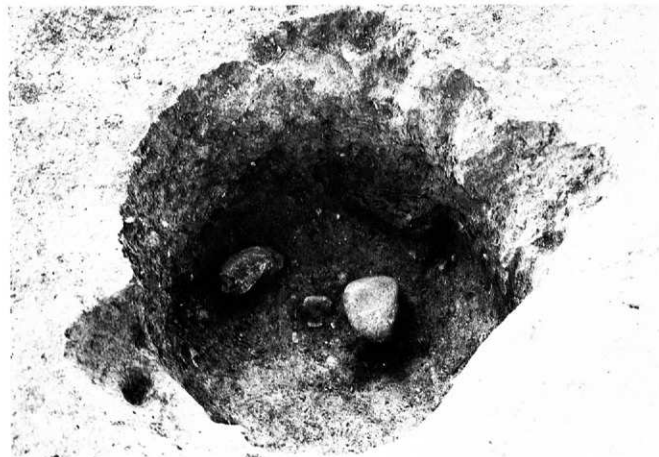
SK 4・5 半載状況(東から)



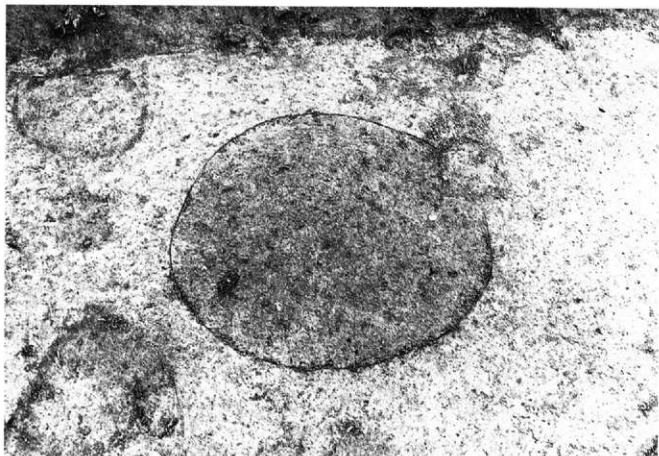
SK 4・5 発掘状況(東から)



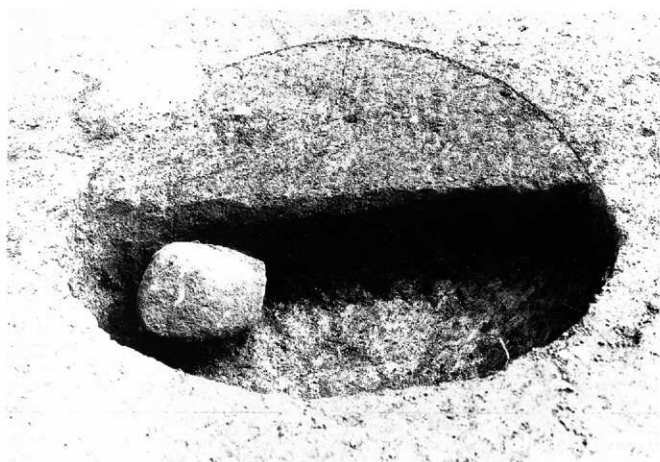
SK 6 検出状況(東から)



SK 6 発掘状況(東から)



EL 7 検出状況



EL 7 半截状況



EL42検出状況



EL42復元状況

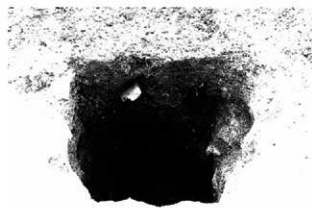




ST1 尹跡



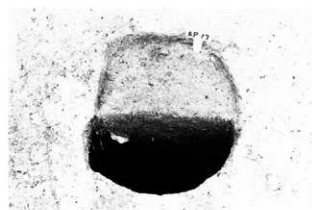
SK13



EP12



EP15



EP17



EP18



EP38



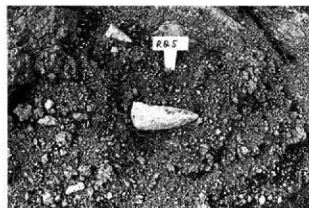
EP44



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



A地区基本層序



B地区基本層序



B地区発掘状況(南から)



調査区発掘状況(南端から)



トレンチ調査風景



8地区調査風景(南から)

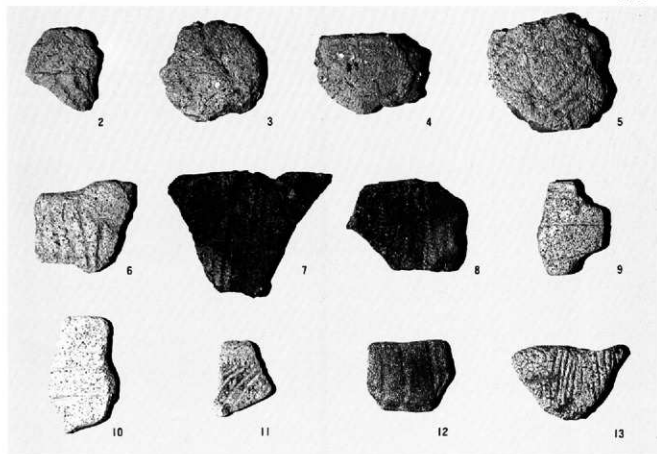


発掘体験学習会

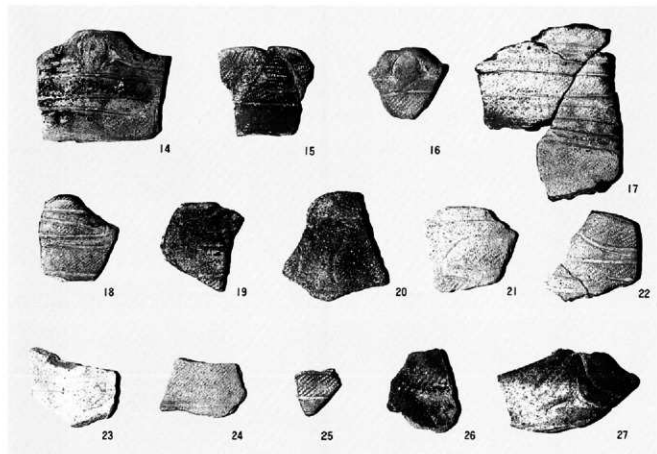


発掘体験学習会



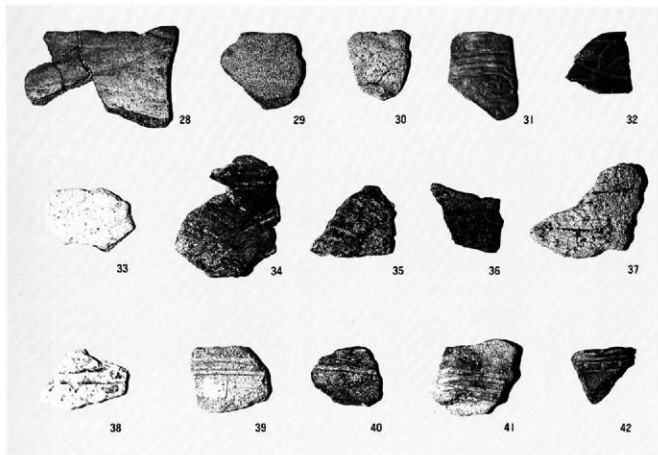


遺物

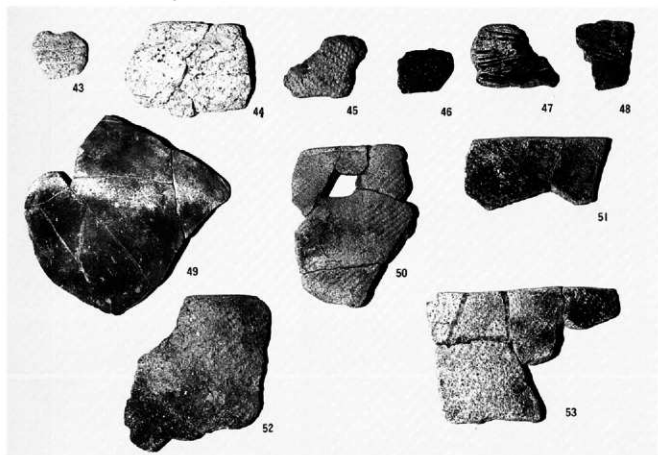


遺物

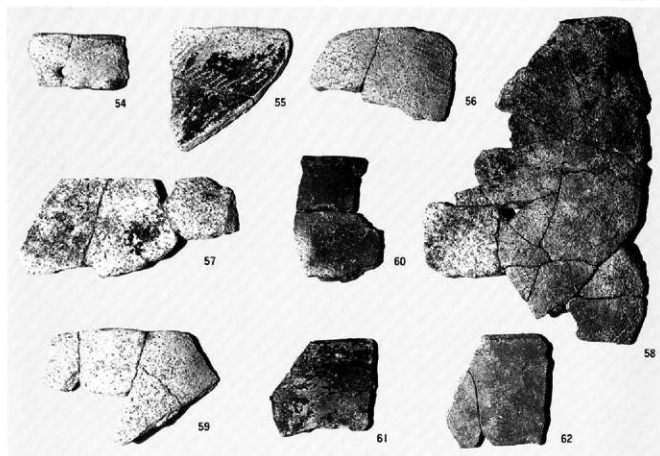




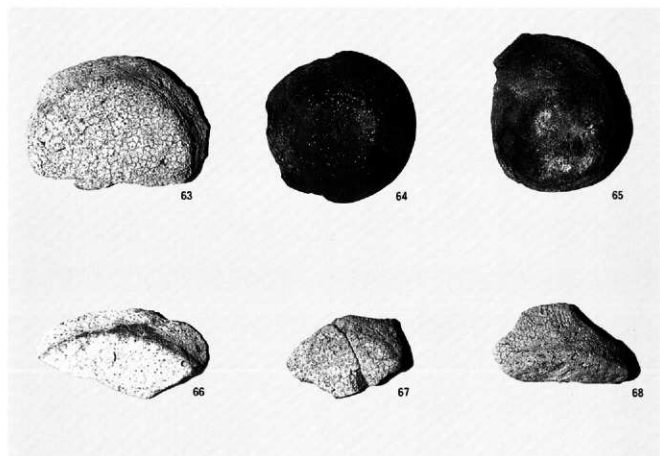
遺物



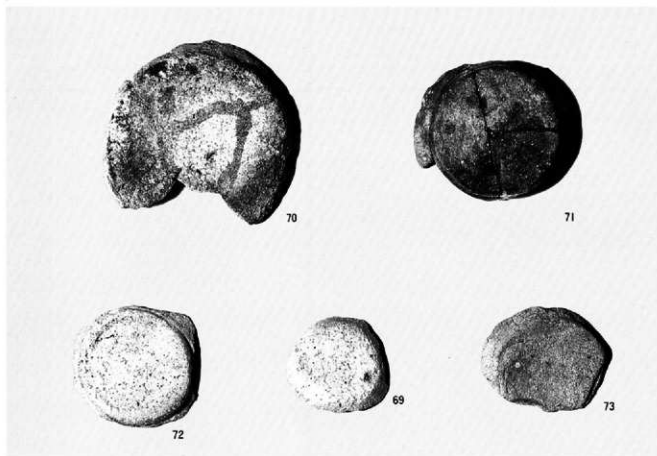
遺物



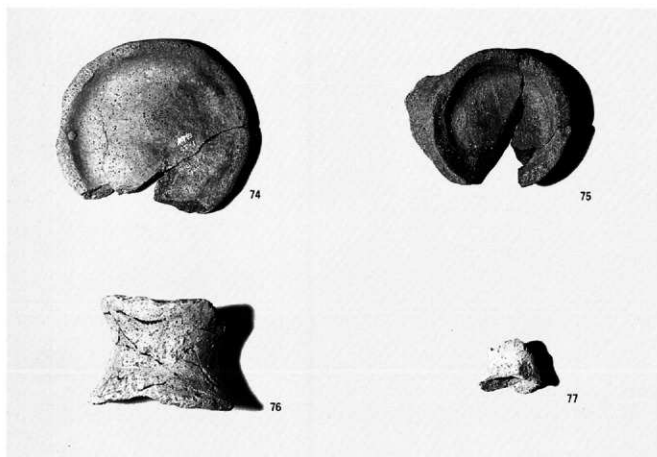
遺物



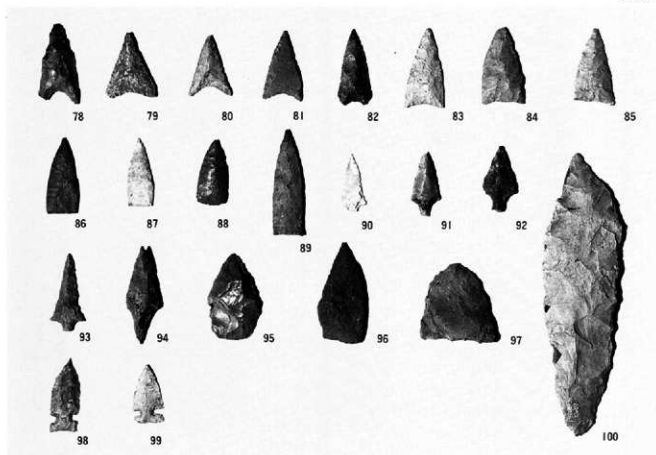
遺物



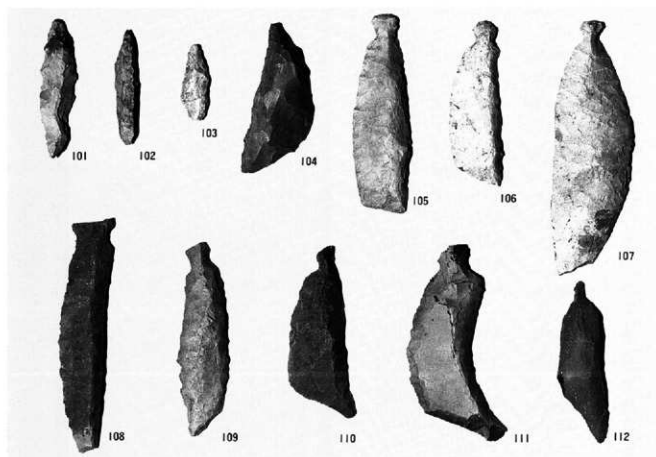
遺物



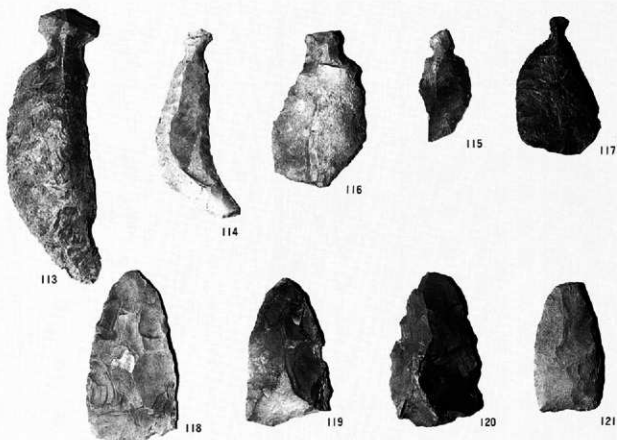
遺物



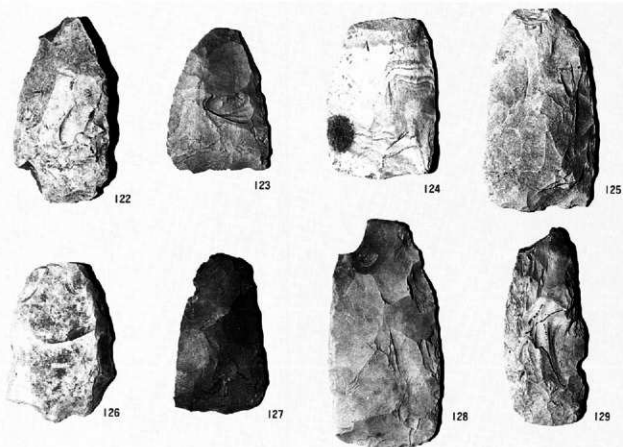
遺物



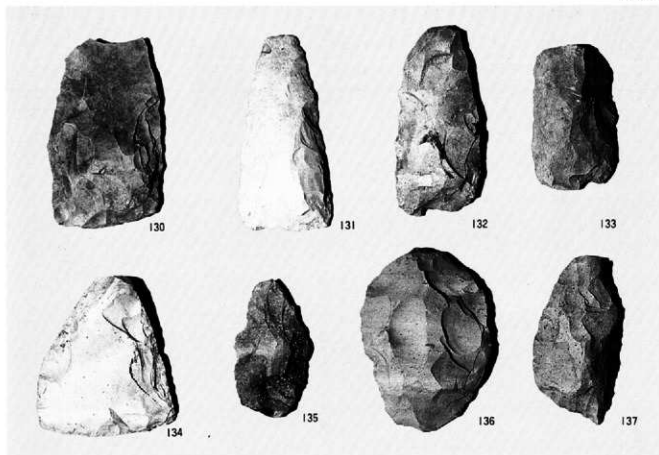
遺物



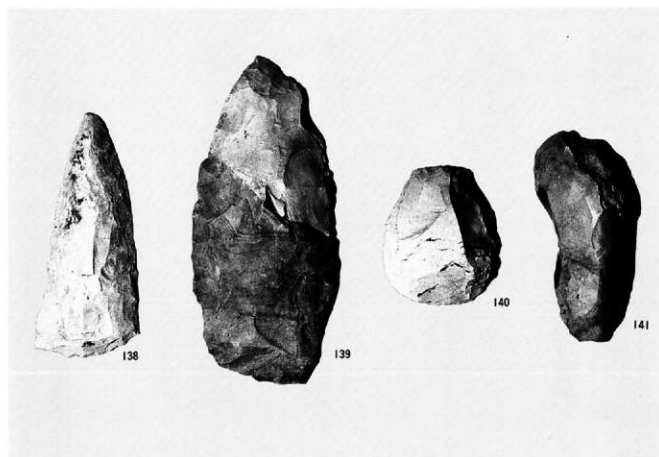
遺物



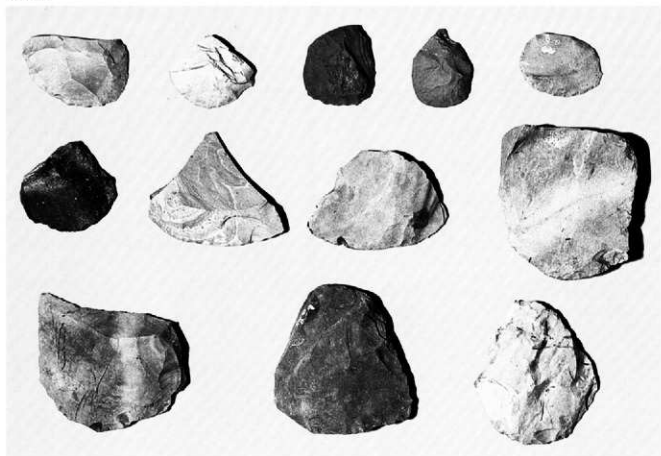
遺物



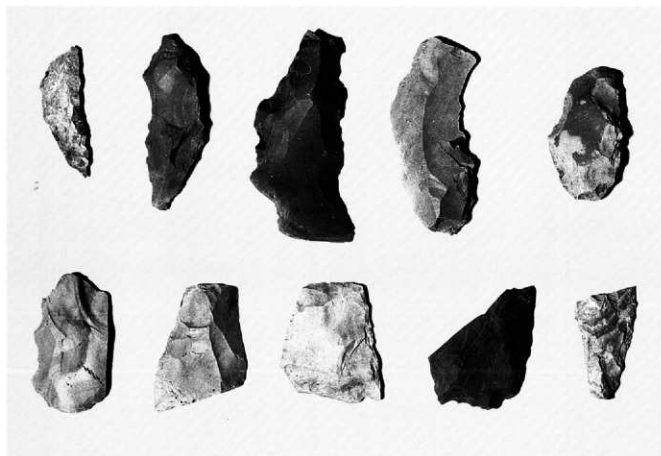
遺物



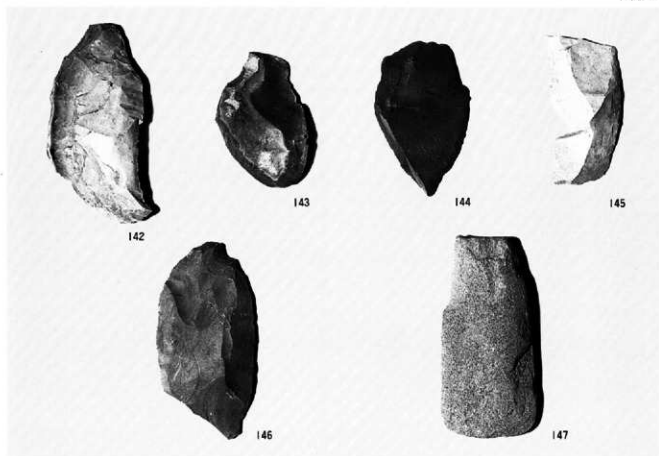
遺物



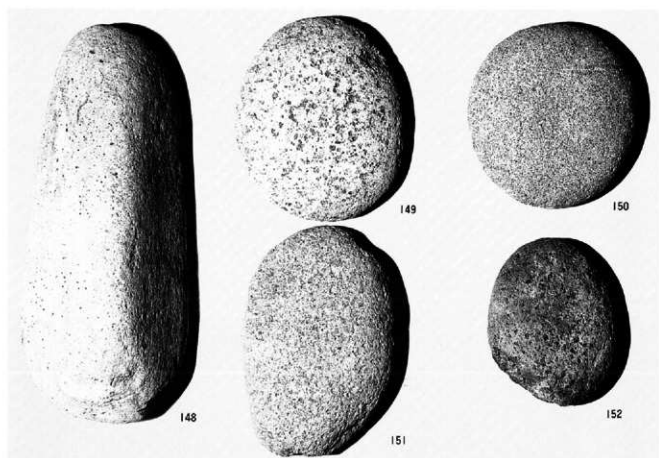
遺物



遺物

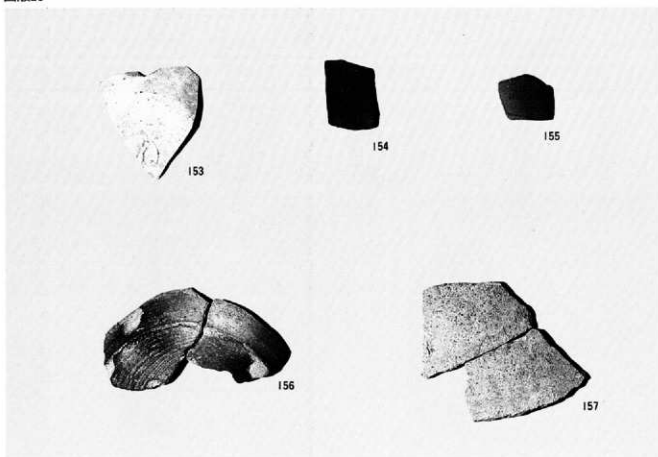


遺物

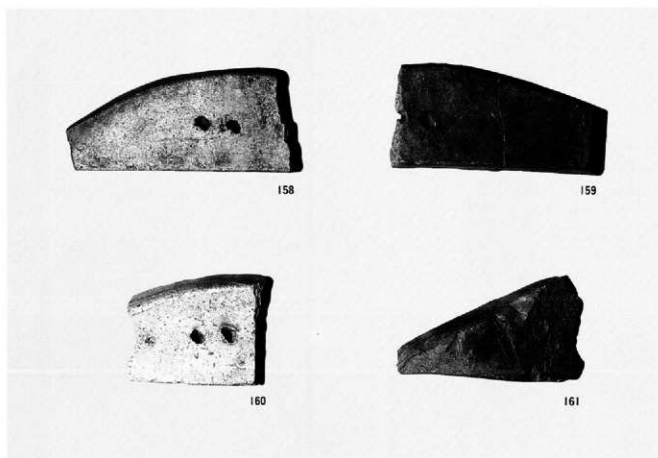


遺物





遺物



遺物



遺跡遠景(南から)



第1調査区全景(北西から)



175 第1調査区a-a'基本層序(北東から)



第2調査区基本層序C地点(西から)



第1調査区トレンチ掘り作業風景(北西から)



第1調査区表土除去・面整理事業風景(北西から)



第1調査区グリッド設定・記録作業風景(北西から)



第1調査区面整理事業風景(北東から)



第1調査区ST16付近精査風景(西から)



第1調査区25-27-59-62グリッド遺構群(北西から)



調査説明会風景(西から)



第1調査区北東部遺物集中出土状況(南から)



ST16完掘状況(北西から)



ST16プラン検出状況(西から)



EL18出土状況(西から)



ST16南北トレンチ土層断面(西から)



EL34検出状況(南から)



ST15完備状況(東から)



ST15プラン検出状況(北から)



ST15床面検出状況(北から)



ST15南北ベルト土層断面(西から)



ST15北東隅礫出土状況(南西から)



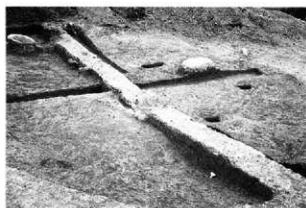
ST15東西ベルト中央土層断面(北から)



ST15EP105炭化物出土状況(南西から)



ST14プラント検出状況(南から)



ST14東西ベルト土層断面(北西から)



ST14-EL153検出状況(南東から)



ST14完縮状況(西から)



柱穴群(北から)



SP24土層断面(北西から)

図版32



ST50プラン検出状況(東から)



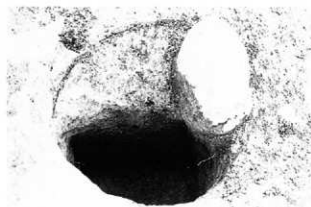
ST50東西ベルト土層断面(東から)



ST50南北ベルト土層断面(北西から)



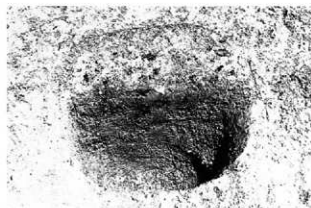
ST50中央焼土検出状況(南西から)



ST50EP64半載状況(南から)



180 ST50焼土・土器(第32図1・2)出土状況(西から)



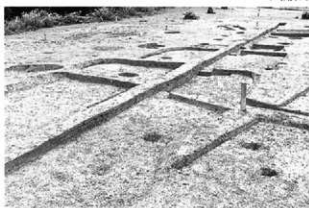
ST50EP67半載状況(南西から)



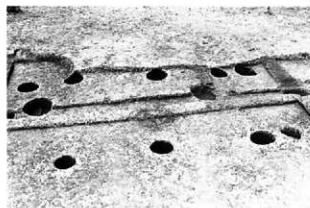
ST50完掘状況(西から)



25~27-59~62Gプラン検出状況



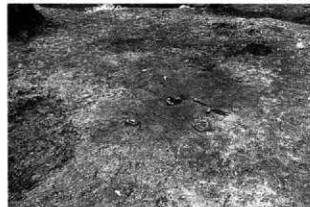
25~27-59~62G遺構群土層断面(東から)



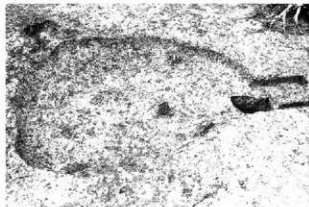
25~27-59~62G遺構群土層断面(西から)



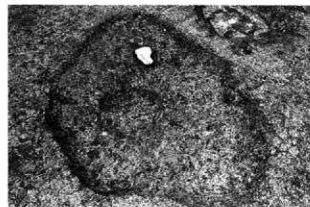
25~27-59~62G完掘状況(西から)



SK19プラン検出状況(東から)



SK19完掘状況(西から)



SK20完掘状況(西から)



EUI75出土状況(北から)

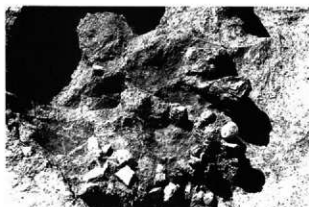




SK13プラン検出状況(南から)



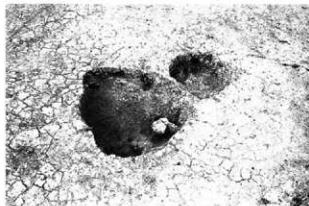
SK13土層断面(南から)



SK13土器出土状況(南西から)



SK13石鏃(第36図5)出土状況(南から)



SK13穴掘状況(南から)



SK17プラン検出状況(北西から)



SK17土層断面(南から)



SK17穴掘状況(西から)



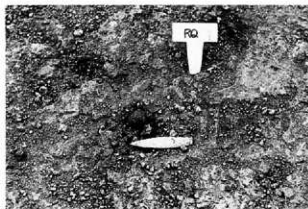
第2調査区 全景(北西から)



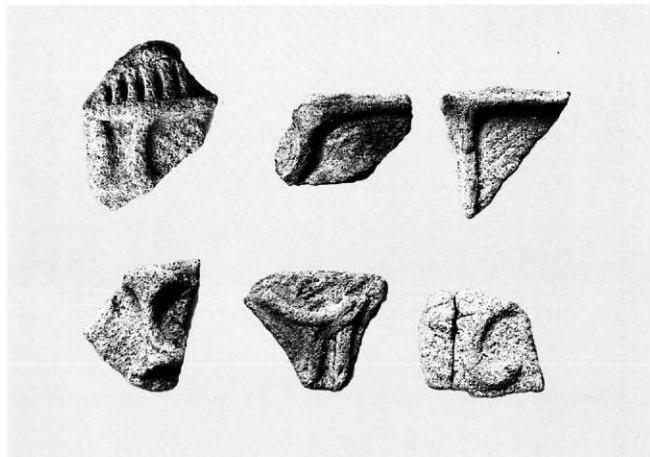
第2調査区整理作業およびプラン検出状況(北から)



第2調査区基本層序D地点(北西から)



183 尖頭器(第36図1)出土状況



ST15出土土器 第34図2(上左) 第34図3(上中央)



第32圖 1



第32圖 4



第32圖 5



第32圖 3



第32圖 2



第33圖 1



第33図 2



第34図 4



第34図 5

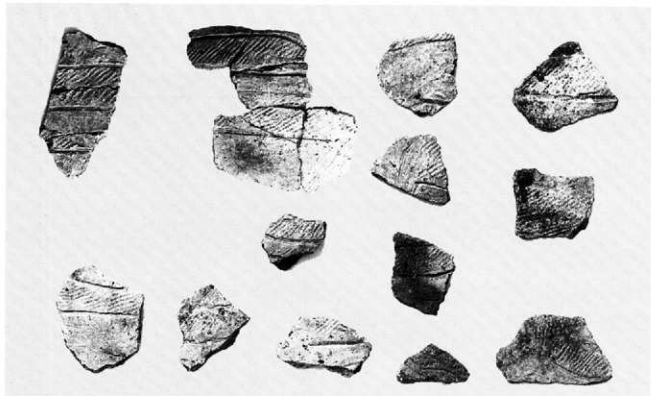


第34図 1



第34図 6

第34図 7



S K 13出土 第35図



第35図 7



第35図 8



第35図 1



S P 24出土



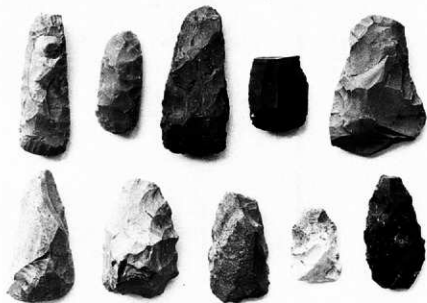
第36図 1・2・3・4・5



第36図 6・7



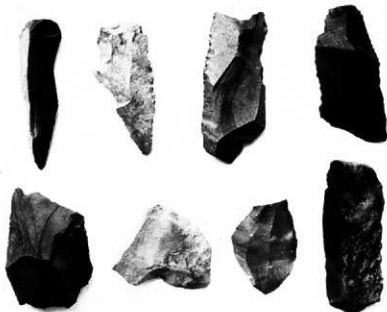
第36図 8・9



第36図 10・11・12・13・14  
15・16・17・18・19



第37図 1・2・3・4・5



第37図 6・7・8・9・10・11・12・13



第37図 14



第38図 1



第38図 2



第38図 3



第38図 4



第38図 5



第38図 6



第38図 7



第38図 8



第38図 9



第38図 10



第38図 11



第38図 12



第38図 13



第38図 14



遺跡遺景(南東から)



第1調査区調査前風景およびトレンチ掘り作業(南西から)



第1調査区全景(南北から)



第1調査区基本層序a-a'(北西から)



第1調査区作業風景(北東から)





SK I 土層断面(北東から)



SK I 完掘状況(北東から)



SK II 土層断面(北西から)



SK II 精査作業状況(西から)



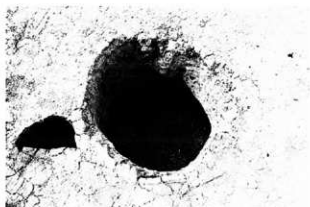
SK II 完掘状況(北面から)



SK 13 土層断面(西から)



SK 13 精査作業状況(西から)



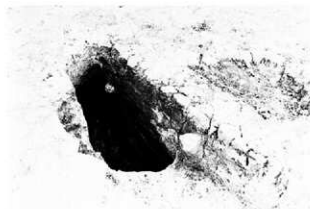
SK 13 完掘状況(北東から)



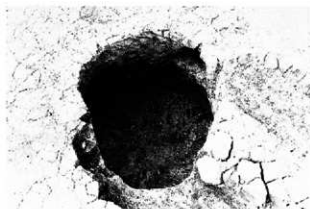
SK18土層断面(南東から)



SK18発掘状況(南から)



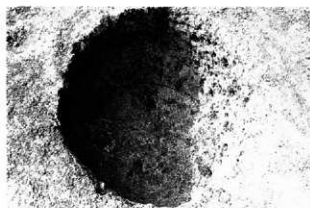
SK22土層断面(西から)



SK22発掘状況(南東から)



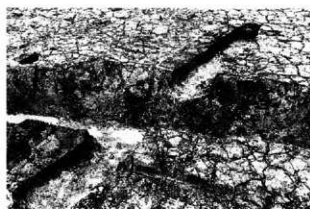
SK24土層断面(南から)



SK24発掘状況(東から)



SK29土層断面(西から)



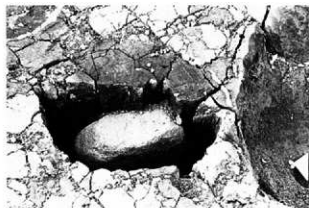
SK32半截状況(北西から)



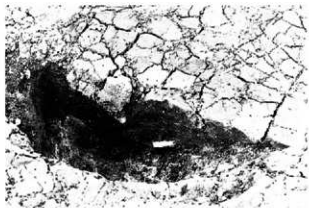
SK3半截状況(西から)



SK3完掘状況(西から)



SP33半截状況(東から)



SP25土層断面(東から)



第2調査区全景(南東から)



第2調査区調査前全景(北から)



第2調査区全景(北西から)



第2調査区トレンチ掘り作業と蔵王山(南から)



第2調査区B区面前り作業(西から)



第2調査区C区記録作業(北から)



第2調査区基本層序a-a'(東から)



第2調査区基本層序b-b'(南東から)



第2調査区B区北壁土層断面(南から)



第2調査区A区面削り作業とSM50(北西から)



SM50の記録作業(北西から)



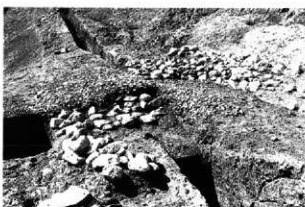
SM50上面小礫出土状況(南東から)



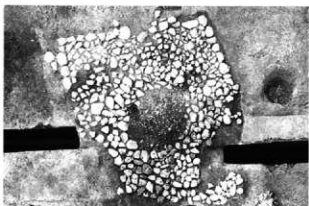
SM50小礫掘り下げ状況(南東から)



SM50方形集石出土状況(西から)



SM50小礫掘り下げ状況(北西から)



SM50方形集石検出状況(空中撮影)



SM50中央窪み掘り下げ状況(南東から)



SM50方形集石掘り下げ状況(南東から)



SM50方形集石下面曝出土状況(南東から)



SM50中央部掘り込み状況(空中撮影 上方が南)



SM50珠洲系陶器出土状況(東から)



SM50土層断面a-a'南半(南東から)



SM50土層断面a-a'北半(西から)

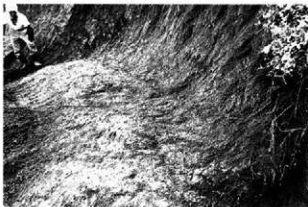


SM50土層断面b-b'西半(北から)



SM50土層断面b-b'東半(東から)

図版48



SM50南東部周溝掘出状況(西から)



SM50周溝完掘状況(西から)



第2調査区C区壘集積状況(南西から)



第2調査区B区壘集積出土状況(西から)



第2調査区B区精査状況(北西から)



第2調査区B区壘集積精査状況(北東から)



鶴岡北高等学校生徒現場体験学習(第1調査区)



調査説明会風景(SM50にて)



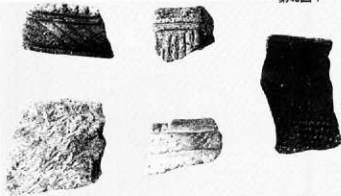
第45図 2



第45図 1



第46図



第46図 2・3・4・5・6



第46図 7



第45図 4

第45図 3



第46図 8 (S = 1 : 2)





第47図 1・2・3・4・5・6



第47図 7・8・9・10



第48図 1



第48図 2



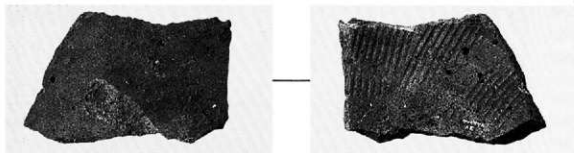
第48図 4



第48図 5



第48図 3



第51図2 (S = 1 : 2)



第51図1 (S = 1 : 3)



第51図1の重石 (S = 1 : 3)



S M50出土紙状炭化物



第52図1



第52図2



参考資料羽黒町高寺出土  
致道博物館所蔵



鶴岡市青龍寺所蔵  
五輪塔板碑



同左



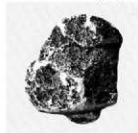
第56図



第57図



第53図 1



(1)



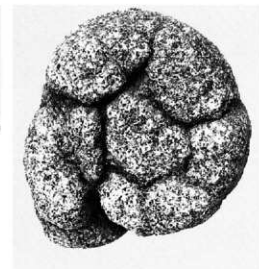
(2)



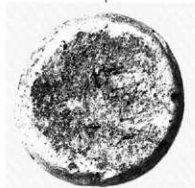
(3)



第53図 4



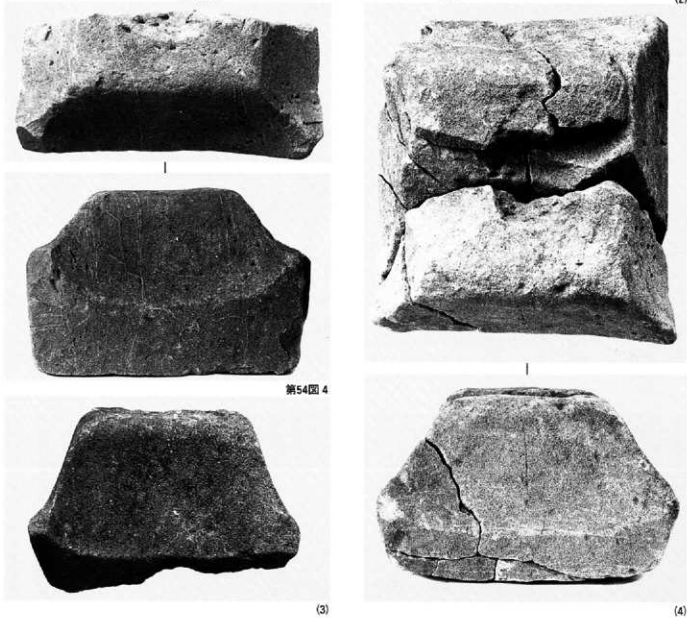
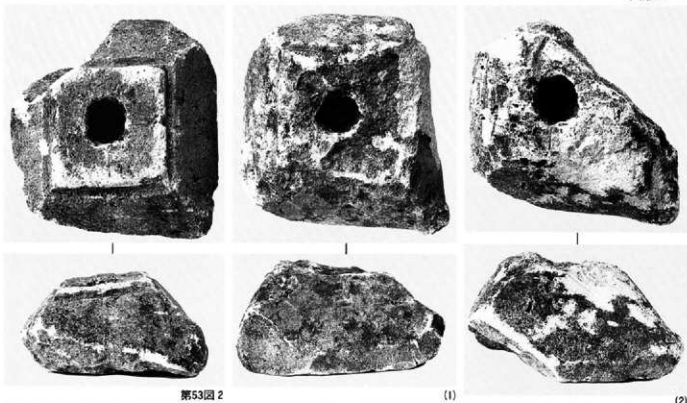
(4)



第53図 3



(5)





第54図 3

第54図 2

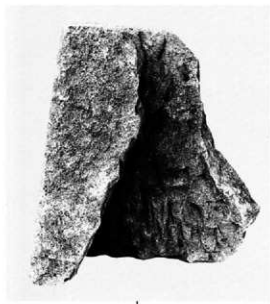


(1)

(2)



第54図 1



第55図 1



(3)



第55図 2



(2)

(1)



(3)

第55図 3







---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第6集

仲台遺跡 梁山遺跡 柳沢A遺跡  
発掘調査報告書

1994年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号  
電話 0236-72-5301  
印刷 藤庄印刷株式会社

---

